



TITLE:

カーピシー=ガンダーラ史研究(  
Dissertation\_全文)

AUTHOR(S):

桑山, 正進

---

CITATION:

桑山, 正進. カーピシー=ガンダーラ史研究. 京都大学, 1986, 文学博士

ISSUE DATE:

1986-05-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.r5931>

RIGHT:

カービシーカシタラ史研究

第三册

新  
星  
68  
京大附図



注

注

# 序章

- (1) J. Irwin, The Stūpa and the Cosmic Axis: the Archaeological Evidence, South Asian Archaeology 1977, Naples, 1979, p. 799f.
- (2) W. C. Peppé, The Piprahwa stūpa, containing relics of Buddha, JRAS, 1898, p. 573f., B. P. Sinha and S. R. Roy, Vaiśālī Excavations 1958-1962, Patna, 1969.
- (3) 無憂王所建といーストウーパは曰大唐西域記 卷一カーピシーの比羅娑洛山以東

にある。カーベシーにはこの一基、ナガラハーラに三基、カンダラに五基、ラッデーヤーナに二基、タキシラに三基をかぞえる。

(4) A. Ghosh, Taxila (Sirkap) 1944-1945, Ancient India, No. 4 (1948) はマーシヤルの発掘したシルカプ市街を「王宮」から東へ市壁にかけてトレンチを入ル、地山の上には石積の市壁が建設され、このことを確認した。マーシヤルは石積の市壁でかこ

まいた市域の北門附近で、市壁の下にも二つの建築期があることを確認していた。ゴーシユの発掘は市域の中央部、北門の南方であった。したがって、マーシヤルの入ったトレンチとゴーシユの入ったトレンチとの間に、市壁をきづく以前のシルカプの古い町の南限があることになる。ゴーシユは市壁を建設してから、市壁建設時代を含めて四つの建築期があることも確かめた。その時期を下からI



ⅠⅣ期とⅠ、市壁建設期であるⅠ期と紀元前一世紀中頃から紀元前後、それからⅡ、Ⅲ、Ⅳとそれより五〇年単位で割りつけたのである。その手がかりには各期で出土したクシヤーン貨を用いたが、これは、マーシャルの年代観と大いに異なる。マーシャルは市壁以後をやはりⅣ期に区分し、最初期をアゼス一世紀の初期ヤカ時代、次を後期ヤカ時代、次をパルティア時代とし、最上層の時代を初期

1457

クシヤーンとしたのである。就中、下から三番目のⅡ期へマーシャルは上をⅠ、下をⅣとするを一世紀前半とし、シルカツのもっとも繁栄した時代と見た。この時期に六基のストウーパがある。ゴーシユの編年に當ると、Ⅲ期へ本文中では第三期と表現しておいた。二世紀前半である。本文中でのべたように、ゴーシユの年代観はストウーパから見た年代観によく整合するので、筆者はゴー

1458

シニ 編年と一應信頼 113.

(5) J. Marshall, Taxila, Cambridge, 1951, Vol. I, pp. 142-145.

(6) J. Marshall, Taxila, p. 146.

(7) J. Marshall, Taxila, p. 163-165.

(8) J. Marshall, Taxila, p. 167

(9) J. Marshall, Taxila, p. 191-192.

(10) J. Marshall, Taxila, p. 173-174

(11) J. Marshall, Taxila, p. 236 f. 桑山正進「  
タキシラ佛寺の伽藍構成」(『東方學報

1459

『京都第四六冊、一九七四年』三三一  
頁以下、並に挿圖2参照。

(12) 桑山正進『東方學報』『京都第四六冊』三  
三二頁。

(13) D. Schlumberger et P. Bernard, Ai' Khanoum,  
Bulletin de Correspondence Hellénique, tome  
89 (1965), pp. 598 f., P. Bernard, Fouilles  
d'Ai' Khanoum, I, Memoires de la Délégation  
archéologique française en Afghanistan,  
tome 21, pp. 18-25, pls. 21-28.

1460

- (14) P. Bernard, MDFA, tome 21, p. 25-49, p. 63-83.
- (15) P. Bernard, Chapiteaux corinthiens hellénistiques d'Asie Central découverts à Ai Khanoum, Syria, tome 45 (1968), p. 111-151.
- (16) P. Bernard, Quatrième campagne de fouilles à Ai Khanoum (Bactriane), Comptes Rendus d'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres (CRAI 以後略稱), 1969, p. 327-353, CRAI, 1970, p. 317-339, CRAI, 1971, p. 414-431.
- (17) CRAI, 1968, p. 272-276. CRAI, 1975, p. 189 f.

1461

- ギムナシオン・ゴドリス式柱頭が出土したことを傳えている。
- (18) J.-C. Gardin, CRAI, 1971, p. 447f.
- (19) 詳くは、桑山正進「柱礎と壺とヒンドゥー・グシュル（カスパース・デザイン）『一九六九年—一月特集号』、九六一〇〇頁。
- (20) D. Schlumberger, The Excavation at Surkh Kotat and the Problem of Hellenism in Bactria and India, The Proceedings of the British Academy,

1462



Vol. 47 (1961), p. 79-95, CRAI, 1953-1963,  
JA, 1952-1964, D. Schlumberger, M. Le Berre,  
G. Fussman, Surkh Kotal en Bactriane, I-Le  
Temples: architecture, sculpture, inscriptions,  
MDAFA, tome 25, Paris, 1983.

(21) I. T. Kruglikova, Dilbardjin (raskopi 1970-1971),  
Moskva, 1974, p. 16-82.

(22) 水野清一編 ロドゥン・テペとラルマ  
丘、京都、一九六八年、四五-四七頁。

(23) 水野清一編 ロチャカラフ・テペ丘、京都、

一九七〇年、九七一-一〇一頁。

(24) B. Stavisky, Buddysky Kultoby tsentr Kara-Tepe  
v Starom Termeze 1965-1971, Moskva, 1972,  
Tab. I,

(25) G. A. Pugachenkova, Khalehayan, Tashkent, 1966,  
p. 132.

(26) A. Cunningham, Archaeological Survey of India  
Report for the Years 1872-73, Vol. 5, Calcutta,  
1875, p. 70 f.

(27) J. Marshall, Taxila, p. 222 f.

(28) ナーガルジュナコンダでは放射壁の数とストウパー直径が正比例するとみられた。だが直径は多数が一メートル内外で、最大のものでも七メートルにすぎない。ハッサルカルは、構造物の節約が車輪状構造を採用させ、結局佛教理念の車輪と結びついてここで盛行したという。同心圓と放射壁との組み合わせ方をみると、タキシウヤガンダラより強くローマ技術の迹も考えることができ。アリカメ

1465

- ドウ出土品や南インドにおけるローマ貨幣の出土も考えあわせ、より直接にローマ文化とかがわったあとが、ナーガルジュナコンダの建築にあらわれていると解する。→ H. Sarkar, Some Aspects of the Buddhist Monuments at Nāgarjunakonda, Ancient India, No. 16 (1960), p. 78 f.
- (29) D. S. Robertson, Greek and Roman Architecture, Cambridge, 1943, p. 265-266.
- (30) R. G. Collingwood and I. Richmond, The Archae

1466

ology of Roman Britain, London, 1969, p.170f.

(31)

カウシヤーインヒューのゴビタラーマニフ

「トハ」 Indian Archaeology 1955-56 3'レー

ジエギルのジージアカムラガアナニク

「トハ」 Indian Archaeology 1954-55 3'ヒ。

(32)

D. R. Sahni, Archaeological Remains and Excavations at Bairat, Jaipur, 1937, S. Piggot, The Earliest Buddhist Shrines, Antiquity, Vol.17,

No.65 (1943), p.1f.

(33)

西インド石窟寺院の基本文獻は「J. Fergusson

1467

and J. Burgess, The Cave Temples of India,

London, 1880 「にあるが」近年、編年をふた

えた報告ニフが公刊された。V. Dehejia,

Early Buddhist Rock Temples, A Chronological

Study, London, 1972 又 S. Nagara ju, Buddhist

Architecture of Western India, Delhi, 1981 「

ある。一カー、兩者の年代觀は、前期の

はじまりを前者が前一〇年におき、前

二〇年あたりを終末とみ、このに對し、後

者は前二五〇年から前五〇年に前期をわ

1468



りあて、はなはだしく異なっている。  
 のちがいの原因のひとつは、後者が放射性炭素による年代決定を採用したことにある。本論ではデヘジアに従った。

- (34) バイラート、パウニー (S. B. Deo and J. P. Joshi, Pauri Excavation 1969-70, Nagpur, 1972) とみよ。

- (35) 以下タキシラにおける佛寺の変遷については、注(11)桑山正進論文を基にしている。

- (36) J. Marshall, Taxila, Vol. I, p. 322f.

- (37) R. Ch. Kak, Ancient Monuments of Kashmir, London, 1933, p. 146f.

- (38) G. Tucci, Preliminary report on an archaeological survey in Swat, East and West, Vol. 9, No. 4 (1958), p. 280.

## 第一章

(1) リトヴィンスキーは一九六八年のドゥーシャンベにおける研究発表で、佛教が紀元前よりバクトリア、マルギアナに入っていたことをのべている。点とーの佛教があつたことは否定できないが、佛教が廣範に信仰の対象となり、また教養が研究されるごくとき状態については大いに疑問である。詳しくは、B. A. Litvinsky,

Outline History of Buddhism in Central Asia,

1471

International Conference of the History, Archaeology and Culture of Central Asia in the Kushan Period, Dushanbe, 1968. B. A. Литвинский, Распространение буддизма в Средней Азии, Central Asia in the Kushan Period, Vol. II, Moskva, 1975, pp. 191-197.

(2) 以下、大正五〇などとしたのは、大正新脩大藏經四卷五〇の省略である。三二三とあるのは頁、a b<sup>c</sup>などは頁の上、中下段をそれぞれ指す。

1472

- (3) A. M. Simonetta, *The Chronology of the Gondophaean Dynasty, East and West*, Vol. 28, Nos. 1-4 (1978), pp. 155-188; B. Goldman, *Parthians at Gandhāra, East and West*, Vol. 28, Nos. 1-4 (1978), pp. 189-202.
- (4) 高僧傳 卷四の冒頭に朱士行の傳記がある。朱士行、潁川人。……昔漢靈之時。竺佛朔譯出道行經。卽小品之舊本也。文句簡略。意義未周。士行嘗於洛陽講道行經。覺文章隱質。諸未盡善。每歎曰。此

1473

經大乘之要。而譯理不盡。誓志捐身。遠求大本。遂以魏甘露五年。發迹雍州。西渡流沙。既至于闐。果得梵書正本凡九十章。遺弟子不(弗)如檀。此言法饒。送經梵本。還歸洛陽。……遂得送至陳留倉恒水南寺。時河南居士竺叔蘭。本天竺人。父世避難。居于河南。蘭少好遊獵。後經暫死。備見業果。因改勵專精。深崇正法。博究衆音。善於梵漢之語。又有無羅叉比丘。西域道士。稽古多學。乃手執梵本。

1474



叔蘭譯爲晋文。稱爲放光波若。皮牒故本  
今在豫章。……士行遂終於闐。春秋八  
十。依西方法。闡維之。……

- (5) Sh. Kuwayama, *Kāpiśi and Gandhāra according to Chinese Buddhist Sources, Orient*, Vol. 18 (1982), p. 133. に往來佛僧の大體の數を揭示してある。なおこの一文は一九八二年一月、カールにおいて開催された The 5th International Conference for Kushan Studies において發表したものの

1475

をやや増廣したものである。

- (6) A. F. Wright, *Fo-tu-têng 佛圖澄: A Biography, Harvard Journal of Asiatic Studies*, Vol. 2, Nos. 3-4 (1948), pp. 321-371. P. Pelliot, *BEFEO*, t. 3 (1903), p. 100 (E. H. Parker, *The Ephthalite Turks, Asiatic Quarterly Review*, April, 1902 の批評)。

- (7) 月氏北山は les monts septentrionaux des Yü-tche と譯され、以外にその地理上の位置について触れたものを聞かない。カンダ

1476

イラの西、ジャラーバード一帯は古くにナガラハラーとよばれたが、これを月氏國とする資料が散見される。たとえば『高僧傳』卷三曇無竭傳に、「縁河西。入月氏國。禮拜肉髻骨。……」(大正五〇、三三八〇)など。「ナガラハラーの北方の山」とみられる。前記佛譯は Robert

Shih, Biographies des moines éminents (Kao Seng Tchouan) de Houei-kiao, traduites et annotées, Première partie: Biographies des

1477

Premiers traducteurs, Bibliothèque du Muséon, Vol. 54 (Université de Louvain, Institut Orientaliste), Louvain, 1968, p. 63 を参照。

(8) 塚本善隆「佛教史上における肇論の意義」(『肇論研究』一九五四年)。

(9) S. Lévi, Note additionnelle; Le Kipin, situation et historique, Journal Asiatique, 1895, pp. 371-384; Id., Note rectificative sur le Kipin, Journal Asiatique, 1896, pp. 161-162;

1478

Id., Note additionnelle sur les Indo-scythes,  
Journal Asiatique, 1897, p. 529, f.n. 2

(10) 白鳥庫吉「罽賓國考」(『東洋學報』第  
七卷第一號、一九一七年)

L. Petech, Northern India according to the  
Shui-ching-chu, Serie Orientale Roma, II,  
Roma, 1950, pp. 63-80

(12) G. Pulleyblank, The Consonantal System of  
Old Chinese, Asia Major, Vol. 9 (1963), pp.  
218-219. なおペテックとポリーblank

1479

兩説は、A. F. P. Hulsewé, China in Central  
Asia, the Early Stage: 125 B.C. - A.D. 23, Leiden,  
1979, p. 104 に要約されている。

(13) 榎本文雄「阿含經の成立」『東洋學術  
研究』第二三卷第一號、一九八四年、九  
六-九七頁) はもっとも最近、水にふか  
た論文である。桑山は、「罽賓と佛鉢」  
(『展望』アジアの考古學』、新潮社、  
一九八三年) において既に『高僧傳』の  
編者慧皎のもつ罽賓の概念に限定して、

1480

罽賓はそこでガンダーラを指すために用  
 いられたと記したものである。榎本氏  
 はそれをすべてに敷衍された。一事が萬  
 事ではないのである。罽賓の解釋がこ  
 まで混亂していたのは、この一事を萬事  
 にあててゆく態度にほかならなかった。  
 カシミアールにカニシユカにはじまるクシ  
 ヤーン期の佛寺や、カニシユカ、フザイ  
 シユカ等がつくった町があったというの  
 は諸傳承をとらえてつくりあげられた錯

1481

誤のようになされる。カシミアールをカニ  
 シユカに結びつける傳承は大いに検討の  
 餘地がある。現在でもスリナガルをは  
 じめとする北インドの山岳地帯は、シン  
 ボジウムなどで一時的に集會する場であ  
 り、ここには恒久的に佛教が扶植されてい  
 ンド佛教の中心となったとは考えにくい  
 現存する遺物・遺迹は本文でのべたとお  
 り七世紀をもっとも早いものとして、多く  
 は八世紀、九世紀のものである。てつと

1482

「早」は H. Goetz, Kashmir Art, in Encyclopedia of World Art, Vol. 8, p. 962 以下  
 参照「小」は「早」は H. Goetz, Studies in the History and Art of Kashmir and the Indian Himalaya, Wiesbaden, 1969 の 22  
 The Beginning of Mediaeval Art in Kashmir 22  
 見下。

- (15) H. Maspero, Sur la date et authenticité du Fou-fa-tsang Yin-yuan-tchouan, Mélanges d'Indianisme, Paris, 1911, p. 130f

1483

- (16) 足立喜六「法顯傳 中亞・印度・南海紀行の研究」、『法藏館』一九四〇年、三七九頁以下。

- (17) J. H. Rosenfield, The Dynastic Arts of the Kushans, Berkeley and Los Angeles, 1967, pp. 222 - 223.

- (18) 桑山正進「タキシラ佛寺の伽藍構成」、『東方學報』京都第四六冊、一九七四年  
 において、佛寺群の編年を試みたが、その第二期は造寺活動が第一期に比べ、い

1484

ちがうく活潑となる。第二期はあらたな伽藍構成へ変化する時期であり、その伽藍構成が後代へ永續する基本型となる。この意味で第二期はタキシラにおける佛寺にエポックをつくる。一般にガンダーラ佛教はクシヤーン族が護持して興隆したといわれている。もしニホが正鵠をえているとすれば、タキシラ第二期はクシヤーン族の時代であろう。

(19) Deborah E. Klimburg-Salter, The Silk Route and

1485

the Diamond Path, Esoteric Buddhist Art on the Trans-Himalayan Trade Routes, Los Angeles, 1982, pp. 25-37 (M. Klimburg, The Western Trans-Himalayan Crossroads).

(20) チャールサグ地域の考古調査は、一九五八年、ウィーラーによるバーラーヒサール、一九六三年にダニとオールチン、一九六四年にダニによるシェイハーン、デリーの發掘がおこなわれた。その結果は、Sir Mortimer Wheeler, Charsada, A

1486



Metropolis of the North-West Frontier, being a report on the excavations of 1958, Oxford, 1962 ~ Ahmad Hasan Dani, Shaikhan Dheri Excavation (1963 and 1964 Seasons), Ancient Pakistan, Vol. 2 (1965-66), pp. 17-214. 上記報告はハリー・ダニの報告の信頼性を問うものとして、また発掘内容を補充するものとしてカーチンの次の論文はキチぬ重要なものである。A Cruciform Reliquary from Shaikhan dheri, Aspects of Indian Art, (ed.) P. Pal, Leiden, 1972, pp. 15-26.

1487

(21) Robert Shih "Franchissant encore mille trois cents li en direction du sud-ouest, Tchémong arriva au royaume de Kapilavastu." (Bio-graphies des moines éminents....., p. 145) と一何ら注釋をつけず、カピラヴァストウと譯している。ニヤグーン又はヤナガに他の巡歴僧の場合と異なっていることに注意して、E. Chavannes, Voyage de Song Yun dans l'Udyāna et le Gandhāra (518-522 p.c.), BEFEO, tome 3 (1903),

1488

p. 433, n. 3.

(22) E. Chavannes, Voyage de Song Yun ..., p. 415, n. 7., p. 437.

(23) nisidana 慧琳一切經音義卷一に、  
尼師壇。梵語略也。正梵音具足應云。顗  
史娜曩。唐譯為數具。今之坐具也。顗  
音寧頂反。

(24) 木村英一編「慧遠研究」(京都大學人  
文科學研究所研究報告)、創文社、一  
九六〇(遺文篇)、一九六二(研究篇)。

1489

(25) 「慧遠研究」、研究篇、七六頁(塚本善  
隆「中國初期佛教史上における慧遠」)  
(26) 「慧遠研究」、遺文篇、四六二頁、注三  
六。

(27) 「慧遠研究」、研究篇、四八頁。

(28) ナガラハローにおける佛塔の多さは、バ  
ルトゥーの發掘報告にみえるハツダの寺  
迹を含め、京都大學の分布調査によつて  
はじめて明確になったと言えよう。國城  
の遺迹は現ジャラーラーバードの町の西

1490

南西約一〇キロにあるシャラスルグンガイであろう。この遺迹を中心に一周邊の山麓や台地上に佛寺迹が多い。水野清一編『バサルとジェララーバード・カール アフガニスタン東南部における佛教石窟と佛塔の調査一九六五』、京都大學、一九七〇、插图二四参照。

## 第二章

- (1) 長澤和俊譯注『法顯傳・宋雲行紀』(『東洋文庫』一九四、平凡社、一九七一年)
- (2) 『資治通鑑』卷一三、宋紀五。
- (3) フツハーン、達摩悉鐵帝に関する注釋は水谷真成譯『大唐西域記』(平凡社、一九七一年)、三七九―三八一頁がすぐ小さい。
- (4) ドウツラニー系パシユトゥン族の牧民としての行動調査が参照される。松井健

「パシユトウ」游牧民の牧畜生活―北東  
 アフガニスタンにおけるドウラニ系パシ  
 ユトウ族調査報告Ⅰ（『京都大學人文  
 科學研究所調査報告』第三三號）、一九  
 八〇年。

（五）『續高僧傳』卷四京大慈恩寺釋玄奘傳に、  
 「至縛喝國。土地華博。時俗號爲小王舍城。  
 國近葉護南牙也。突厥常法。夏居北野。  
 花草繁茂。放牧爲勝。冬處山中。用遮寒  
 厲。故有兩牙王都」とあり、縛喝はトハ

ーラッヤバグの南牙に近しい、また、  
 「達觀貨羅諸故都邑。山行八百。路極艱  
 險。寒風切骨。到於活國。中途所經。皆  
 屬北狄。而此王者突厥之胤。統管諸胡。  
 總御鐵門以南諸小國也」といふ。『慈恩  
 傳』卷五には、「至活國。居縛喝河側。  
 卽觀貨羅東界。都城在河南岸。因見葉護  
 可汗孫王觀貨羅。自稱葉護。」とあり、  
 同卷二に「弟子所部有縛喝國」といふ。  
 弟子とは玄奘に對する右のトハーラッヤ

「バグの自稱である。活は南牙であったこと  
とが判る。」

(6) 「舊唐書」卷四〇、西域十六都督州府の  
條に、「太汗都督府、於厥達部落所治活  
路城置。以其王太汗領之。仍分其部置十  
五州。太汗領之。」と。

(7) 「隋書」卷八三、西域傳に、「吐火羅國  
……南去漕國千七百里。……」  
都烏澹水南二百里。……南去漕國千五百  
里。……」と。兩者間は二〇〇里、吐火羅

は烏澹水南岸にあることが判明する。前  
注(5)の「慈恩傳」と合わせると、吐  
火羅國（隋書）＝活國（玄奘文獻の）と  
なる。

(8) 「大唐西域記」卷一二に、「越達摩悉鐵  
帝國大山之南。至商彌國。」とある。

(9) 「バダフシヤン」における玄奘の旅行（  
小谷仲男記）（「第四次、第五次イラン  
アフガニスタン・パキスタン學術調査豫  
報」）「東方學報」京都第三七冊、一九六

六年)・三九四頁。

- (10) J. Marguart, Érānsāhr, Berlin, 1901, p. 245,  
E. Chavannes, Voyage de Song Yun ..., p. 405,  
f. n. 7.
- (11) H. A. Stein, Ancient Khotan, Oxford, 1907,  
p. 14.
- (12) 白鳥庫吉「西域史上の新研究」(『白鳥  
庫吉全集』第六卷、岩波書店、一九七  
〇年)・一〇六一―一二頁。
- (13) E. Chavannes, Voyage de Song Yun ..., p. 427.

1497

- (14) 惠生初發京師之日。皇太后勅付五色百尺  
幡千口・錦香袋五百枚。王公卿士幡二千  
口。惠生從于闐至乾陀。所有佛事處。悉  
皆流布。至此頓盡。惟留太后百尺幡一口。  
擬奉尸毘王塔。宋雲以奴婢二人奉雀離浮  
圖。永充灑掃。惠生遂減割行資。妙簡良  
匠。以銅摹寫雀離浮圖儀一軀及釋迦四塔  
變。

- (15) 闍那崛多傳(『續高僧傳』卷二)のフ  
ンス語譯注はシャヅァンヌが一九〇五年

1498



に發表している。ジュニヤーナグポタデ  
はなく、ジナグポタと讀むべき論證もそ  
こにみえる。→ E. Chavannes, *Jinagupta*  
(528-605 après J.-C.), *T'oung Pao*, Serie II,  
Vol. 4, 1905, pp. 333-356. その三四九頁  
から三五一頁に及ぶ脚注は、ナレーンド  
ラヤシヤス傳(『續高僧傳』卷二)のフ  
ランス譯注となっている。

(16) シヤヴァンヌは 'Le roi de ce pays demanda  
avec instances aux maîtres (de Jinagupta)

1499

de les traiter en chefs de la religion ... と  
譯す。望月信亨は、「講法の主」とする。  
今これに従った。↓『佛教大辭典』五、四六〇八頁に。

(17) シヤヴァンヌは「師たちにつかえた」と  
する。Chavannes, *Jinagupta* ..., p. 340.

(18) シヤヴァンヌは「數經時艱」と「plusieurs  
reprises il traversa des difficultés soudaines  
とする。」「時艱」は時局の艱難であり、  
エフタルにトットの重大な時局と解した  
シヤヴァンヌは、ジナグポタガーはーば

1500

捕えられたと考えたが、もちろんそんな方向ではない。

(19) 『歴代三寶紀』卷一一(大正四九、一〇〇C)参照。

(20) Chavannes, *Jinagupta* ..., p. 341, n. 5.

(21) 『歴代三寶紀』卷一一(大正四九、一〇〇b5c)による。

(22) 大正四三、二三一C。

(23) 第五章第三節(七世紀後半のカーピシー)に詳くのべた。

(24) 摩臘婆國。周六千餘里。國大都城周三十餘里。據莫訶河東南。また、跋祿羯咄婆國の末尾に、從此西北行二千餘里。至摩臘婆國。即南羅羅國。南印度境。とある。

(25) 附論「トハリスターンにおけるエフタル、テュル」とその城邑に参照。

(26) スルフコタル出土SK3碑文中にみえるバクトリア語で、「神のいますところ」を

あらわー、スルフコタル丘の神殿を指す。

→ G. Fussman, Surkh Kotal, Tempel der Kuschanzeit in Baktrien, Materialien zur Allgemeinen und Vergleichenden Archäologie, Bd. 19, München, 1983, S. 69-76.

(27) 『慈恩傳』卷五。

(28) なお、内田吟風「隋・裴矩撰『西域圖記』遺文纂考」(『藤原弘道先生古稀記念史學佛敎學論集』、一九七三年)は『西域圖記』成立年次にもふひている。

1503

(29) シヤグアンヌはジナグプタ傳の脚注で、

玄奘行程をとりあげ、大雪山・雪山の西足を「バーシヤーンに通じるシブル

峠」にとらえ、ils (Jinagupta et Dharmagupta)

ont sans doute franchi la passe Shibr qui mène

à Bamian. → Chavannes, Jinagupta ...,

p. 340, n. 1.

(30) 第五章第三節参照。

(31) Kitāb Futūḥ al-Buldān (Balādhurī); The

Origin of the Islamic States, Part II, by F. C.

1504

Murgotten, New York, 1924 に於る。

- (32) Sir John Marshall, Taxila, Vol. 1, Cambridge, 1951, pp. 76-77, 274f.

- (33) 山田龍城「蓮華面經について」(『山口博士還暦記念印度學佛教學論叢』、一九五五年)。のち『大乘佛教成立論序説』(一九五九年)に吸収され、第八章第一節(『エフタル族主と蓮華面經』)となった。

- (34) 山田龍城、一九五五年、一一三—一一四頁。

1505

- (35) J. F. Fleet, Inscriptions of the Early Gupta Kings and their successors, Corpus Inscriptionum Indicarum, Vol. 3, 1888 (Rep. 1970), p. 52 (No. 13; Britari Stone Pillar Inscription of Skandagupta).

- (36) J. F. Fleet, Inscriptions ..., p. 88 (No. 19; Eran Stone Pillar Inscription of Buddhagupta).

- (37) J. F. Fleet, Inscriptions ..., p. 161 (No. 37; Guwalior Stone Inscription of Mihirakula).

- (38) 佛告阿難。彼五天子滅度之後。有富蘭那

1506

外道弟子。名蓮華面。聰明智慧。善解天文二十八宿五星諸度。身如金色。此大癡人已曾供養四阿羅漢。當供養時。作如是誓。願我未來破壞佛法。以其供養阿羅漢故。世世受於端正之身。於最後身生國王家。身為國王。名寐岐曷羅俱邏。大正一〇七五C。

- (39) M. A. Stein, Kalhana's Rājataranginī, A Chronicle of the Kings of Kāśmīr, Westminster, 1900, pp. 43-48. Ranjit Sitaram Pandit, Rāja

1507

taranginī, the Saga of the Kings of Kāśmīr, translated from the original Sanskrit and entitled the River of Kings with an Introduction, Annotations, Appendices, Index, etc., New Delhi, 1935 (Sahitya Akademi edition, 1968), pp. 40-44.

- (40) M. A. Stein, Kalhana's Rājataranginī, Vol. 2, Note J. (pp. 336-339). 現 A. Cunningham, Ancient Geography of India, London, 1871, pp. 62f. 4-7.

851

ル「シャート」に關する論文も示唆するところ多い。→ Zur Geschichte der Čāhis von Kābul, Festguf an Rudolf von Roth zum Doktor-Jubiläum 24. August 1893 von seinen Freunden und Schülern, Stuttgart, 1893, pp. 198-206. この引文にくゝ書物からスティーン論文だけを英譯した(譯者は Gustav Glaesser) Contribution to the History of the Čāhis of Kābul, East and West, Vol. 23, Nos. 1-2 (1973), pp. 13-20 はかなり有益である。

1509

ある。

- (41) 水谷真成『大唐西域記』、平凡社、一九七一年、一一三、一一四、一二〇(傳訶補羅、一一四(烏刺尸)、一三四(半奴蹉)、一三五(曷邏闐補羅)の各頁参照。
- (42) 受諸國貢獻。南至牒羅。北盡勅耆。東被于闐。西及波斯。四十餘國皆來朝賀。……時跋提國送獅子兒兩頭。與乾陀羅王雲等見之。觀其意氣雄猛。中國所畫莫參其儀。

1510



- (43) M. Mitchner, Some Late Kushano-Sassanian and Early Hephthalite Silver Coins, East and West Vol. 25, No. 1-2 (1975), p. 162, fig. 2, 6. 参考  
桑山正進「東方におけるサーサーン式銀貨の再検討」(『東方學報』京都第五四冊、一九八二年)一五二頁以下。
- (44) R. Göbl, Sasanian Numismatics, Braunschweig, 1971
- (45) A. Christensen, L'Iran sous les Sassanides, Copenhagen, 1944, Th. Nöldeke, Geschichte

1151

- der Perser und Araber zur Zeit der Sasaniden, aus der Arabischen Chronik des TABARI, Leiden, 1879, R. Ghirshman, Les chionites-Hephthalites, Mémoires de la Délégation archéologique française en Afghanistan, tome 13, Le Caire, 1948
- (46) H. Haussig, Quellen über die zentralasiatische Herkunft der europäischen Avaren, Central Asiatic Journal, Vol. 2, 1956
- (47) 第二章注(33)文献参照。
- (48) 山田明爾「シビクラの破佛とその周辺」(

1572

『佛教史學』第一一卷第一・二號、一九六三年。

- (49) 川勝義雄「中國的新佛教形成へのエネルギー——南岳慧思の場合——」(福永光司編『中國中世の宗教と文化』、京都大學人文科學研究所研究報告Ⅱ、一九八二年)
- (50) 山田龍城『大乘佛教成立論序説』、五九頁。
- (51) A. Cunningham, Ancient Geography of India, p. 232.
- (52) 『慈恩傳』卷四。

15/3

- (53) Tārānātha's History of Buddhism in India, translated from the Tibetan by Lama Chimpa and Alaka Chattopadhyaya and edited by Debiprasad Chattopadhyaya, Calcutta, 1970.
- (54) 大正五ノハニニ〇一〇参照。
- (55) A. Ghosh, Nālandā, 6th edition, New Delhi, 1971, pp. 2-3.
- (56) Sukumar Dutt, Buddhist Monks and Monasteries of India, their history and their contribution to Indian culture, London, 1962, pp.

15/4

328-331.

(57) H. D. Sankalia, The University of Nalanda,

Delhi, 1972, p. 43.

(58) 足立喜六『法顯傳』一九四〇・一四九

頁・注四。

(59) Indian Antiquary, Vol. 14, p. 67f., Vol. 18, p. 227.(60) R. C. Majumdar, The Expansion and Consolidation of the Empire, The History and Culture of the Indian People, Vol. 3, Bombay, 1954, p. 23f.

1515

(61) 高田修譯『大唐大慈恩寺三藏法師傳』(

日國譯一切經』、史傳部一一)、ハ〇頁

注一二六。

(62) Sukumar Dutt, Buddhist Monks ----, p. 329.(63) R. C. Majumdar, The Expansion ----, pp. 39-40.D. Devahuti, Harsha, Oxford, 1970, pp. 48, 64n.(64) D. Devahuti, Harsha, p. 83.

(65) マイトラカ朝のグアラビーとその佛教に

ついては前注(56)のグヅトがすいはい

3. また山崎利男「マイトラカ朝の土地

1516

施與文書」(『東洋文化研究所紀要』、  
第四三冊、一九六七年)を参照したい。

(66) 桑山正進・袴谷憲昭『玄奘』、大藏出版  
一九八一年、二二三頁以下参照。

(67) 桑山正進『インドへの道』(『東方學報』  
京都第五五冊、一九八三年)。なお本  
論文の主旨はすでに注(66)文獻に示した。

### 第三章

(1) ダルマグプタ傳によると、カーピシーの  
王寺は國域の外にあったようである。「  
遂往迦臂施國。六人爲伴。仍留此國。停  
住王寺。笈多遂將四伴。於國域中二年停  
止。遍歷諸寺。備觀所學。」とのバヤから  
である。玄奘は國域北西に「舊王伽藍」  
があることを言う。とすれば、ダルマグ  
プタ遊歷時點から玄奘までの間に、「王  
寺」が「舊王寺」となった。そこにカー

ビシー王の交替が認められるかもしれない。

- (2) S. Lévi et Ed. Chavannes, L'Itinéraire d'Ou-  
Kong (751-790), Journal Asiatique 1895,  
pp. 374-375. J. Marguier, Eransahr,  
p. 285, 馮承鈞『西域南海史地考證譯叢  
』、第六編、二八頁。藤田豊八『慧超往  
五天竺國傳箋釋』、北平、一九三一年、  
四九葉表。内田吟風『魏書西域傳原文考  
釋』下（『東洋史研究』第三一卷第三號

1519

一九七二年、六九頁。内田吟風『隋・裴  
矩撰『西域圖記』と遺文纂考』、一一九—  
一二〇頁。

- (3) 白鳥庫吉『罽賓國考』（『白鳥庫吉全集  
』、岩波書店、一九七〇年）

Ed. Chavannes, Documents sur les Tou-  
kine [Turcs] Occidentaux, Paris, 1903, p. 130,  
n. 2.

- (4) 白鳥庫吉『罽賓國考』、三五五頁。  
(5) 隋煬帝時、引致西域、前後至者三十餘國。

1520

唯屬賓不至。

(6) A. Remusat, Nouveaux Mélanges Asiatiques, I, Paris, 1829, p. 211.

(7) R. Göbl, Dokumente zur Geschichte der Iranischen Hunnen in Baktrien und Indien, Wiesbaden, 1967, Bd. I, S. 132f, Bd. II, S. 71f.

(8) R. Ghirshman, Chionites - Hephthalites, Mémoires de la Délégation archéologique française en Afghanistan, tome 13, Le Caire, 1948

1521

(9) J. de Morgan, Manuel de numismatique orientale de l'antiquité et du moyen âge, tome I, Paris, 1923-1936, p. 448-449.

(10) M. Mitchner, Who were Napki Malik?, East and West, Vol. 25, Nos. 1-2 (1975), pp. 167-174

(11) なお附論末尾を参照のこと。

1522

## 第四章

- (1) A. Cunningham, Ancient Geography of India, London, 1871, p. 16 f.
- (2) A. Foucher, La vieille route de l'Inde, de Bactres à Taxila, Mémoires de la Délégation archéologique française en Afghanistan, tome 1, Paris, 1947, p. 140. Etudes asiatiques publiées à l'occasion du vingt-cinquième anniversaire de la fondation de l'école française d'extrême orient, I, pp. 266-273.

1523

- (3) ベグラームの発掘次第と成果の報告とは次のとおりである。表中に記したMDAFAを以後報告の略号とする。

1524



回	年度	区域	報告
1	1925	試掘	MDAFA t. VIII *1
2	1936	"バーザル區"(中央大路)	" VIII
3	1937	"第10室"	" IX *2
4	1938	"綾堡建物"	" VIII
5	1938	"市壁外側"	" VIII
6	1939-40	"第13室"	" XI *3
7	1941-42	西方區	" XII *4
8	1946	市門區	" VIII
*1 Diverses recherches archéologiques en Afghanistan (1933-1940) par J.Hackin, J.Carl et J.Meunié, Paris, 1959.			
*2 Recherches archéologiques à Begram (chantier no.2 1937), par J.Hackin avec la collaboration de Mme J.-R. Hackin, Paris, 1939.			
*3 Nouvelles recherches archéologiques à Begram (1939-1940), par J.Hackin avec la collaboration de J.-R.Hackin, J.Carl et P. Hamelin, Paris, 1954.			
*4 Begram. Recherches archéologiques et historiques sur les Kouchans, par R. Ghirshman, Le Caire, 1946.			
MDAFA : Mémoires de la Délégation archéologique française en Afghanistan			

1525

(4)	R. Ghirshman, <u>Begram</u> , p. 41.
(5)	J. Meunié, <u>Le Bazar de Begram</u> , MDAFA, t. 8, pp. 84 (fig. K), 85 - 102.
(6)	R. Ghirshman, <u>Begram</u> , p. 99.
(7)	R. Ghirshman, <u>Begram</u> , p. 97.
(8)	R. Ghirshman, <u>Begram</u> , pp. 85 - 87.
(9)	この考は H "テイ" イが要約 " H. Deydier, <u>Contribution à l'étude de l'art du Gandhâra</u> , Paris, 1950, pp. 108- 109

1526

- (10) P. Bernard, Les fouilles de Kohna Masjid,  
Comptes rendus de l'Académie des Inscriptions  
 et Belles-Lettres, 1964, p. 217. 以後の  
 略一記  
 (11) 発掘一に印紋 R. Ghir-  
 shman, Begram, Pls. XLIX, L, LII, LIII, IV  
 H 6 N 15 H' MDAFA, tome 8, Pl. VII (p. 89)  
 2 2 16  
 (12) MDAFA, tome 8, Pl. L1 (p. 104)  
 MDAFA, tome 8, Pl. L2 (p. 106)

1527

- (13) R. Ghirshman, Begram, p. 67, fig. 26.  
 (14) R. Ghirshman, Begram, pp. 37-41.  
 (15) MDAFA, tome 8, p. 106.  
 (16) J. Meunier, Une entrée de la ville à Begram,  
 MDAFA, tome 8, pp. 107-113.  
 (17) J. Hackin et J. Carl, Recherches Archéologiques  
au Col de Khair Khaneh près de Kābul —  
Fouilles J. Carl et J. Hackin —, MDAFA,  
 Tome 7, Paris, 1936, p. 5, Pl. XVIII, 24.  
 (18) 第六章第三節參照

1528

- (19) D. Schlumberger, Le marbre Scoretti, Arts Asiatiqnes, tome 2 (1955), p. 116
- (20) R. Göbl, Dokumente ---, Bd. I, pp. 134-135.
- (21) Le fortin du Saka et le monastère de Guldata (Rapport de J. Carl, 1935), MDAFA, tome 8, pp. 13-18. 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 筆者の遺迹観察にふれた。
- (22) Sh. Kuwayama, Excavations at Tapa Skandar: Second Interim Report, in Kyoto University Archaeological Survey in Afghan-

1529

- istan 1972, Kyoto, 1974, pp. 5-10, Id., The Third Excavation at Tapa Skandar, in Japan-Afghanistan Joint Archaeological Survey in 1974, Kyoto, 1976, pp. 5-14, Id., The Fourth Excavation at Tapa Skandar, in Japan-Afghanistan Joint Archaeological Survey in 1976, Kyoto, 1978, pp. 5-12, Id., The Fifth Excavation at Tapa Skandar, in Japan-Afghanistan Joint Archaeological Survey in 1978, Kyoto, 1980, pp. 5-15.

1530

(23) 桑山正進「タバ・スキャンダル第一回發掘調査概報」(『史林』第五四卷第三號、一九七一年) 一六五—一六七頁。

(24) R. Göbl, Dokumente....., pp. 115.

(25) Le Monastère bouddhique de Tépé Marandjan, MDFA, tome 8, pp. 7-12.

(26) R. Curriel, Le trésor du Tépé Marandjan, une trouvaille de monnaies sassanides et kušano-sasanides faite près de Caboul, MDFA, tome 14, Paris, 1953, pp. 101-131,

1531

Pls. IX-XVI. とくに「〇四頁の注五参照」。

(27) R. Göbl, Sassanian Numismatics, Braunschweig, 1971 の型式分類に従った。

(28) 以下、東方において出土したサーサーン式銀貨については、桑山正進「東方におけるサーサーン式銀貨の再検討」(『東方學報』京都第五四冊、一九八二年)を参照のこと。“高昌故城”をはじめとする出土状況、出土したサーサーン式銀貨を圖表化した(一三〇—一三一頁)。

1532

- (29) 前注(28)の一五〇—一五二頁。
- (30) R. Göbl, Dokumente ..., Bd. II, pp. 29-36.  
河北省文物局文物工作隊「河北定縣出土  
北魏石函」(《考古》、一九六六年第五  
期)。
- (32) J. Meunier, Shotorak, MDFA, tome 10, Paris,  
1942.
- (33) J. Meunier, Qol-i Nader, une petite fondat-  
ion bouddhique au Kapisa, MDFA, tome  
8, pp. 115-127.

/533

- (34) 一九七〇年における筆者の現地観察によ  
る。
- (35) 桑山正進「タキシラ佛寺の伽藍構成」(《  
東方學報》、京都第四六冊、一九七四年、  
三三五—三四一頁。Sh. Kuwayama,  
Buddhist Temples in Taxila and Gandhāra:  
A Historical Review of Monastic Arrangements,  
Catalogue of the Exhibition of Gandhāran  
Art of Pakistan, Tokyo, 1984, pp. 216-220.)
- (36) J. Barthoux, Les Fouilles de Hadda, I, MDFA,

/534

tome 4, Paris, 1933, pp.143-172.

(37) 桑山正進「タキシラ佛寺の伽藍構成」

三田一三田三頁。

(38) Sir John Marshall, Taxila, Vol. 1, p.343f.

(39) Sir John Marshall, Taxila, Vol. 1, p.217f.

(40) Sir John Marshall, Annual Report, Archaeological Survey of India, 1915-1916, pp.1-38.

Id., A Guide to Taxila, Cambridge, 1960, pp.109  
-113.

(41) R. Ghirshman, Begram..., pp.39-41.

1535

(42) E. J. Keall, Qal'eh-i Yazdigird, A Sassanian Palace Stronghold in Persian Kurdistan, Iran, Vol. 5 (1967), p.103.

(43) クシヤーンのカニシユカ一世登位年代は最近ではグッフスマンの七八年案からゼイマールヤゲズルの三世紀前年案まで幅が廣く、結着がつかない。大勢は二世紀前半である。しかし、このいずれの年代観を採用しても、サーサーン朝とさかのぼるものである。カニシユカに直接先行する

1536

ウィーマカドフイセス時代にタキシラ／  
圓形稜堡が導入されたとは考えがたい。

(44) M. Le Berre et D. Schlumberger, Observations sur les remparts de Bactres, MDFA, tome 19, 1964, p. 88.

(45) A. Ghosh, Taxila (Sirkap), 1944-45, Ancient India, No. 4 (1948), pp. 45-46.

(46) H.-P. Francfort, Les fortifications en Asie centrale de l'âge du bronze à l'époque Kouchane, Paris, 1979.

1537

(47) P. Bernard, Campagne de fouilles 1969 à Ai' Khanoum en Afghanistan, CRAI, 1970, pp. 316-317. P. Leriche, Ai' Khanoum, un rempart hellénistique en Asie Centrale, Revue Archéologique, 1974, fascicule 2, pp. 231-270.

(48) J.-C. Gardin, CRAI, 1970, pp. 247-249, CRAI, 1971, pp. 447-452. CRAI, 1975, pp. 193-195. J.-C. Gardin et B. Lyonnet, Fouilles d'Ai' Khanoum, campagne de 1974, BEFEO, tome 63, pp. 45-51.

(49) スコフ・ロタニに関する文献は W. Ball,

1538



Catalogue des sites archéologiques d'Afghanistan,  
tome I, Paris, 1982, pp. 261 - 263 ~~no~~ <sup>in</sup> ~~the~~  
" D. Schlumberger, M. Le Berre, G. Fuss-  
man, Surkh Kotal en Bactriane, I, Les Temples,  
architecture, sculpture, inscriptions, MDAFA,  
tome 25, Paris, 1983, G. Fussman, Surkh  
Kotal, Tempel der Kuschan-Zeit in Baktrien,  
Materialien zur Allgemeinen und Vergleichend-  
en Archäologie, Bd. 19, München, 1983.

(50) M. Le Berre et D. Schlumberger, Observations

1539

sur les remparts de Bactres, MDAFA, tome 19,  
1964, p. 61f.

(51) I. T. Kruglikova, Dilberdjin, 1, Moskva, 1974

(52) I. T. Kruglikova, V. Sarianidy, La Bactriane  
ancienne dans l'optique de nouvelles recherches  
archéologiques, Kushan Culture and History,  
Kabul, 1971, pp. 29-42.

(53) I. T. Kruglikova, V. I. Sarianidy, Drevnyaya  
Baktriya v Svete Novikh Arheologicheskikh  
Otkritii, Sovetskaya Arheologiya, 1971-4,

1540

pp. 167-177.

- (54) P. Bernard, Les fouilles de Kohna Masjid, CRAI 1964, pp. 212-221

- (55) D. Schlumberger, Le rhyton de Kohna Masjid, Arts Asiatiques, tome 24 (1971), pp. 3-7.

- (56) R. Göbl, Dokumente..., II, pp. 313-314.

- (57) S. Veve, La ceramique de Kohna Masjid, (Afghanistan), I-Texte et figures, 1974 (未  
公刊論文)。フ「グ」ネ Grenet 氏の御好  
意によりこの論文を閲讀しました。謝意を

1541

表す。

桑山

- (58) M. M. Dyakonov, Arheologicheskie Raboti v  
Nidnem Techenii reki Kafirnigana (Kobadian)  
(1950-51), Materiali i Issledovaniya po  
Arheologii SSSR, No. 37, 1953, pp. 253-293,  
pl. XI.

- (59) J.-C. Gardin, Ceramiques de Bactres,  
MDAFA, tome 15, 1957, p. 21, fig. 5.

- (60) 水野清一編 コドマン・テパスリマ  
京都、一九六八、一九頁以下。

1542

(61) 水野清一編『チヤカラク・テパ』、京都、一九七〇、四〇頁以下。

(62) 注(54)の文献による。

(63) 注(57)の文献による。

(64) J.-C. Gardin, *Les origines de la céramique Kouchane*, 1981 (第五回國際フシヤーン會議のハンド・アウト、未刊)による。

(65) R. Ghirshman, Begram..., p.69.

(66) J. Meunier, MDAFA, tome 8, Pl. VII (p.89).

(67) MDAFA, tome 8, p.16, Ⅲ (p.17).

1543

(68) MDAFA, tome 8, p.8, Pl. II (p.9).

(69) J. Meunier, Shotorak, MDAFA, tome 10, Paris, 1942, p.67, fig.8, Pl. XL, 135.

(70) R. Ghirshman, Begram..., p.41.

(71) この遺迹はアフガン考古研究所が発掘したが、十分な報告はなされていない。筆者は一九七〇年に遺迹と遺物とを観察する機会にめぐまれた。

(72) G. Fussman et M. Le Berre, Monuments bouddhiques de la région de Caboul, I - Le monastère

1544

de Gu1 Dara, MDFAA, tome 22, Paris, 1976, pp. 88-91.

(73) Ch. S. Antonini, A Short Note on the Pottery from Tapa Sardar, South Asian Archaeology 1977, Naples, 1979, pp. 847-864.

(74) G. Fussman, Ruines de la vallée de War dak, Arts Asiatiques, tome 30(1974), p. 90f., p. 103. シダガトニニトセ U. Scerrato, A Note on Some Pre-Muslim Antiquities of Gagatu, East and West, Vol. 17, Nos. 1-2 (1967), p. 20, figs 48-49.

1545

(75) 一九七八年度の第五次發掘終了時點の數量。

桑 山

(76) MDFAA, tome 19, p. 90f (Le briques des remparts et des stupas de Bactres).

(77) 泥煉瓦の計測値はそれらの遺迹に関する報告に發表されたものもあり、また發表されていないものもある。これから千エックーつつ、筆者はすべての遺迹について實地に計測しなおした。

(78) M. Taddei, Settlement, Material Culture,

1546

Architecture and Art, The Archaeology of Afghanistan from earliest times to the Timurid period edited by F. R. Allchin and N. Hammond, London / N.Y. / S. Francisco, 1978, Chapter 5 (The Pre-Muslim Period by D. W. Mac Dowall and M. Taddei), p. 267.

- (79) S. Julien, Histoire de la vie de Hiouen-thsang, Paris, 1853, p. 393 三 卅 Svetavara 三 卅 Ta-Tang-Hsi-yü-chi, Mémoires sur les contrées occidentales, I, Paris, 1857, p. 46 三 卅 Sphītavara

三 卅 三 卅

- (80) S. Julien, Ta-Tang-Hsi-yü-chi ..., II, p. 300.
- (81) S. Beal, Si-Yu-Ki, Buddhist Records of the Western World, London, 1884, p. 61.
- (82) Th. Watters, On Yuan Chuang's Travels in India (A.D. 629-645), edited after his death by T. W. Rhys Davids and S. W. Bushell, London, 1904-1905, p. 126.
- (83) J. N. Banerjia, The Development of Hindu Iconography, Calcutta, 1956, p. 148.

(84) 原 實「Svetasvatara Upanisad VI-21」(『宗教研究』第三五卷第一輯、一九六一年)。また同氏「灰」(『東京大學文學部研究報告』第三、哲學論文集、一九六七年)参照。

## 第五章

(1) 玄奘の長安出發年次には兩説(貞觀元年説・同三年説)がある。三年説は成立しない。貞觀元年説にも拘泥しない。詳しくは、桑山正進「インドへの道——玄奘とパラバリーカラミトラ——」(『東方學報』京都第五五冊、一九八三年)、一八九—一九三頁に記した。

(2) 桑山正進・袴谷憲昭「玄奘」、大藏出版、一九八一年、一〇〇頁以下。

- (3) 足立喜六『大唐西域記の研究』、上、一  
九四二年、九六頁。
- (4) J. Hackin, Les travaux de la D.A.F.A.,  
Revue des Arts Asiatiques, tome 12,  
J. Hackin, Le monastère bouddhique de  
Fondukistan, MDFA, tome 8, Paris, 1959.
- (5) A. Cunningham, Ancient Geography of  
India, p.16.
- (6) 水谷真成『大唐西域記』、四九頁。  
『慈恩傳』卷二。因請曰。弟子見師目明。
- (7)

1551

- (8) 卷一二。弗栗特薩儻那國。……國大都城  
號護苾那。……土宜風俗同漕矩吒國。語  
言有異。……王突厥種也。深信三寶。尚  
學遵德。
- 願少停息。若差。自送師到婆羅門國。時  
更有一梵僧至。為誦呪。患得漸除。其後  
娶可賀敦。年少。受前兒囑。因藥以殺其  
夫。設既死。高昌公主男小。遂被前兒特  
勤篡立為設。仍妻後母。為逢喪故。淹留  
月餘。
- (8)

1552



- (9) 卷一。迦畢試國。……王刹利種也。有智略。性勇烈。威懾鄰境。統十餘國。
- (10) 濫波、那揭羅曷、健駄邏、烏仗那、鉢露羅、咀叉始羅、僧訶補羅、烏刺尸、迦溼彌羅、半斂蹉、曷邏闐補羅、磔迦、至那僕底、閼爛達羅、屈露多、設多圖盧。
- (11) 水谷真成曰大唐西域記、三六三頁の注。
- (12) H. M. Elliot and J. Dawson, The History of India, as told by its own historians, the Muḥammadan Period, Vol. I, London, 1867 (rep. ed.

1553

- N. Y., 1966), pp. 27-28. E. C. Sachau, Al-Berūnī's India, Vol. I, London, 1888, p. 116,
- (13) 舊唐書、卷四四、職官三、曰唐書、卷四九上、百官四上、曰資治通鑑、卷一九四、唐紀一〇、貞觀一〇年末尾とみよ。
- (14) Ed. Chavannes, Documents..., p. 277.
- (15) 足立喜六曰大唐西域求法高僧傳、一九四年、三四一三五頁。
- (16) Al-Imam abu-l-'Abbās Ahmad ibn-Jābir al-

1554

Balāshurī, Kitāb Futūḥ al-Bulān (The

Origin of the Islamic States, Part II, by

F. C. Mungatten, N.Y., 1924, p. 141f.

(17) 大唐西域記卷一二、漕矩吒國。周七

千餘里。國大都城號鶴悉那。周三十餘里。

或鶴薩羅城。周三十餘里。並堅峻險固也。

……鶴薩羅城中涌泉流洑。國人利之。以溉田也。

(18) 唐書卷二二下。謝颺……其王居

鶴悉那城。地七千里。亦治阿娑你城。

1555

(19) 大唐書卷四〇、地理三、條

枝都督府。於訶達羅支國所治伏寶瑟顛城

置。以其王領之。仍於其部分置八州。

(20) 唐會要卷七三、安西都護府。龍朔元

年六月十七日。吐火羅道置州縣使王名遠

進西域圖記。并請于闐以西波斯以東十六

國。分置都督府。及州八十。縣一百一十。

軍府一百二十六。仍以吐火羅國立碑。以

記聖德。詔從之。

1556

(21) P. Pelliot, Deux itinéraires de Chine en Inde  
à la fin du VIII<sup>e</sup> siècle, BEFEO, tome 4 (1904),  
p. 171, n. 3.

(22) 又從疎勒東行一月。至龜茲國。卽是安西  
大都護府。……從此已東。並是大唐境界。  
諸人共知。不言可悉。開元十五年十一月  
上旬。至安西。于時節度大使趙君。

(23) こ小に關して想い起させるのが、繼業で  
ある。范成大的『吳船錄』上卷に、峨眉  
山牛心寺を造った人とみえ、乾德二年（

1557

九六四）に沙門三〇〇人に詔してインド  
において舍利と貝多葉の書を集めて求めた  
とき、繼業もその中に居た。開寶九年（  
九七六）に歸着した。牛心寺藏の涅槃經  
一函四二卷の卷末ごとに「か小は」の西域  
行程を分記していた。こ小によると、階  
州と出て、靈武、西涼、甘肅、瓜沙、  
伊吳、高昌、焉耆、于闐、疎勒、大石な  
どを過って雪嶺をわたり布路州國に至る。  
また大蔥嶺雪山をわたって、伽濕彌羅國

1558

へ至り、西のかた大山を登っていくと、  
 薩埵太子投産飼虎處があり、ついに健陀  
 羅國に至ったという。ナールンギーから  
 ネパールへ入り、歸看したらしい。一〇  
 世紀の中ごろよりあと、ボロル、カシユ  
 ミーラ、ガンダーラがその行程にあらわ  
 れるわけであり、カラコルム道がこのこ  
 ろカシユミールにぬけていくルートとな  
 ったいたことがわかる。か水のルートを  
 みるとガンダーラの次が庶流波、太爛陀

1559

羅（左爛陀羅とも）であり、そこから大  
 曲女域に至って、庶流波はどこかわ  
 からないが、太（左）爛陀羅は Jalandhara  
 であり、大曲女域はカーニヤクブジャド  
 あるから、カシユミールからジャールン  
 ダラへ出られそうなきろをそうは行か  
 ずにガンダーラに一旦出、そうしてパン  
 ジャーグバへ行っていることがわかる。ガ  
 ンダーラはおそらくカシユミールから西  
 へ出たところのフンド（ウダバーンダ）

1560

であつたはずである。なお E. Huber,

L'Itinéraire du Pèlerin Ki Ye dans l'Inde,  
BEFEO, tome 2 (1902), p. 256 f. 参照。

(24) 法界の行程は、疎勒、葱山、楊興嶺、播  
密川、五赤匿、護密、拘緯、葛藍、藍婆、  
孽和、烏伏那、茫譏勃高頭城、摩但、信  
度城である。全部を通つたかどうかは  
なはだうたがわしいが、いまシヤヴアン  
ヌに従つた。→ S. Lévi et Éd. Chavannes,

Voyages des Pèlerins bouddhistes, L'itinéraire

1561

d'Ou-K'ong (751-790), Journal Asiatique,  
1895, p. 341 f. に従つた。

(25) (1) 此國舊是罽賓王々化。

(2) 爲此突厥王阿耶領一部落兵馬。投彼罽  
賓王。

(3) 於後突厥兵盛。便然彼罽賓王。自爲國  
主。

(26) E. C. Sachau, Alberuni's India, ..., Vol. II,  
p. 10.

(27) W. Fuchs, Huei-ch'ao's Pilgerreise durch Nord-

1562

west-Indien und Zentral-Asien um 726, Sitzungs-  
berichten der Preussischen Akademie der Wissen-  
schaften, Phil.-hist. Klasse, xxx, 1938, p. 445.  
 (28) 藤田豊八『慧超往五天竺國傳箋釋』三  
 葉裏。

(29) E. Chavannes, Documents ..., pp. 132, 162,  
 n. 1.

(30) 活國。……其王突厥也。管鐵門已南諸小  
 國。遷徙鳥居。不常其邑。

(31) E. C. Sachau, AlBeruni's India, Vol. II,

p. 13.

(32) M. A. Stein, Kalhana's Rājataranginī, p.  
 206, Nos. 152-155, p. 217, no. 232.

(33) M. A. Stein, Kalhana's Rājataranginī, p. 336,  
 Note J, O. Caroe, The Pathans, London, 1962,  
 pp. 97-98, Archaeological Survey of India,  
Annual Report 1923-24, pp. 68-70, Hudūd al-  
'Alam, p. 253 f.

(34) M. A. Stein, Kalhana's Rājataranginī, Intro-  
duction, Appendix I, p. 137.

(35) M. A. Stein, Kalhana's Rājataranginī, p. 217, no. 233.

(36) M. A. Stein, Kalhana's Rājataranginī, p. 336, Note J, Ch. Seybold, Zum Bīrūnī's Indica, ZDMG 45-3, p. 700, A. Cunningham, Antiquities of the Salt Range, Archaeological Survey of India, Report 1872-1873, Vol. 5 (1875), p. 82f.

(37) R. C. Majumdar (ed.), The History and Culture of Indian People, Vol. 3 - The Classical Age,

5951

2nd ed., Bombay, 1962, pp. 167-168, C. E. Bosworth, Sīstān under the Arabs, from the Islamic Conquest to the Rise of the Saffārids (30-250/651-864), Roma, 1968, pp. 13-21.

(38) H. M. Elliot & J. Dowson, The History of India, as told by its own historians, the Muhammadan Period, Vol. II, London, 1869 (rep. ed. N.Y. 1966), p. 172.

(39) ~~W. & A. D.~~ [D. W. Mac Dowall, The Shahis of Kabul and Gandhāra, The Numismatic Chron-

9951



nicle, 7th Series, Vol. 8 (1968), pp. 189-224] はヒンドゥーシャー朝の貨幣を検討してその歴史に言及した。この王朝に関する近年最大の収穫である。貨幣 (Bull-and-Horseman type) の王名は、ビルーニーの言及する王名とはほとんど整合しない。マクダールは、そのカラルに當ると考えられる最初期の貨幣銘から Śi Spalapati Deva なる稱號(?) を確定し、この王をハ世紀中葉に置いている。

1567

## 第六章

(1) A. Foucher, La Vieille Route de l'Inde, MDAFA, tome I, 1947, pp. 138f.

(2) 以上の各遺迹に関する文献の詳細は、

W. Ball, Catalogue des sites archéologiques d'Afghanistan, tome I, Paris, 1982 を見よ。

大理石像の詳細は、本章第四節以下。

(3) 大唐西域記四卷二。ゴシユカラウグアテ、にっは、城西門外有一天祠。天像威嚴。靈異相繼。グアルシアパラニフ

1568

いは、跋虜沙城東北五十餘里。至崇山。  
山有青石大自在天婦像。毘摩天女也。  
山下有大自在天祠。塗灰外道式修祠  
祀。

(4)

濫波↓伽藍十餘所。僧徒寡少。並多習學  
大乘教法。天祠數十。異道甚多。

那揭羅曷↓崇敬佛法。少信異道。伽藍雖  
多。僧徒寡少。諸窰堵波荒蕪圯壞。  
天祠五所。異道百餘人。

健駄邏↓多敬異道。少信正法。……僧伽

藍千餘所。摧殘荒廢。蕪漫蕭條。  
諸窰堵波頗多潰圯。天祠百數。異  
道雜居。

烏仗那↓好學而不功。禁呪爲藝業。……

崇重佛法。敬信大乘。夾蘇婆伐窰  
堵河舊有一千四百伽藍。多已荒蕪。  
昔僧徒一萬八千。今漸減少。並學  
大乘。寂定爲業。喜誦其文。未究  
深義。戒行清潔。特閑禁呪。……  
天祠十有餘所。異道雜居。

咀又始羅↓崇敬三寶。伽藍雖多。荒蕪已甚。僧徒寡少。並學大乘。

(5) 淳信之心。特甚鄰國。上自三寶。下至百神。莫不輸誠。竭心宗敬。商估往來者。天神現徵祥。示崇變。求福德。伽藍數十所。僧徒數千人。宗學小乘說出世部。

(6) 以上、口慈恩傳卷二による。

(7) 納縛伽藍有磔迦國小乘三藏名般若羯羅。此言慧性。聞縛喝國多有聖迹。故來禮敬其人聰慧尚學。少而英爽。鑽研九部。游

泳四舍。義解之聲周聞印度。其小乘阿毗達磨。迦延。俱舍。六足。阿毗曇等無不曉達。既聞法師遠來求法。相見甚歡。法師因申疑滯。約俱舍。婆娑等問之。其酬對甚精熟。遂停月餘。就讀毗婆娑論。

(8) J. Lévi, Missions de Wang Hien-tse dans l'Inde, Journal Asiatique, 1900, pp. 447-448 (des monastères du Kapiça).

(9) J. Marguart, Éranšahr, p. 291.

(10) Lévi - Chavannes 氏の書を Mundi

visita と復原 → Journal Asiatique  
1895, p. 354.

- (11) Amitābha-vana? (Journal Asiatique, 1895, p. 354)
- (12) Ananda? (Journal Asiatique, 1895, p. 354)
- (13) M. A. Stein, Kaḥana's Rājatarāṅginī, p. 133,  
Bok IV, n. 142-143 & f.n. 140-143.
- (14) 第四章注(79) - (83) 参照。
- (15) 水谷真成『大唐西域記』、五二頁。
- (16) 山田明爾『ウマー・マハーシユヴラ像  
の銘文』(『史林』第五四卷第三號、一

1574

九七一年)、一六八頁以下。

- (17) 原實『宗教研究』第三五卷第一輯、一  
九六一年。

- (18) J. Hackin, MDAFA, tome 7, 1936.

- (19) 以下ハイル・ハーサの記述は、一九七四  
年における筆者の観察を加味している。

- (20) P. Bernard et F. Grenet, Découverte d'une  
statue du dieu solaire Surya dans la région  
de Caboul, Studia Iranica, tome 10 (1981),  
p. 127 f.

1575

(21) 『白鳥庫吉集』第六卷、三五二—三五三頁。

(22) 堀謙德『解説西域記』一九一二年、一〇〇頁。

(23) F. C. Margotten, The Origin of the Islamic State, Part II, N.Y., 1924, pp. 143-144, G. Le Strange, The Lands of the Eastern Caliphate, Cambridge, 1905, pp. 345-346, J. Marguart u. J. J. M. de Groot, Das Reich Zābul und der Gott Zün vom 6.-9. Jh., Festschrift Eduard

1576

Sachau, Berlin, 1915, S. 274-277. L. W.

Adamec(ed.), Farah and Southwestern

Afghanistan, Historical and Political Gazetteer of Afghanistan, Vol. 2, Graz, 1973, p. 296.

(24) 第五章注(一)参照。

(25) J. Hackin, MDFAA, tome 7, 1936, pls. XIV-XVI.

(26) P. Bernard et F. Grenet, Studia Iranica, tome 10, fasc. 1 (1981), pls. XIV-XVI.

(27) J. Hackin, MDFAA, tome 7, 1936, pls. XI-XIII.

(28) J. M. Rosenfield, The Dynastic Arts of the

1577

Kushans, Berkeley and Los Angeles, 1967, pl. 104.

- (29) G. Tucci, Preliminary Report on an Archaeological Survey in Swat, East and West, Vol. 9, No. 4 (1958), pp. 329-328, fig. 40, R. C. Agrawala, Urdhvaretas Ganeśa from Afghanistan, East and West, Vol. 18, Nos. 1-2 (1968), p. 166, fig. 1.

- (30) 銘文の解讀は注(29)の兩氏がおこなった。ほぼ共通した見解であるが、最後の部分は大いに異なっている。

1578

- (31) R. C. Agrawala, East and West, Vol. 18, Nos. 1-2 (1968), p. 167, fig. 4.

- (32) G. Verardi, Notes on Afghan Archaeology, II - Ganeśa Seated on Lion: a New Śāhi Marble, East and West, Vol. 27 (1977), pp. 277-283, figs. 1-4.

- (33) D. Schlumberger, Le marbre Scorretti, Arts Asiatiques, tome 2 (1955), pp. 110-119, pls. I-II.

- (34) M. Taddei, India, Archaeologia Mundi, Geneva, 1970, Illustration No. 138, p. 255.

1579



示による。

(43) 未発表資料。アフガニスタン国立博物館蔵

(44) M. Taddai, An Ekamukhalinga from the N.W. F.P. and Some Connected Problems, A Study in Iconography and Style, East and West, Vol. 13, No. 4 (1962), pp. 188-310, figs. 1-4, 7, 9.

(45) A. Foucher, La Vieille Route de l'Inde, MDFAA, Tome I, 1942, Pl. XXXI, 60, pp. 34, 172.

(46) B. Dagens, Fragments de sculpture inédits,

7851

MDFAA, Tome 19, 1964, p. 35, Pl. XXII, 3, 4.

(47) M. Taddai, Una Kaumodakigadā di Arte Śāhi nella raccolta dell'Istituto Universitario Orientale di Napoli, Arte Orientale in Italia, III, Roma, 1973, p. 69.

(48) D. Barrett, Sculptures of the Shāhi Period, Oriental Art, Vol. 3, No. 2 (1957), pp. 54-59, fig. 1-a, b.

(49) K. Fischer, Arts Asiatiques, Tome 10, fasc. 1 (1964), p. 35, f.n. 1, K. Fischer, Preliminary

8851



Remarks on Archaeological Survey in Afghanistan, Zentralasiatische Studien, 3 (1969), pp. 339, 340.

- (50) L. Edelberg, Fragments d'un stupa dans la vallée du Kunar en Afghanistan, Arts Asiatiques, tome 4, fasc. 3 (1957), pp. 199-207, J. E. van Lohuizen-de Leeuw, An Ancient Hindu Temple in East Afghanistan, Oriental Art, Vol. 5, No. 2 (1959), pp. 3-11, K. Fischer, Zentralasiatische Studien, 3 (1969), p. 357.

485/

- (51) A. Stein, Archaeological Reconnaissances in North-Western India and South-Eastern Iran, London, 1937, p. 36f.

- (52) アッカン・ヤーニヤル説 ↓ ハイル・ハーナ上層神祠は三堂並列の特殊な形をとっているが、中インドのブマラ・シヴァ寺院と比較する。ブマラは石造單室で、低い基壇の上にエーカムカリンが安置されたガルバグリハ、その外をめぐらしたクシナー・パタ、マンガパ、正面左右の堂

485/

から成る。ハイル・ハーナム・アマラも祠  
 堂・プラン・方向が同じで、プラダクシナ  
 ー・バタ・マングパもつ點も同じだと  
 アツカンはいう。プラダクシナー・パタ  
 とかマングパは、たえハイル・ハーナに  
 といが認められるとしても、ヒンドゥー  
 寺院に共通のものであり、比較の対象で  
 はなからう。スーリヤはダングとヒンガ  
 ラを従えている。アツカンによると、イ  
 ンドのスーリヤは二形式あり、一つはス

ーリヤが戦車に乗り、脇侍がいなのが  
 普通だが、居れば暗黒を驅逐する二人の  
 婦人射手である。もうひとつは、書記ヒ  
 ンガと戦士ダングで、エデツサの太陽  
 神の脇侍アジゾス・モミモスから系統を  
 引くとする。アマラ、ハイル・ハーナの  
 スーリヤは後者に属する。ハイル・ハー  
 ナのスーリヤはその衣裳・頭飾において  
 シヤーポール二世からシヤーポール三世  
 のサーサーン朝四世紀のものに近い。こ

ルりからバイル「ハ」ナのスーリヤを五  
世紀にあてゐる。マーシャルは、アツカン  
のハイル「ハ」ナ發掘報告書評において  
スーリヤ年代を認めたが、ブマラの發掘  
者であるマーシャルは、ブマラを古世紀  
とするので、矛盾している。なおブマラ  
については、R. D. Banerji, The Temple of Siva  
at Bhumarā, Memoirs of the Archaeological  
Survey of India, No. 16, Calcutta, 1924. マ  
ーシャルの書評は JRAS, 1937, pp. 499-501.

シュランベルジェ説↓大理石像がハイル  
ハ「ナ」ばかりでなく、ガルデーアのガネ  
ーシャ、タガリオのリンガ、スコレツ  
ティ「ド」ウルガー、ガルデーアのシヴァ  
など豊富になつた時點における見解。大  
理石像が丸彫りであること、表現形式が  
大理石像以外の彫刻にみられないこと、  
片岩でなく大理石が限られることをあげ  
ガンダーラ佛教彫刻とは異質であること  
に注目した。年代はハイル「ハ」ナ下室

出土のナポキー貨幣に求めらるとし、  
ギルシユマン説を妥當として七世紀もス  
ーリヤにあて、他像は不明としながら、  
佛教造像活動が下火になったエフタル末  
期以降、イスラーム以前という理解を示  
した。  
ゲツツ説↓キダーラックシャーン以後東  
アフガニスタンに占めていたシャイヴァ  
ズムに大理石像は属する。シユランバル  
ジエが理解できなかったタカイオのトル

1590

ソーを六ないレハの腕をもつシヴァとし  
たのは、一〇世紀以後にならないうとヴ  
シユヌ像が一般化しないからである。シ  
ユランバルジエは「スコレツテイ」像も  
ミトラッタウクトノスと考えたが、ゲ  
ツツは正しくドウルガート、エローラ  
ー一七窟やラーヴァナカールカールの  
マヒシャースラマルディニ像と同時代  
とする。七世紀といふ。H. Goetz, Late

Gupta Sculpture in Afghanistan: the "Scorretti"

1591

Marble" and Cognate Sculptures, Arts Asiatiques,

Tome 4, fasc. 1 (1957), pp. 13-19.

バレット説↓ハイル「ハーサのスーリヤ  
にっははシエランバルジエ説を採り、  
ガルデーズのシヴァとカシエミール様式  
とみてハ世紀後半、スコレツテイ像を  
マヒシヤマルデイニヒてハ世紀とす  
る。ドウルガの姿勢をエレファンタヤ  
ボンバイのプリンス「オグ」ウエイルズ  
博物館のドウルガに求め、三叉戟のお

1592

き方をアイホーレ、エローラ（一四、一  
セ、ニー、ニ七窟）の像と比べ、デカン  
の諸像を七一九世紀とみて、大理石像の  
年代を示唆した。さらにアトック、ブネ  
ールヒッパタガンダラ発見、ブリテイ  
ッシュ博物館蔵品二點を紹介。D. Barrett,

Sculptures of the Shāhi Period, Oriental Art,  
Vol. 3, No. 2 (1957), pp. 54-59.

トウツチ説↓スワート調査でえた知見の  
中で、ガルデーズのガネーシヤ像を考へ

1593

る。とくに基臺の銘文末尾の Khingala と  
貨幣銘にみえる Deva sahi Khingala と  
ジャタランギニーの Narendraditya Khin-  
gala とのかかわりの中にとらえる。ナレ  
ーンドラーディヤガブーティシエダ  
アラに祠堂を奉納したといふ同書の記事  
とこの大理石像造主ヒンガラのマハ  
ラーサーヤカ願求へ銘文にみえる）に結  
ぶ。すなわち、ナレーンドラーディティ  
ヤはこの像銘のヒンガラだと。『ラ  
ーシヤ

タランギニーはこの王をミヒラクラの  
後継者とする。貨幣形制からはヒンガラ  
はミヒラクラより二代前に當るといふ  
サンヤラポソンエトゥツは引用する。  
王名につづく部分を Khingalo-tyana とし  
人だトゥツは、ウディヤナが碑文に  
あらわれる唯一の例とする。この読みは  
次にあげるアグラワラが異見を提出した。

East and West, Vol. 9, No. 4 (1958).

R "C" アグラワラ説 ↓ ガネーシヤ立像

ニ例の紹介。マトウラーの二臂  
 虎皮表現と、ウダヤヤリのカネーシヤ  
 エレクトリックンガ表現とが混合した  
 のと見る。すなわち大理石像にふたつの  
 美術の潮流を見る。年代を示していない  
 ファイツシャー説↓グプタ期からの系統と  
 ガンダーラ佛教彫刻からの形式とカシユ  
 ミール彫刻様式とが大理石像に流れてい  
 る。アフガニスタンの土地でふたつた  
 とつの折衷様式だとする。注(35)をみよ。

1596

なおアグラワラ説は注(31)、シユランベ  
 ルジエ説は注(33)、アツカン説は注(25)。  
 タツティ説↓エーカムカリンの紹介  
 モーテ、ホストグプタ期やガンダー  
 ラ後期の影響を認める。ポストグプ  
 タ期の廣い活像活動の中心を  
 カイバル河流域に見ている。シヤ  
 ーヒ朝のものとする。注(44)をみよ。  
 ドゥレウ説↓エーデルベルクがクナ  
 ル上流千ガサライで発見した大理石

1597

建築要素を佛教ストゥーパの一部とした  
のを訂正し、ハルハル世紀におけるヒンド  
ゥー教寺院の存在をソルト・レーンジか  
らクナル河に至る間に認めようとするも  
の。筆者もエーデルベルク発表分につい  
ては、ソルト・レーンジのヒンドゥー寺  
院との關聯を承認するものである。本文  
に示したとおり、大理石像はハルハル  
は下るカーピシー・テユルク朝のもので  
あるが、ヒンドゥー・シャー朝の造像・

1598

造寺活動はウダバーンダと中へとソ  
ルト・レーンジに及ぶ地域におこなわれ  
たと考える。その検証には今後大規模な  
調査が必要である。

(54)

D. C. サルカルは、ウマー・マヘーシ  
ヴァラ铭文を六世紀または七世紀の後期  
グラフィティーとする。P. L. Gupta and D. C. Sircar,  
Umā-Mahēśvara Image Inscription from Skandar.

(Afghanistan), Journal of Ancient India History,

Vol. 4, Nos. 1-2 (1972-1973), p. 3.

1599



- (55) R. D. Banerji, MA SI, No. 16, 1924.
- (56) Mission Paul Pelliot, I - Toumchoug, Paris, 1961, Pl. XLIX, 116.
- (57) M. A. Stein, Ancient Khotan, Vol. 2, Oxford, 1907, pls. LX, LXIV, F. H. Andrews, Wall Paintings from Ancient Shrines in Central Asia, Oxford, 1948, Pls. V, Bal. 0200, VII, Har. D.
- (58) 十一ノ王冠關係の資料は次の通り。  
A. Pope, A Survey of Persian Art, Vols. I, II, Oxford, 1938, E. Herzfeld, Am Tor von Asien,

160

- Felsdenkmale aus Irans Herdenzeit, Berlin, 1920, F. D. J. Paruck, Sāsānian Coins, Bombay, 1924, O. M. Dalton, The Treasures of the Oxus, 3rd. ed., London, 1964, V. G. Lukonin, Persia II, Archaeologia Mundi, Geneva, 1969, R. Göbl, Sasaniidische Numismatik, Braunschweig, 1968.
- (59) H. Inghold, Gandhāran Art in Pakistan, N. Y. 1957, figs. 287 (樹下菩薩坐像と供養する王像(？)はその丈高い冠に三日月とつた)

160

3 點 + 恒目 + 23°), 314.

(60) J. Hackin et J. Carl, *Nouvelles Recherches Archéologiques à Bāmiyān*, MDAFA, tome 3, Paris, 1933, pp. 20-23, fig. II (p. 17), fig. V (p. 19), fig. VI (p. 21).

(61) MDAFA, tome 3, pls. XXX, XXXI, XXXIV.

(62) MDAFA, tome 3, pl. XXXI.

(63) MDAFA, tome 3, pl. XXXII, figs. 35, 36, pl. LXXXII, fig. 91.

(64) MDAFA, tome 3, pp. 5-11,

1602

(65) MDAFA, tome 3, pl. XI, fig. 12.

(66) MDAFA, tome 3, pl. LXVII.

(67) MDAFA, tome 3, pp. 39-46, fig. XI.

(68) タビ = サングーニニールは、M. Taddai, Tapa  
テイの報告がいくつかあるが、基本的  
次の二つの概報による。M. Taddai, Tapa

Sardār, First Preliminary Report, East and

West, Vol. 18, Nos. 1-2 (1968), pp. 109-124,

M. Taddai and G. Verardi, Tapa Sardār,

Second Preliminary Report, East and West

1603

- Vol. 28, Nos. 1-4 (1978), pp. 33-135.
- (69) East and West, Vol. 18, Nos. 1-2, Figs. 40, 42.
- (70) East and West, Vol. 18, Nos. 1-2, Figs. 47, 60.
- (71) East and West, Vol. 28, fig. 156.
- (72) East and West, Vol. 18, Nos. 1-2, Figs. 28, 29.
- (73) East and West, Vol. 28, Figs. 27, 116, 218, 219, 247.
- (74) J. Hackin, Le monastère bouddhique de  
Fondukistān (fouilles de J. Carl, 1937),  
MDAFA, tome 8, Figs. 174, 196.
- (75) MDAFA, tome 8, p. 57, J. de Morgan, Manuel

1604

- de numismatique orientale de l'antiquité et  
du Moyen Age, tome 1, Paris, 1923-1936, p. 45,  
fig. 598.
- (76) R. Ghirshman, MDAFA, tome 13, pp. 28-32.
- (77) R. Göbl, Dokumente ..., II, S. 313-314.
- (78) MDAFA, tome 8, fig. 189.
- (79) MDAFA, tome 8, figs. 157, 158.
- (80) A. Cunningham, Ancient Geography of India,  
London, 1871, pp. 99-103.
- (81) M. A. Stein, Kalhanas' Rājataranginī,

1605

Vol. I, book IV, v. 188

(82) ラリターデーティヤ年代諸説 → R. T. Tri-

pathi, History of Kanauj, Banares, 1937, p. 201f.,

Adhis Banerji, Yasovarman of Kanauj, Indian

Culture, xv, 1949, p. 203f., H. C. Ray, Dynastic

History of Northern India, I, Calcutta, 1931-

1936, p. 112, H. Goetz, The Conquest of Northern

and Western India by Lalitāditya - Muktāpīda of

Kashmir, Studies in the History and Art of Kashmir

and the Indian Himalaya, Wiesbaden, 1969, p. 8f.,

1606

M. A. Stein, Kalhana's Rajataranginī, Vol. I, Introduction, p. 67f.

(83) 開元初。遣使者朝。八年。詔冊其王真陀

羅祕利爲王。間獻胡藥。天木死。弟木多

筆主。遣使者物理多來朝。

(84) M. A. Stein, Kalhana's Rajataranginī, Vol. I, p. 130.

(85) Journal Asiatique, 1885, p. 350.

(86) M. A. Stein, Kalhana's Rajataranginī, Vol. I, Introduction, Appendix I, p. 136.

1607

- (87) R. C. Kak, Ancient Monuments of Kashmir, London, 1933, pp. 152-154.
- (88) 第五章注(39)の文献。
- (89) 注(53)末尾を参照したい。
- (90) M. Taddei はストゥーパに向って左側の祠堂を巡観する行為を説明している。→  
A. Note on the Parinirvāṇa Buddha at Tapa Sardār (Ghazni, Afghanistan), South Asian Archaeology 1973, Leiden, 1974.
- (91) M. Taddei, The Mahishamardini Image from Tapa Sardār, Ghazni, Afghanistan, South Asian

1608

- Archaeology, London, 1973.
- (92) East and West, Vol. 28, p. 47f.
- (93) パンチカ「ハーリテイ」は、小川貫次「パンチカとハーリテイ」の「歸佛縁起」(『佛教文化史研究』、京都、一九七三年)
- (94) I. T. Kruglikova, Dilberdjin, Moskva, 1974, str. 44-48.
- (95) Joanna Williams, The Iconography of Khotanese Painting, East and West, Vol. 23,

1609

Nos. 1-2 (1973), pp. 109-154.

- (96) A. M. Belenitski et B. I. Marshak, L'art de Piandjkent à la lumière des dernières fouilles (1958-1968), Arts Asiatiques, tome 23 (1971), pp. 3-39.

- (97) パーシヤーンに——語でもふれるものはすべし抽出し、パーシヤーン史料集成をおこない、「パーシヤーン私注」(『建築史學』第二號、一九八四年)として注釋を附した。これには、アラブ・イスラーム

ム史料も加えた。

- (98) 銚石のパーシヤーン東大佛についてはこのハまで、玄奘の誤認だとか、否長逗留した玄奘にして誤まるべくもないなど、しばしばいわれた。三八メートルもの巨像、しかも岩にほられた像に外被をかぶせたための議論も仰々しくおこなわれ、てきた。「分身別鑄。總合成立」の解釋もいろいろある。その紹介は、久野健一「パーシヤーン東大佛と銚石」『國華』

第一〇〇二號、一九七七年）に詳しい。

本論中に記したとおり、現状は「鋳石製」を容認できない像の外面を示している。

「大唐西域記」に撰述時点であやまっていた鋳石であったと記録されたとすると、一分身別鑄に云々は自然に机上で考案された製作方法であろう。

- (99) S. Julien, Histoire de la vie de Hiouen-thsang, p. 373, S. Beal, Si-yu-ki, p. 51, Th. Waters, On Yuang Chwang's Travel, p. 118, 水谷真成

1612

大唐西域記、一九七一年、四五頁。

- (100) East and West, Vol. 22, Nos. 3-4 (1972), pp. 379-382.

- (101) B. A. Litvinskii, T. I. Zeimal, Ajdina-Tepa, Moskva, 1971.

1613

# 附 論



## 附論

トハリスターンのエフタル、テュルクとその城邑

桑山

アラブ地理書がアイム以南のトハリスターンを上下とか東西に分けた理由はともあれ、自然環境や生活形態をみると、トハリスターンはどうしても東西にわかれる。東西の境は、北流するスルハーフ流域とフルム河流域との間によこたわる山岳地帯である。山岳地帯は北へ低くなり、アイム南岸近くでダシユトとなり、その中をクンドウズ・フル

ムを結ぶ路が通っている。山岳地帯をロバ  
ツク峠をこえてバグラーン、サマング  
ーリスターンの東部と西部とを直接つなぐ路  
はこの二路しかない。

## 東部

東から南がヒンドウークシユとその  
支脈とから成る高地である。ヒンドウーク  
シユの高峰から發したアングラブが南方で  
西流し、バミヤーンから流れてきたバミ  
ヤーン川とドーシード合流して、スルハーブ

となつて北流する。北方では東方に發した  
ターラカーンハナード河が西流し、  
クンドウス北西でスルハーブと合流し、ク  
ンドウス河となつて、カラハエザールでア  
ームーに注ぐ。また東方、ヒンドウークシ  
ユ深くに發したコークチャ河は、山岳部から出  
て平野部を急いで通り、アームーにホージャ  
リガルで注ぐ。ターラカーンハナード  
ード河とスルハーブとはトハリスターン  
でもっとも長い流域を平野部で形成して

東北のバダフジヤーン（キシム以東）は夏季の優秀な牧草地として牧民を誘う一方、西部は、タラカーン、ハーナーバード流域にタラカーン、ハーナーバード、クンドラズ、カラッイエザール、そしてスルハープ流域にバグラーン、ゴリーの沃野をつくり、町邑（かつては城郭）を現出している。

## 西部

地形は南高北低で、その境目は明確である。東部のような漸高の地勢ではない。北流するフルム、バルフ両河の谷は狭く、流

域にひらけた土地をつくることとが稀である。急激に北方の平原に流れ出て、フルムのような扇状地をつくり、あるいは四散して尻無河となり、アームに至る河水はない。山と原との接線にフルム、バルフ、アークチャ、シバルガーン、サリポルなどの寒村をつくる。北方の平原では、山に近い南半は灌漑が成功すれば一大耕地となる。有数の牧地と沃野とに恵まれた東部トハリスターンに大規模なパシユトゥン牧民がバダフシャーンを夏営地、

スルハীগ流域を冬營地として、ウズベクヤ  
トルクマンら定住して農耕を主業とするひと  
びとと共生している。  
トハリスターンを政治上統合した在地定  
住勢力はなかった。ソグダイアーナヤターリ  
ム盆地と事情は同じである。大夏に大君長は  
いない、各城邑に小長がいたのがある（元史  
記と大宛傳）。數百年以來、王族はあとを絶  
ち、土豪は力きとい、そのれ君長だといつ  
て、山川に依據し、二七地方にわかれ、野を

畫し、區分けているが、七世紀はじめには  
みなテュルクに役屬していた（大唐西域記  
の卷一、觀貨羅國綜記の條）。このテュルク  
を、クシャーンとかエフタルと置きかえても  
よい。トハリスターンにおいては定住城郭  
の民とかから遊牧の民とは共生した。プロ  
イスラーム時代におけるこの地方を語るのは、  
零細な漢文獻と考古資料である。ここでは、  
時代を前後してトハリスターンの城郭の名  
稱を伝える漢文獻をとりあげる。エフタルか

ラテュル<sup>7</sup>の時代にわたる城邑の比定が、從來遊牧族の動向とからめておこなわれたが、いづれも一長一短。地圖と文獻操作だけに依つて立ち、恣意の原音想定をやっても何ら問題には解決しない。トハリスターンに一九六〇年代から七〇年代にわたって考古調査に従事し、實地の経験をもった者が、現地の自然地理を念頭に、冒頭に示した概念を基礎にしてトハリスターンの城邑を検討することは責務の一である。

エフタルの出自をアルタイに近しなどとした重松俊章<sup>一</sup>一九一九<sup>二</sup>は、エフタル王治<sup>三</sup>たと<sup>四</sup>周書に異域傳にみえ<sup>五</sup>「拔底延城」を吐火羅國王の住城と慧超が記した<sup>六</sup>「縛底耶」<sup>七</sup>とか<sup>八</sup>「唐書」石汗那國傳の「縛底野」と同一原音異記とし、縛喝<sup>九</sup>「大唐西域記」・<sup>一〇</sup>慈恩傳<sup>一一</sup>）や縛渴羅<sup>一二</sup>「大唐西域求法高僧傳」<sup>一三</sup>と同じ城で、今のバルフであるという。宮崎五十騎<sup>一四</sup>「一九三一、一九三五」は城邑にふはず、<sup>一五</sup>しも未完。エフタルをトハリスターン出身



男「一九七〇…二一七、二一八、四四〇一四  
 四一、四三四」は、活路を Ghur、滑を Ghur、  
 拔底延を縛底野といた。藤田豊八「一九三一  
 …五五六一五八」は、縛喝、拔底延、縛底  
 野、薄提、縛叱（月氏都督府下の大夏州）を  
 バルフと一、過換（阿緩）、活國都城を Kuyhan-  
 diz（Kunduz）といた。  
 活をワルワリーズにあて、クンドウズに比  
 定したユール「一八七三」が「大唐西域記」  
 の觀貨邏諸國を山川に従って現實の地形にふ

りあつた地圖は今日なお價值を失つていない。  
 シヤザアン「一九〇三」は、タバリ、ア  
 ブールフェダ、ヤークトに據つて、Badghis  
 の中心をバーミヤーンといて、こゝをエフタ  
 ルの主邑とみ、拔底延をバードギースだとい  
 ったスペヒト「一八八三」を認め、拔底延  
 バードギース「バーミヤーン」エフタル主邑  
 といふ説である。彼によつてエフタル副邑は、  
 縛喝である。「西域記」が縛喝國都を小玉舎  
 城といひ、「周書」が拔底延を玉舎城といふ。



からである。敦煌出土、パリオ同定以来實體  
 がはつきりした西域五天竺國傳に、バーミ  
 ヤーン王は胡、餘國に屬さず、諸國あえて來  
 侵せずといふ點を考慮すると、シャヴァンヌ  
 説はもはや成立しない。マルクヴァー  
 トハ九〇三、八四、八五、二一四以下は、薄提  
 縛底耶、縛底野をバルフ、活路をトルコ語の  
 オルドの轉化だといつ、呬摩坦羅にあつた  
 かれによると、拔底延 Pooti-yes (北京音) は  
 近世ペルシア語に復原すると Padiyas だといふ

が、中古音にもどすべきである。活 Oat、阿  
 緩 A-hwan、Marwaliz, Marcian はみな War に  
 由來するといふ。クンドウズ附近にある [Mar-  
 kwart 1938: 35f, 43-45]。ヒンドウークシュ  
 南麓、パンジュシル左岸に發見したセトカ  
 ーバード墓坑出土の貨幣をもとに、同種の貨  
 幣を収集分類し、銘文を試讀してエフタル貨  
 を設定したギルシュマン「一九四八」は、考  
 古・文字兩資料を合わせてエフタル問題全般  
 にせまつたかにみえた。ーカー、現地を知り



ながらトハーリスターンにおけるバルフの自然人文兩方面の地理上の位置を考慮せず、游牧族の動きの歴史的傾向を無視した。エフタル夏都をヘルマンハー九ニ五に從いつつ拔底延とし、ボハラクなるバダフシャーンの一遺迹にあつた。カーピシーの都城をベグラームでなく、グンデハパイサにあつたニとともにも粗相だといわざるをえまい〔Ghishmans 1946: 41, Kumbayama 1974, 76-77〕。

かく異見續出したのは、史料が質量ともに

限定さへしているうえに、一單なる名稱の類似や發音の類だけをもってすぐさまむすびつける。へ松田一九七〇主觀が先行したからである。さらに根本問題として、トハーリスターンという地域そのものに對する認識が欠如しているたのである。机上にいろげな一枚の地圖と文獻の操作とから一體何が出てくるであろう。冒頭にトハーリスターンの自然を記したの、單なる導入のためではなく、地圖からいはいといて認識できないトハーリスター

ンを示し、そのことが本論の問題に深くかかわることを豫報したのである。

宋雲らはフツハーシンの隘路からトハリス  
ターシへ出て、田畑がひろびろと続き、山  
澤がかなたにつらなる。洛陽伽藍記に卷  
五、エフタル王庭の地に至った。人口は一  
萬。妻を別處にエ、三〇カ里はなれておき、  
城郭に住むことなく、遊軍統治し、毛織物  
でテントをつくり、水や草をおう。王は月ごと  
に居處をかえ、冬三月に移りすまない。魏書

嘯達傳、<sup>口</sup>洛陽伽藍記<sup>山</sup>卷五<sup>一</sup>。城郭内には  
 住まないけれどもトハリスターン有数の城  
 郭一圓に冬營した。<sup>口</sup>周書<sup>山</sup>異域傳の拔底延  
 城とはそのような城郭である。五五五年には  
 ガンダラを出發し、カーピシー、バーミヤ  
 ーンまわりでトハリスターンに入ったジナ  
 グプロタは、<sup>一</sup>エフタル國についてはじめて逗  
 留した。<sup>口</sup>野は空莫として人口は稀薄、必要な  
 食料を人はつくらない。<sup>口</sup>グプロタはついに具足  
 戒を捨て、力をつくしてエフタル王につかえ

<sup>一</sup>は<sup>一</sup>は時局の困難にあつたが、冥靈の祐け  
 るところ幸にして災を免れた。<sup>口</sup>續高僧傳  
 山卷二<sup>一</sup>。宋雲がエフタル王に會見した時節  
 は<sup>一</sup>十月之初<sup>レ</sup>であるから、冬營地で會つた。  
 宋雲・ジナグプロタともに山澤いやのぞむ地と  
 エフタル國を表わしてゐる。冬營地になりう  
 る地方はトハリスターンでは限定される。  
 夏營地と對になること、夏營地はバダフシヤ  
 ーン一帯であることを考慮し、現今の遊牧民  
 の動向をながめると、東部トハリスターン

の河川中下流域が冬营地である。城郭はその地方にあったのである。宋雲・ジナグパとくに呾摩咀羅なる山岳地帯でエフタル王に會ったとは解せない。そこに拔底延城があったとは笑止である。

五五五年（西魏恭帝二年）に突厥の木杆可汗は柔然を西魏に奔らせ、エフタルも攻破した（『通典』、『北史』の蠕蠕傳、『周書』、『隋書』、『北史』の突厥傳）。さきに柔然婆羅門の姉妹をみたび娶ったエフタルはこのつ

ながりをたのんで、ソグドヤタリム盆地西縁をおさえたいという。柔然を破った突厥にエフタルは、當然次は西なるエフタルを攻略するわけである。五五八年、室點密可汗は柔然を壊滅させ、女婿ホスロウ一世と協調しつつエフタルを攻めた。タシユケント、フェルガーナ、サマルカンドは突厥下に入った。五五二年、室點密は再度エフタルを攻めた。五五八年までは、アームー以南へ勢が及んだ（ALTHEIM 1969: 260-261, Haussig 1956）。エフタル

ルは北周明帝二年（五五八）に中國に對する最後の朝貢をおこなったのち、突厥に破られ、部落分散、職貢ついに絶った（『周書』嚧達傳）。『隋書』挹怛國傳は「先時、國亂、突厥は通設字詰を派遣し、その國を強領した」と。  
通設が送りこまれたエフタルの地、トハリスターンに關する情報は『隋書』の吐火羅國傳・挹怛國傳であり、また今はない『西蕃記』、『西域圖記』、『達摩笈多傳』であつ

たはずである（『桑山』一九八三・一七六一七）。『隋書』の吐火羅と挹怛とはその位置をカーピシーたる漕國（『桑山』一九八二・一七六一七）から計測してある。漕から北へ一七〇〇里が吐火羅、北へ一五〇〇里が挹怛である。同様に帆延（バミヤン）は漕の北七〇〇里にあると、『隋書』はする。カーピシー、バミヤン、エフタル、トハンは南から北へ疆域をつらね、なかんづくトハリー・エフタル間は二〇〇里といふ關係

である。『隋書』挹怛國傳に、挹怛の中心の城邑は烏澹水の南二〇〇餘里にあるという。だからその北二〇〇里にある吐火羅とは、烏澹水岸にあることになる。『通典』边防九に吐火羅の都は「葱嶺の西五〇〇里、烏澹水の南にある」とするのは、まさしくこのことを證明している。『魏書』吐呼羅國は四至を「東至范陽國、西至悉萬斤國、南至連山不知名、北至波斯」として地理の實情と離れるが（桑山一九八四—一九九一）、玄奘が指

した範圍に近い。玄奘は南北千餘里、東西三千餘里、東は葱嶺を距し、西は波斯に接し、南は大雪山、北は鐵門に據り、縛芻河が境域のまゝ人中を西へ流小」といふ範圍を示している。また、アラブ地理家は、アーム以南バルフ以東を指し、いたらしい（Minorsky 1937: 337）。『隋書』はこのようなトハリスターシのいく一部を指して吐火羅といったのであ

る。裴矩『西域圖記』自序にみるように、隋代に西海に達する三道中、南道は敦煌からタ

一リム盆地南縁を進み、葱嶺をこえ、護密、吐火羅、挹怛、帆延、漕、北婆羅門の順にすすんで西海に達する。吐火羅と挹怛とははつきり區別さはいい。このような吐火羅を正しく「活」とよんだのは玄奘である。正確に現地音をとらえんとした玄奘にして一字表記の國名は「活」のみである。その「活」につき玄奘は、西突厥統葉護可汗の長男咀度設が治め、さらに咀度設の息子たる特勤が篡奪して新しく「設」となり、

吐火羅葉護と名のつた時點までを伝える（「葱恩傳」上卷一・卷五）。六二八年から六四四年までのことである。吐火羅葉護の衙所「活」は、「縛帛河側」にあり、その都城は河の南岸に在った（「葱恩傳」上卷五）。隋書に吐火羅の位置はまさに「活」である。エフタルの勢力をそいで、まず通設、ついで咀度設、そして吐火羅葉護の官稱を帯いた人物をもってトハリリスターンをおさえたテュルクは、「活」を根據、南牙と（「續高僧傳」上玄奘傳）、縛喝



王所部と一（<sup>見</sup>慈恩傳）卷二）、鐵門以南の  
 ろもろの小國を管轄し、鳥のように各地を移  
 りまわり、その居處を定めず（<sup>見</sup>大唐西域  
 記）治國）、一野を畫し、區分けいたし、トハ  
 リスターンを役屬させていた（<sup>見</sup>大唐西域記  
 西域傳綜述）。一方、エフタルは部落分散  
 して中國に對する貿易を絶たざるをえない状  
 況にありながら、一部は「活」地方に牧民の  
 ガループを残し（<sup>見</sup>與挹怛雜居）<sup>見</sup>隋書吐  
 火羅傳）、異域に流離する部族もあつたが、

テュルクの侵掠に對しては牧民としてのテリ  
 トリーを保ち（<sup>見</sup>又爲侵掠。自守其境。故此國  
 人流離異域。數十堅城。各別立主。穹廬毳帳。  
 遷徙往來。）<sup>見</sup>大唐西域記）卷一二、<sup>見</sup>呾摩咄羅  
 國）、依然として「活」の南方二〇〇里の土地を  
 本據として保有していた。五八八―五八九年  
 ホルミズド四世代にバードギース、ヘラート  
 へ侵入し、バフラーム・チョービンに破られ  
 バエフタルはその一部であつた（<sup>見</sup>ALTHEIN  
 1969: 261）。



玄装は歸途にカーピシーからヒンドウ  
 シュをハフーク峠（婆羅摩那大嶺）でこえて  
 アンダラーグ（安咀羅縛）上流域へ下り、北  
 西三〇〇里ほどで闊悉多（*Khotan* 又ハ *Kashgar* 地方）  
 に至り、再びそこから北西三〇〇餘里で活地  
 方へ到った。活は、縛伽浪の北東、咀蜜から  
 縛伽河を南渡したところにある。活の西に縛  
 喝、活・縛喝間には忽懷がある。忽懷は、紇  
 露悉泚健の北西、紇露悉泚健の北に縛伽浪が  
 あった。紇露の紇は中國語にない音声トの入

りわたりを示す（水谷一九七一三ハ  
 紇露は *Wai* に對し、悉泚健は *Sin* に對應す  
 る（*Minor sky* 1937: 338）。現今のルイーと  
 サマンガーン、フルム河の上流と下流とにあ  
 る村落である。同ド川の流域にあつて合成さ  
 れて不思議ない兩地方である。紇露悉泚健の  
 北西の忽懷、すなわちサマンガーンの北西は  
 フルムたの扇狀地の村落である。フルムの東  
 方、バグラーンの北東、アンダラーグの北西  
 六〇〇里、そしてアームーの南にある「活」

は、スルハーブとターラカーンハナバー  
 ド合流地帯の沃野である。この河が  
 通過するところ、河の南岸に南邊一ハ  
 〇〇メートルの、長方形平面のバーラ  
 サール遺迹があり、河北、アーム河との間  
 にタフテッカワードなる孤立山塊があり、都  
 城の北の障となつてゐる。カライエザール  
 クンドラズ平野において、河の南岸の名に値  
 して位置する都城迹はこのバーラヒサル  
 をおりてほかに見あたらない。表面採集土器

1646

は、正確に編年へ位置づけられていないが、  
 ギリシア・バクトリア時代のアーイ・ハーヌ  
 ムヤスルフ・コタルの土器よりも後代へとつ  
 ながる型式である (LEBERRE 1968, BERNARD 1978,  
 GARDIN 1957, GARDIN 1982)。ル・ストレーン  
 ジ [1905:408] によれば、ハウカルヤムカツダ  
 シーは、フルムとターラーカーンとの間にど  
 ちりから二日行程のマーサニンなる町の在  
 在も言う。『慈恩傳』で玄奘は「涇」から東  
 二日にして曹健に至つてゐる。曹健がターラ

1647

ーカーンであることは疑いない。そこは「活  
 しの東鄰りであり、フルムは「活」の西鄰り  
 であり、「活」がフルリースに當ることは  
 まずまちがいない。  
 テュルクが根拠としたトハラであり「活」  
 である地方には、大きな都城があり、河川下  
 流域の平野であるから、そこは冬營地である。  
 對する夏營地はバダフシヤーンである。七ニ  
 六、七年ごろに慧超は吐火羅國の玉の住城へ  
 行った。ーカーンそこはアラブが鎮軍していた

1648

ので、テュルクである吐火羅王（吐火羅葉護）  
 は、そのため東方一月行程の「蒲特山」に在っ  
 て住んでいた。（「往五天竺國傳」）。慧超  
 は蒲特山について「玉の住城」と言わないこ  
 とを考慮に入ると、冬營地をアラブに駐屯  
 させたテュルク王は夏營地にとどまり、  
 えなかつたともみられよう。鉢鐸創那と「大  
 唐西域記」に示した蒲特山の實際の位置は  
 どこか。「大唐西域記」によると、アームー  
 以南、「活」以東鉢鐸創那までに、曹健、訖

1649

栗瑟摩、呬摩咀羅となりんていす。また鉢鐸  
創那の東南には淫薄健、すなわちジヨルムを  
中心とするコクチヤ流域のヤムガーン地方で  
ある。タールカーンとジヨルムとの間に訖栗  
瑟摩、呬摩咀羅、鉢鐸創那が存在する。タ  
ラカーンから東のかたへ峻嶺を踰えて訖栗瑟  
摩へ至るのであるから、こゝはタールカーン  
河からコクチヤ河へと峠をこして別の流域  
に出たのである。キシムに至ったのである  
う。そこから東へ山をこえ川をこえて呬摩

咀羅である。『大唐西域記』に、『山川遷迤  
土地沃壤。宜穀稼。多宿麥。百卉滋茂。衆果  
具繁。』とある。次東の鉢鐸創那は、『山川遷  
迤。沙石彌漫。土宜菽・麥。多蒲萄・胡桃・  
梨・柰等果。』とあり、兩地を比較すると呬摩咀羅の  
方が鉢鐸創那より土地はこゝろ、鉢鐸創那は  
山岳地帯の産物ばかりである。したがって呬  
摩咀羅はコクチヤの流域でも山岳地帯にま  
だ入らない地方であるう。呬摩咀羅から鉢鐸  
創那へは、『東谷行二百餘里』である。コ

クチャの谷をまきく東へと入っていた。と  
 とを示している。また鉢鐸創那から沙薄健ま  
 では、從此東南山谷中行二百餘里で、これ  
 また西にいくコルクチャにまで、ジヨルム方向  
 へ行ったこととをのべている。鉢鐸創那はいま  
 のフアイザードをおいてほかに考えられ  
 ない。この國域は、山崖上に據る周圍が、  
 七里であった。

六五八年に唐はクチャ王と妻阿史那氏との  
 内紛に干渉して武力で治め、交河城の安西都

護府をクチャに移す一方、右國で沙鉢羅可汗  
 賀魯を捕え、所部であったヘルシアに至るオ  
 アシス國家を州府とし、都護府に組みこんだ  
 吐火羅葉護の稱をもつて貞觀十九年正月朝賀  
 以來、一ゲく中國へかよったトハリスターシ  
 のテュルクは、六五三年に「烏涇（涇）波」な  
 る人物がトハリーラッヤブグになったことを  
 唐に報じた（唐會要四）。このとき、その治  
 所な「活」は月氏府、自身は月氏都督とな  
 った（日冊府元龜四卷九七〇、繼襲一）。六

五八年の州府設置でも、吐火羅葉護阿史那氏は月氏都督、その阿緩城は月氏府であった（唐書吐火羅國傳）。六五九年には一七州縣府が、石・米・史・大安・小安・曹・拔汗那・疏勒、そして挹怛に設置された（日通鑑顯慶四年九月條）。六五八年のペルシア以東の設置には月氏都督府だけが知られるにすぎない。挹怛まで及んで廣く設置されたのは實は六五九年になってからだったのである。いずれにしても、パミール以西における

1654

治地方のテュル7がとりわけ意識され、重要な位置を占めていたのである。この設置が單に建て前だけにすぎなかったとしても、完璧に各地に割りふられ、整備されたのは、思結部の侯介都曼が討滅されたのちの六六一年である。このときもやはり治地方が重視された。ホタン以西ペルシア以東一六國に設けるといふのに、吐火羅道置州縣使が發令され、吐火羅（治）に聖德碑を立てていることが示している（日通典吐火羅國條等）。

1655

可舊唐書地理志は、一月氏都督府・吐火  
 羅國の所治たる遏換城に置く。其の王葉護を  
 以てこれを領めしむ。其の部内に二十四州を  
 分置し、都督これを統ぶといふ。可唐書地理  
 志は阿緩城とし、二五州とし、各州の城  
 名を記す。エフタルも月氏都督府と同列であ  
 った。可舊唐書地理志は、噉達部落の所治たる活  
 路城に太汗へ可唐書地理志に大汗と都督府をお  
 いて、その太汗が領め、その部一五を州とし  
 て太汗が領めると。一五州は吐火羅葉護の二

1656

四州に次ぐ数であり、修鮮都督府カーピシー  
 の所治一一州を上まわっている。これは各府  
 の所治面積の大小では必ずしもないけれども、  
 所治の州数は現実のものである。カーピシー  
 の役属國を玄奘が十餘國と可大唐西域記に  
 記し、修鮮都督府下の州数と符合するからで  
 ある。とすると、エフタルはテュルクに壓迫  
 されてから一〇〇年のちも、なおヒンドウ  
 クシユ山地ではトハラーヤグと山南では  
 設番薛王朝カーピシーと互角の勢をもってい

1657



のである。すなわち山の地でテユルクとテリトリとエわかちつつ共生していったのになければならない。完全に分解し去って各部族はばりであつたなら、太汗都督府なる府州設置はなく、月氏都督府にすべて入つていったであらう。

可隋書吐火羅國と玄奘の活地方、テユルクのトハ一ウヤバグが依存した冬營地とみる立場に立つと、こゝにエフタル太汗の依存してゐた活路域も可隋書吐火羅國以來のアイ

ム一南方二〇〇里の地であつたはずである。可隋書吐火羅と挹怛とは南北の關係にあり、吐火羅がフンドウス河口地帯であるからには冬營地として成り立つエフタルの活路域はスルハ一バの中流域に求められよう。バグラ一ン・ゴ一リーの平野を置いて他にそのような地は見當らない。バグラ一ンの野は、東方の高地からナフリーン河が急激に落ちて四散する沃野である。南からはゴ一リー河が同様に入って四散する。スルハ一バはここから北流



一、低い丘陵地帯を貫流し、クンドウズの平原に出る。この丘陵は北のテエルク、南のエフタルの境界であったろう。バグラーン・ゴリリー平野はエフタルに先立つクシャーンの時代にもクシャーンの本拠地であった。平野を一望におさめる西方チエシュメ・シルの丘陵に、カルリが壮大なスルフコタル神殿を造営したことはあきらかである。その碑文に示されたバグとく、ここは *bago lang*。(神のいますところ) といわれ、一方の要マトウライ

のマート神殿が *Qovasar* と名づけられたことと對にならう。この点をフスマンは注意する [Fussman 1983: 150-152]。また、タバリーの記すように、クタイバの攻略に對處するエフタルの主タルハーンニザーク *Tarkhan Nizak* がバグラーンに兵をこまえたとする点も、この地がエフタルにとって重要な地であったことと語る (Minorsky 1937: 338, Frye 1979: xviii)。游牧族の依存する場は古うにかわらない。

慧超は吐火羅王の住城を縛底耶とてい  
 阿緩、遏換と同城であり、活國の大都城であ  
 る。また唐書に石汗那國傳に「石汗那。或  
 は斫汗那と曰う。縛底野より南のかた雪山に  
 入り、行くこと四百里、帆延を得。東のかた  
 烏潯水に臨む。……と。石汗那は赤鄂衍那（  
 大唐西域記に）で、アム川の支流スルハ  
 ーンガリヤー上流にある。傍點部を挿入とみ

1662

には、吐火羅の縛底耶。千ヤガーニヤーンの  
 縛底野ともみるこゝとができる。フラスハー九  
 三九、四四九は、縛底耶、縛底野と、  
 魏書に吐呼羅國の中の薄提にあて、現バルフ  
 だといふ。慧超は縛底耶へバーミヤーンから  
 は二〇日、カスニまで七日の行程とする。  
 イスタフリーヤハウカルは、バーミヤーンと  
 カスナとを八日行程、バーミヤーンとバルフ  
 とを一〇日行程とする（桑山一九八四、一四  
 三、一四四）。二つの全く異種の資料でカス

1663

ニ、バーミヤン間所要日数がほぼ同じな  
のに、かたやバルフまでは一日、かたや縛  
底耶まではその倍の二日だと言っている。  
バルフリ縛底耶と誰が承認できようか。縛底  
耶はバルフとは別である。  
薄提について、魏書吐火羅國傳は、一國  
中に薄提城がある。周匝六十里。城南に西流  
の大水があり、漢樓河と名づける。と。バル  
フの南に大水はない。薄提は *bandi* であるが  
アグエスター後のバルフにあり、四、五世紀

はバルフは *barf* といわれた (WITZEL 1980: 98)  
だからウィツェルによっても薄提をバルフだ  
とは言えない。吐火羅國に、いつのこととは知れぬが、薄提城  
今、薄底延城と名づく。國の北に在りと。  
薄提は、薄底延が薄提延となつて、延字がぬ  
けたものかもしくない。いすかにしても薄提  
や縛底耶やバルフではない。  
吐火羅國記は、つづけて、後魏書西  
域傳吐火羅國に薄提城有り、周匝六十里なり

と。西蕃記薄提城の十四五里ばかりと小異なり。とい。西蕃記に吐火羅國の條があったのであろう。そこに、薄提城、方十四五里とい記載があったのである。一か、一薄提城。今名薄底延城。在國北。が西蕃記の引用だからかはわからない。魏書に薄提城は「國中」にあった。わがわがどうにとわた以上、これは周禮に戴師の「任國中之地」の「國中」と同じ意義が與えられよう。西流大水は、アーム、コノクチャ、タールカ

イン、ハナーバード河の北である。ほかは北流、アーム以北の河はみな南流、トハリスターン西部は河川がき河川はない。しいてあげてもみな北流ばかりである。西流大水で國の中心となりうる平野は、タールカイン、ハナーバード、クンドリス、ホージア、ガールなどの地域のみ。だがその北岸に都城迹がない。クンドリス北方のイマームサーヒーブの平野はアームが形成したものの。六角平面のバール、ヒサルはあ

るが當該の時代のものではなく、またアーム  
 ー河の南岸だから、候補から外れる。となる  
 と、都城迹として候補が多いアームー北岸  
 に、魏書に薄提城は求められそうだと、いか  
 いない（BERNARD 1978: 56-61, 99-100）。縛底耶  
 と薄提とは自ら別處であり、縛底耶・縛底野  
 が音通で異記、薄提に薄提延に薄底延もまた  
 それと同じ原音を寫したものとすると、各地  
 にそういった名の城があったことになり、こ  
 れらが普通名詞であった可能性をおおわせる

1668

「周書に異域傳の厭哒國傳に、「其王治拔  
 底延城。蓋王舍城。其城方十餘里。」と。吐火  
 羅國傳のない「周書」に示された、エフタル  
 の中心地拔底延城とはどこか。咽摩咀羅は  
 ない。「大唐西域記」は咽摩咀羅にわがわが  
 都城の存在を記さなかった。拔底延が方一〇  
 餘里だという點で、周六〇里（方一五里）の  
 「魏書」に薄提や方十四五里の「西蕃記」に薄提  
 に結びつけられている（船木一九五四、松田  
 一九七〇）。エフタルがアームー河北に中心

1669

と据えた證據はないから、いまのところ魏書に薄提城は論外におちる。隋書にもみると、挹怛國都城は方一〇餘里である。城郭の規模で比較すると、利は隋書にあり、西蕃記にはない。隋書に西蕃記にも同時代のことを言っているのだから、西蕃記に薄提城は、隋書に挹怛の都城とは異なる。大唐西域記に國の大都城の大きさをどう表示しているかと調べると、闐爛達羅大都城の周と迦涇彌羅新城の南北長とも一二、

三里とするほか、一〇里以上の表示は、十餘里、十四、五里、十五、六里、十六、七里、二十餘里の五種しかない。だから十餘里というのは、十四、五里にほゞ達しない程度の里數表示であることがわかる。北魏の尺長は、27.9, 28, 29.6と三變し、北周・隋では29.6(以上cm)である(曾武秀一九六四)。魏周隋の三書も西蕃記にも絶對値に大差はない。このようにみると、拔汗延と魏書にや西蕃記の薄提

につなぐより、隋書に挹怛の都城につなげ  
る方がまゝである。

拔底延を隋書に吐火羅都城（活の阿緩な  
いし過換、縛底耶）につなぐことは如何。隋書

隋書に吐火羅都城は方二里であり、大唐西  
域記に活の都城は周二十餘里、すなわち方五  
里の大城である。方一〇餘里の拔底延城が急  
速に二里ないし五里に縮小したとは考えにく  
い。城郭の規模がわずかの期間に擴張なり知  
りず、小さくなるとは判りにくい。隋書

1672

西域傳は都城一邊の里數をほとんど一〇里以  
下に記して概して小さめに記録しているが、  
そんななかで挹怛の都城は、波斯のそれと  
もに突出している。吐火羅や挹怛だけが誤算  
誤寫だとは言えない。このようにみると、周  
書に拔底延は、隋書に挹怛の都城へつな  
がっていく。すなわちのち、活路城としてあ  
らわれる都城である。そこで、西蕃記の  
薄提城は、隋書に吐火羅都城とも別處だと  
いうことにもなっているよう。

1673



松田ハ一九七〇・一七八一・一八六、四四〇  
一四四一。船木ハ一九五四・六六。は拔底  
延を魏書と薄提とする。魏書は代から  
吐呼羅まで一、二〇〇里、周書は長安か  
ら嘯達まで一〇、一〇〇里とする。松田ハ一  
九七〇・一四四一によれば、長安一代は一九  
〇〇里である。周書は拔底延までの距離  
を魏書はの里數から一九〇〇減いて机上操  
作した。だから薄提は拔底延となるのではない  
かと。魏から周に至ってトハリスターンは

エフタリスターンと化した。代からではな  
に長安からの距離に改めておけば、あつたに  
知り小た拔底延までの距離になる。というの  
は周書は異域傳の作者の考えである。だが  
う薄提と拔底延とが同じ城だといふんでは歴  
史地理の實情にもとる。歴代トハリスター  
ンに城邑が唯一つだといふ認識に立った人に  
してはじめて可能な理窟である。單純な漢文  
史料の操作と原音不確かな名稱の重収合わせ  
(内田一九七二)は、太平寰宇記は薄底延



と日周書に拔延とは音において通ずると  
 とに依っていたるところは机上の遊戯にもなり  
 ない。

拔延城は「蓋、王舎城也」という。玄奘  
 が縛喝國都を小王舎城と記したのも、ラージ  
 ヤグリハとか、エフタルの拔延城に對して  
 言ったものではなからう。薄提、薄延、縛  
 延耶、縛延野、拔延延、こらがみな同一原  
 音を寫していたと假定すると、原音の意味は、  
 王居のある町という意味であり、土地の人が

1676

そのような町を指す普通名詞の呼稱ではなか  
 ったか。薄提は少くともアム河にあり、  
 縛延耶はクライエサルにあり、拔延延は  
 バグラーン・ゴリ平原にあったことは否  
 定できない。そうすると同じような名稱が各  
 地の中心と目される場所には存在したこ  
 事。いまカールの東南にある小カール  
 Khorsas はカールと何の関係ない。大小  
 とか主副とかのかかり方で、王舎城とか小  
 王舎城をとらえることは、全く無意味なよう

1677

である。カーガル周辺の人はカーガルをシャ  
 ール *Shahr* とよび、カーガルとよぶ場合はと  
 くに尋常の場合ではないことを注意しておく  
 エフタルはクシャーンと同じくバグラーン  
 ハゴリー平野の冬営に本拠をもった。また  
 夏営地は呾摩旦那。テウル南下以前にか  
 らが活やバダフシャーンをどうおさえてい  
 たか、これを示す資料はない。活、活路はよ  
 く似た原音が豫想されるが、全く場所は異な

る。活はエフタルの盛期に活路を中心とする  
 エフタルにとつて、アムー南岸の要衝であ  
 り、ある部族の有力な冬営地であつたとみ  
 よい。テウル南下後にもエフタルが居を雑  
 えるといふのはその名残りである。日  
 梁書に  
 にある滑とは、活・活路にいたエフタルを指  
 す南朝の理解である。テウルが南下すると、  
 活地方はテウルがおさえ、バダフシャーン  
 もテウル夏の営地となつた。エフタルは太  
 汗が統轄し、バグラーンゴリーは保つて

いた。テウルクは吐火羅葉護が統率し、スル  
ハ、ゾの中流と下流とに各々よりながら、牧  
民としてのテリトリを分けて共存した。そ  
れでも玄奘當時、安曇羅婆、闐悉多などはテ  
ウルクに属していたから、政治上のテリトリ  
―は複雑であつたろう。エフタルは分解し去  
つたのではなく、七世紀後半にもまだカーヒ  
シーヒカテウルクに互すかを保っていた。七  
ニ九年、骨咄祿達度<sup>ブツダ</sup>がトハ―ウヤ  
ブグに即いたこと、さらにエフタル王を兼ね

たことを中國史料は傳へる（『唐會要』卷九  
九、『唐書』西域傳、『冊府元龜』卷九十四封  
冊二、卷九十六繼襲一）。吐火羅葉護怛王  
のタイトルにテウルクのエフタル支配開始と  
みよいとすると、このころ共存関係はくず  
小たのであろう。

引用文献

榎 一雄

一九五一 エフタル民族の起源 和田博

士還暦記念東洋史論叢刊。

藤田 豊八

一九三一 智慧超往五天竺國傳箋釋。

船木 勝馬

一九五四 エフタルに關する中國史料につ

いて 史淵 六一號。

桑山

桑山 正進

一九八二 葱嶺山と阿路孫山 考古學論

考 小林行雄博士古稀記念論集

一九八三 インドへの道 玄奘とパラバ

カラミトラ 東方學報 京

都第五五冊。

一九八四 バリミヤーン私注 建築史學子

山第二號。

一九八五 バリミヤーン大佛成立にかかわ

るふたつの道 東方學報 京

都第五七冊。

松田壽男  
一九七〇  
『古代天山の歴史地理學的研究』

『増補版』

宮崎五十騎

一九三一  
『嚙達種族の發展』 『青丘學叢』

第二號、第四號

一九三五  
『嚙達種族の發展』 『青丘學叢』

第二一號

水谷真成

一九七一  
『大唐西域記』 平凡社。

重松俊章

一九一九  
『嚙達種族考』(一)(二) 『史學雜誌』

第二八卷第一號、第二號。

内田吟風

一九七二  
『吐火羅國史考』 『東方學會創立』

二十五周年記念東方學論集』。

曾武秀

一九六四  
『中國歷代尺度概述』 『歷史研究』

一九六四年第三期(北京)

1686

1687

KUWAYAMA, Sh. 1976: Khair Khana and its Chinese Evidence, Orient, Vol. 11.

LE STRANGE, G. 1905: The Lands of the Eastern Caliphate, Cambridge.

MARQUART, J. 1901: Eransahr, Berlin.

SPECHT, E. 1883: Etudes sur l'Asie centrale d'après les historiens chinois,

JA, 8e Série, tome 2.

YULE, H. 1873: Notes on Hwen Thsang's Account of the Principalities of Tokharistan, JRAS 1873.

# 插图



插图  
目次

1. タキシラ地圖
2. タキシラ第三期都市第三期プランとストウパ
3. 方形基壇（イフストウパ）平面・立面圖
4. ダルマラジカー大塔の増廣
5. アイハヌム平面圖
6. 柱礎 アイハヌム、ドウルマンテペ、チャカラクテペ
7. タキシラの神殿
8. アイハヌム 柱頭
9. 車輪狀構造の墓廟建築

10. タキシラ佛寺の變遷
11. タキシラ佛寺の基本セット（クナラ）
12. ジャウリアン平面圖（最終段階）
13. ガンダラ 都市と佛迹
14. ジャマールガリ平面圖
15. タフテバイー平面圖
16. タレリ塔院（D區）
17. メハサング塔院
18. シャージキテリー平面圖

19 ブトカラ平面図

20 インド・中央アジア要図

21 ニ商主奉勢密圖（ベジャール博物館）

22 カラコルム・ヒンドウクシユ交通路圖

23 四天王奉鉢圖（ラーホール博物館）

24 佛鉢供養圖

25 四一五世紀佛僧往來ルート

26 玄奘によるウツデイヤーナの聖迹

27 ジアラールハーバード遺迹分布圖

28 宋雲・慧生ルート

29 『西域圖記』南道の葱嶺以西路・ジナグプタ、ダルマグ  
プタ經路

30 玄奘往還路

31 ガンダーラ、カシュミール、シアルクトの位置

32 サルサーン、エフタル、サマルカンドの朝貢

33 迦畢試とその周邊

34 『大唐西域記』に記されたカーブル河流域

35 圓形後堡の建築

36 37 38 39 40 41 42 43 44

テヘッサカンダル平面圖

シヨトラク平面圖

コフナマズジツド平面圖

スルフコタル、ディルバルジン平面圖

印紋

ドウルマン・チャカラクの土器

ヒンドウ・クシユ北麓の土器遷移(表)

ヒンドウ・クシユ南麓の圓圈印紋

玄奘の就學狀況(表)

45 46 47 48 49 50 51 52 53

ハイルハーナ平面・斷面圖

大理石像 (1)

大理石像 (2)

大理石像 (3)

大理石像 (4)

ウマー・マヘーシユ・グアラ並坐像

大理石像細部表現

冠中の表現

冠中の表現と衣紋

59 58 57 56 55 54

涅槃像の位置  
タパッサルダールの塑像  
男神並坐像  
バーミヤーン東大佛  
バーミヤーン西大佛  
バーミヤーン溪谷



ジャムナディアル

モフラー・モフラー

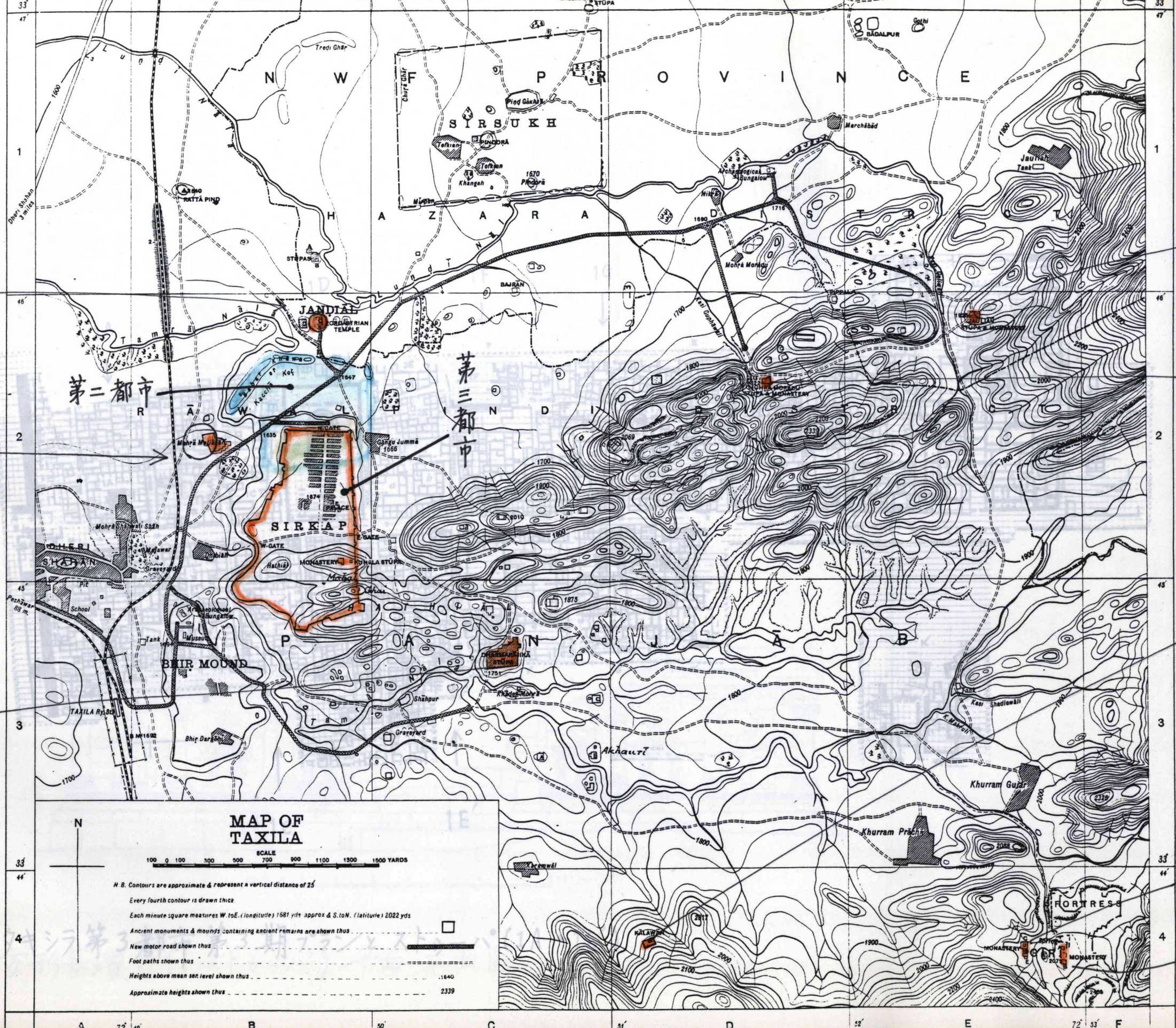
タムラ・タムラ

ジャムナディアル

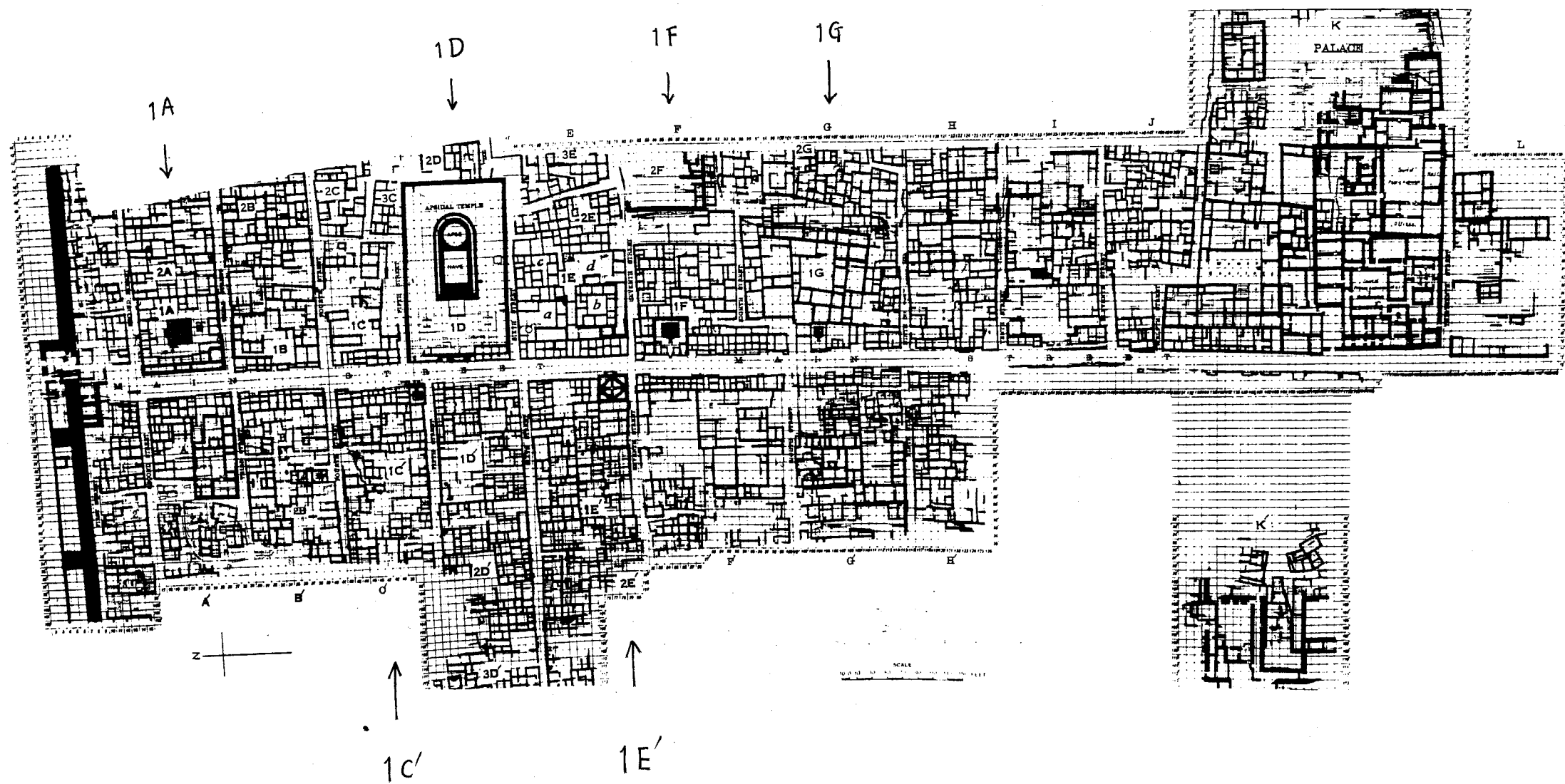
モフラー・モフラー

タムラ・タムラ

タムラ・タムラ

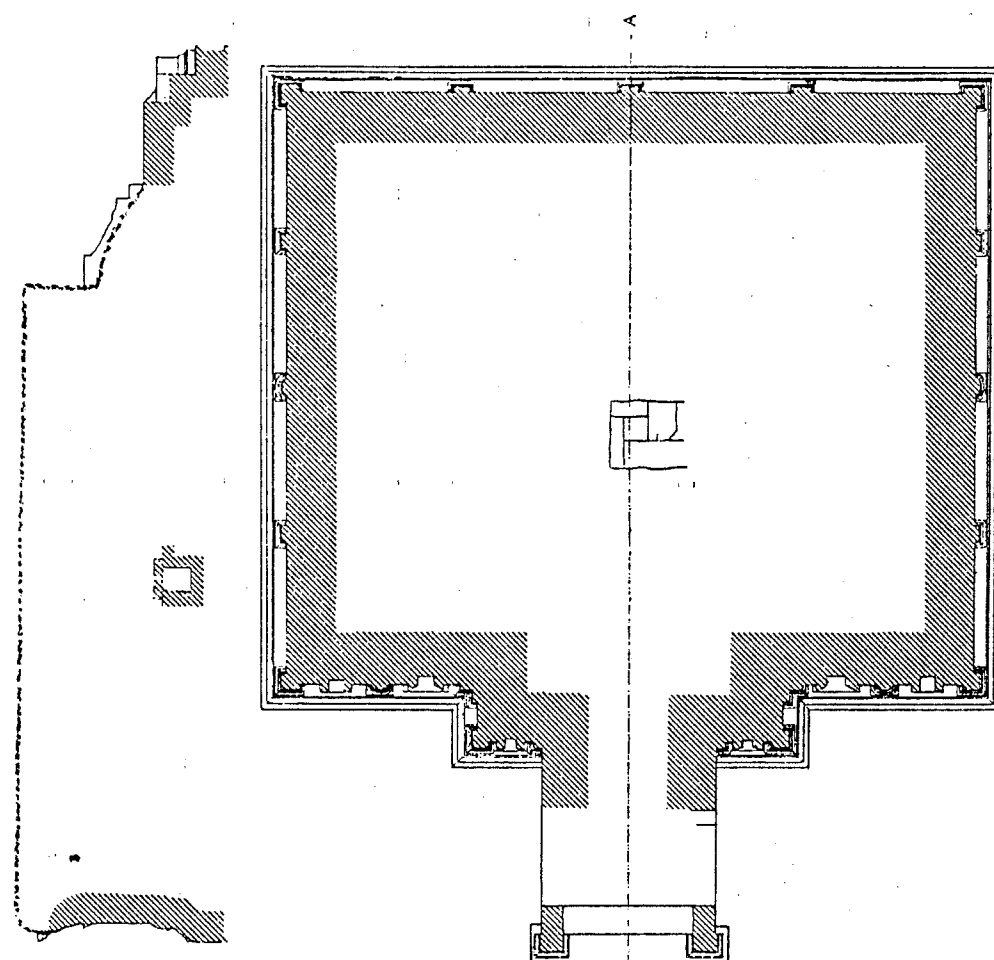






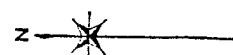
2 タキシ第3都市第3期プランとストーリーパ(1A→1E')

SECTION ON A. B.

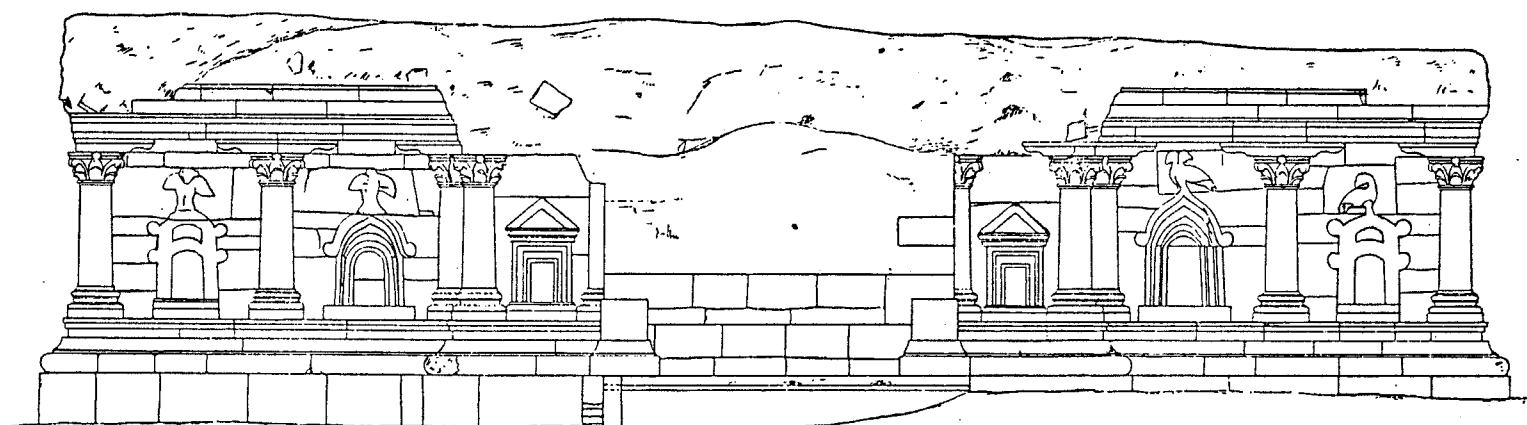
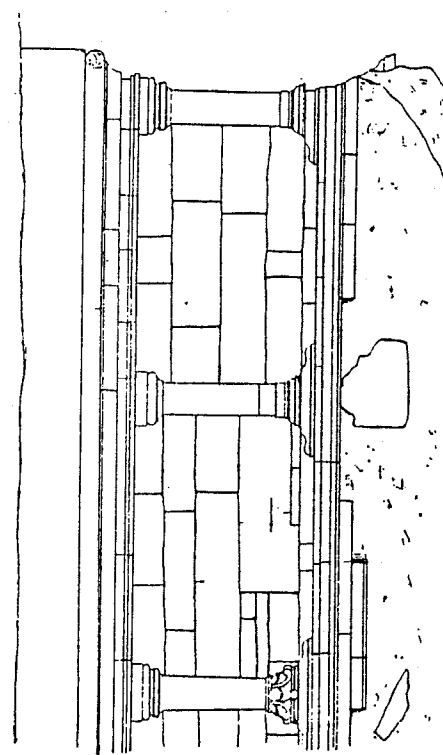


IN. 12 6 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 FT

PLAN



IN. 12 6 0 1 2 3 4 5 FT



IN. 12 6 0 1 2 3 4 5 6 7 FT

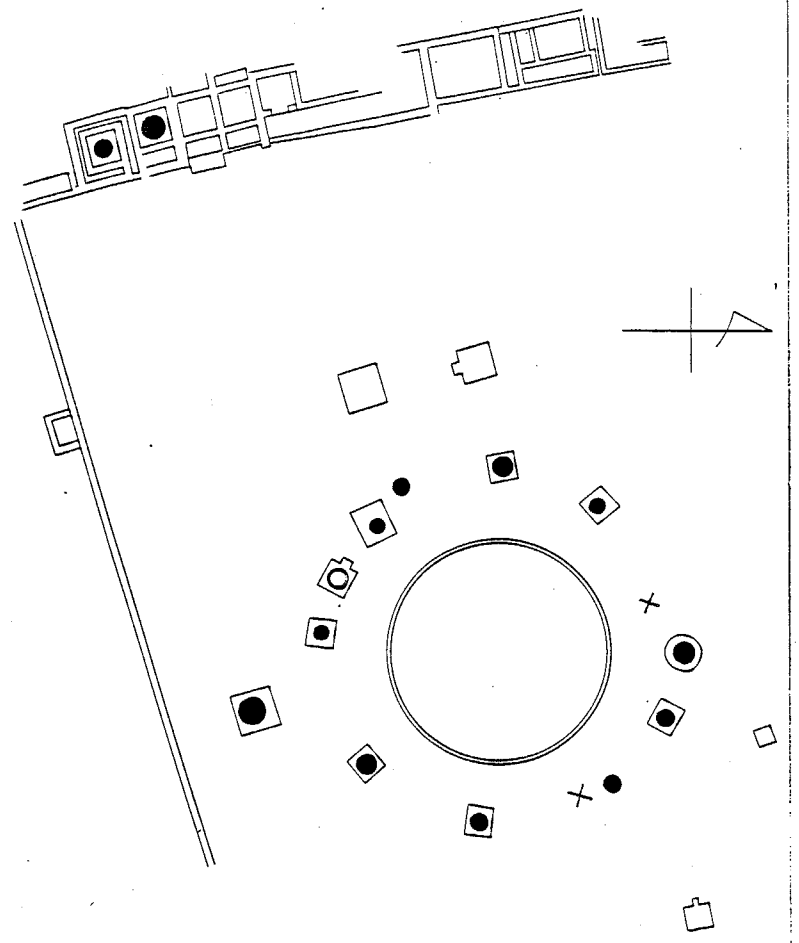
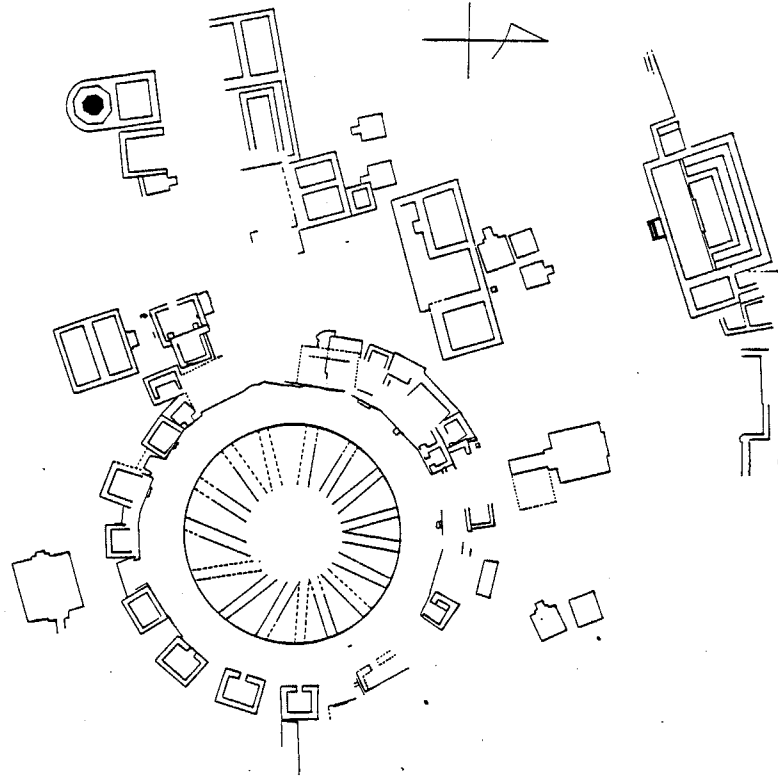
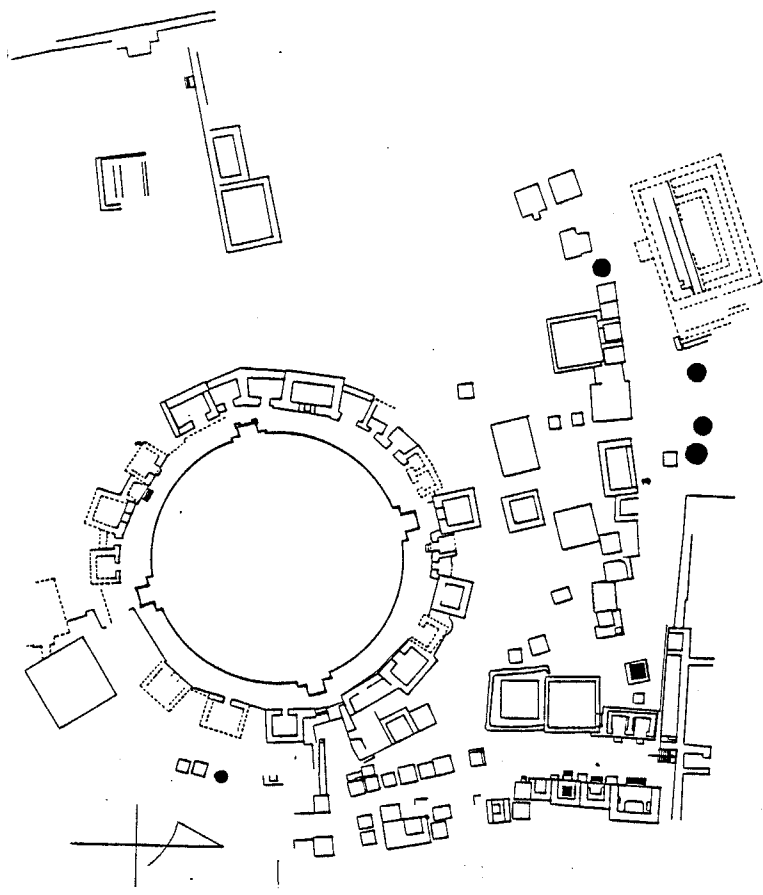
3 方形基壇(1Fストウパ) 平面・立面圖



第五、六期

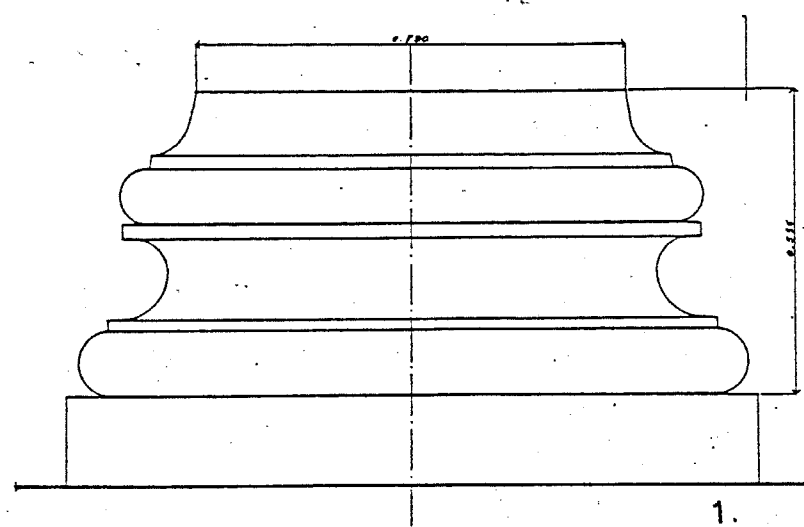
第二期

第一期

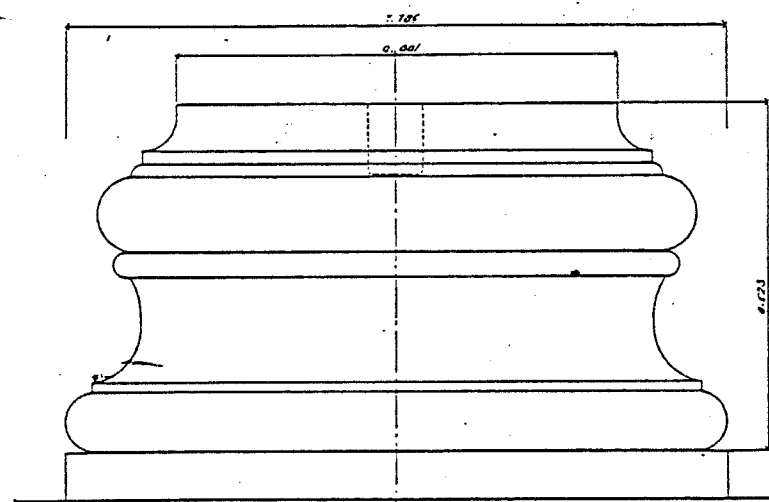


# 4 ダルマラジカー大塔の増廣

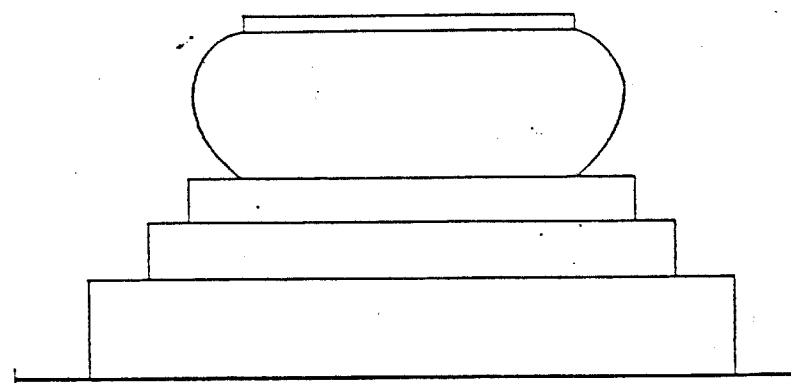




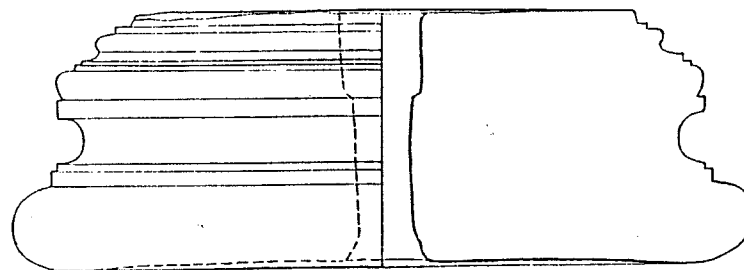
1.



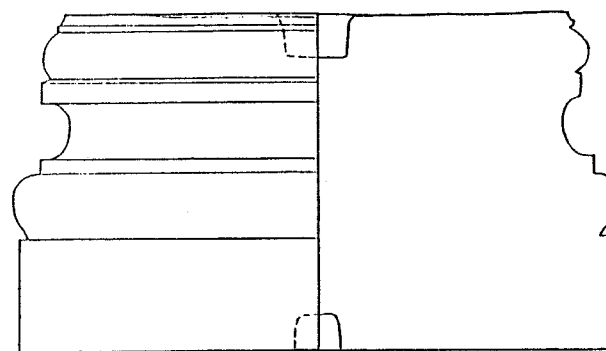
2



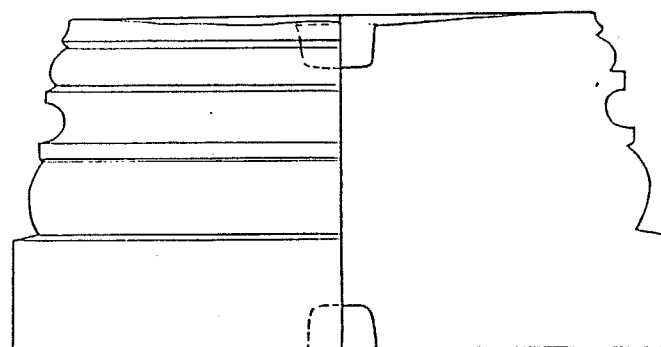
3



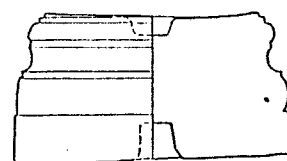
No. 1



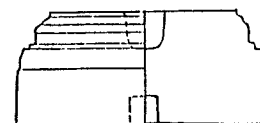
No. 2



No. 3



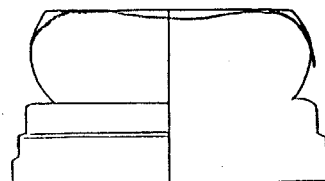
No. 5



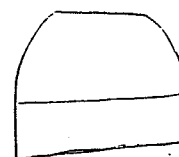
No. 4



No. 8

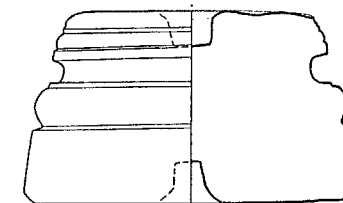


No. 6

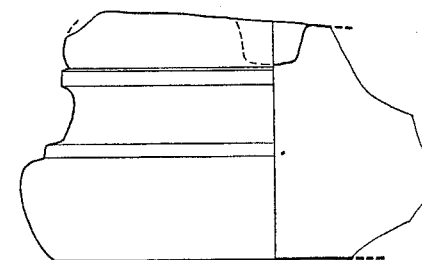


No. 7

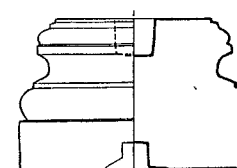
0 50 cm



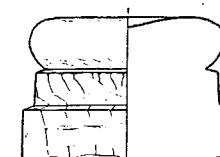
(1)



(2)



(3)



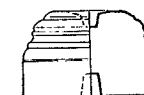
(4)



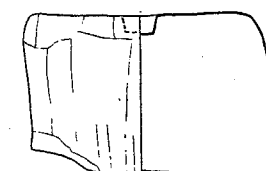
(5)



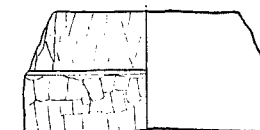
(6)



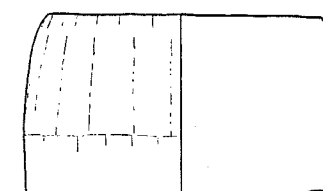
(7)



(8)

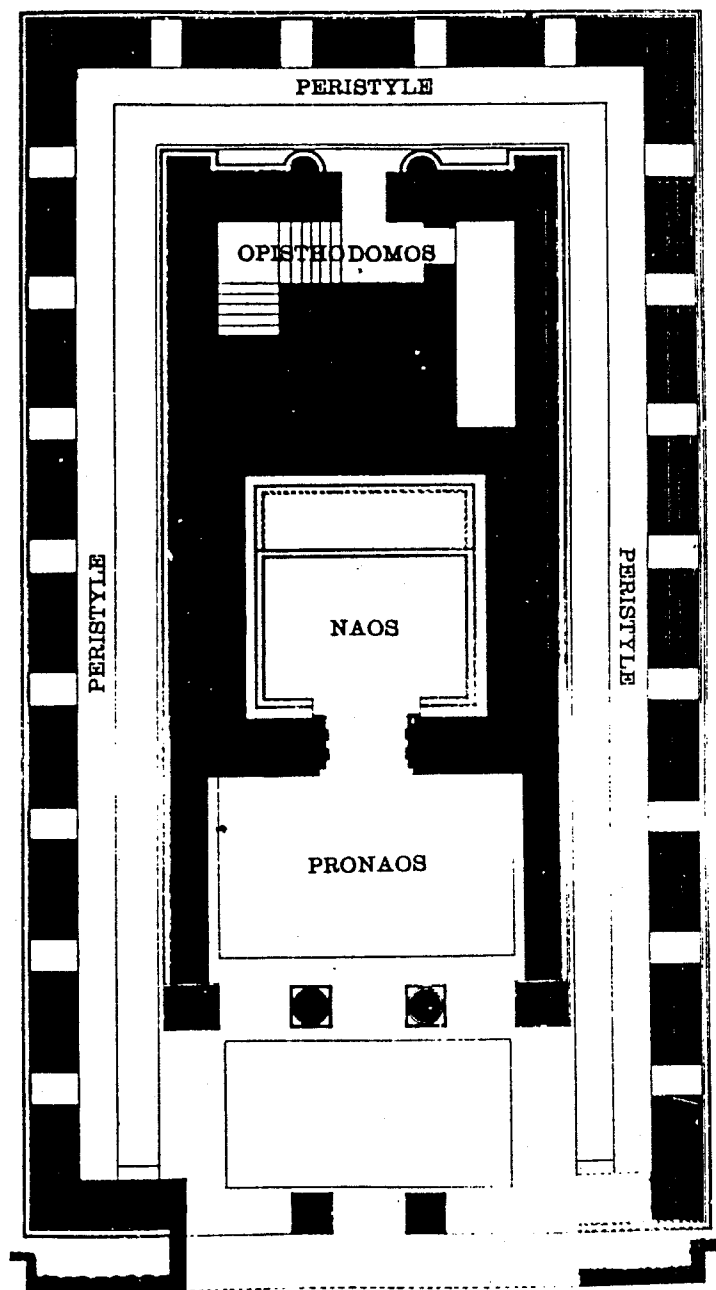


(9)

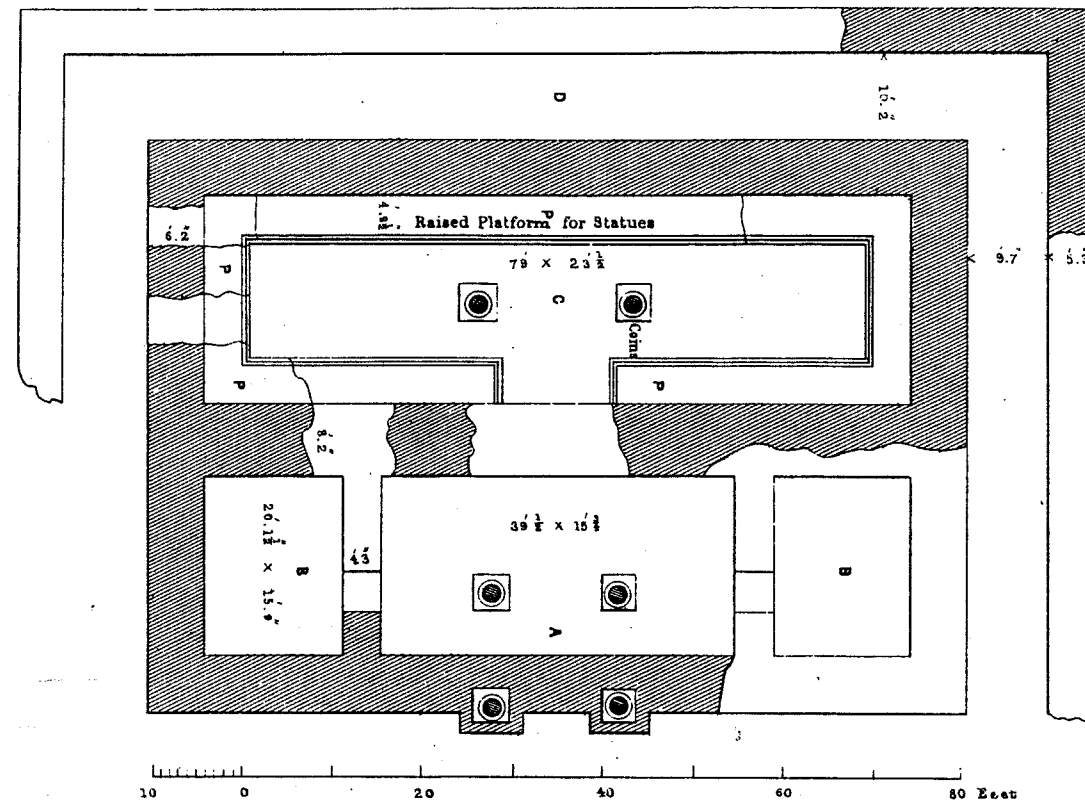


(10)

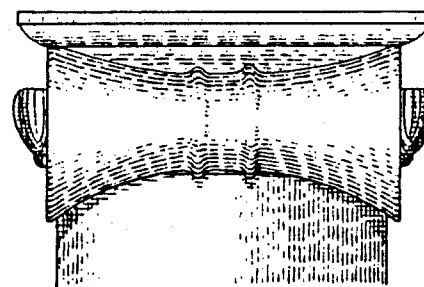
6 柱礎 1-3 ア-イ=ハ-ヌム, No.1-No.8 ドゥルマン=テハ°, (1)-(10) チャカラフ=テハ°



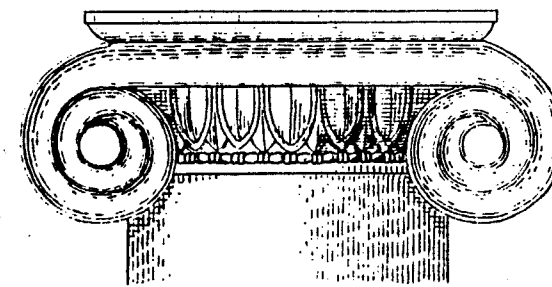
(1) ジャンディアル



(2) モフラー・マリアラン

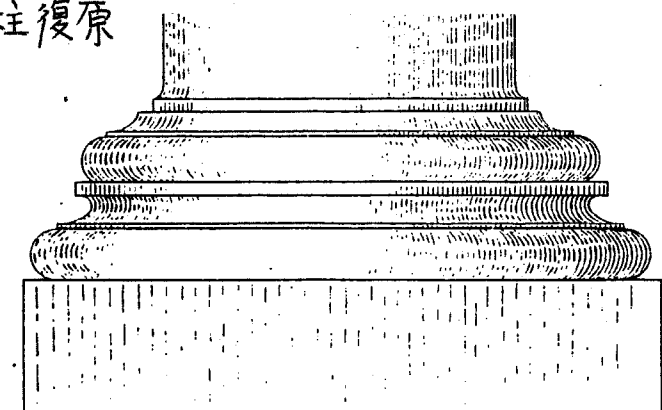


a

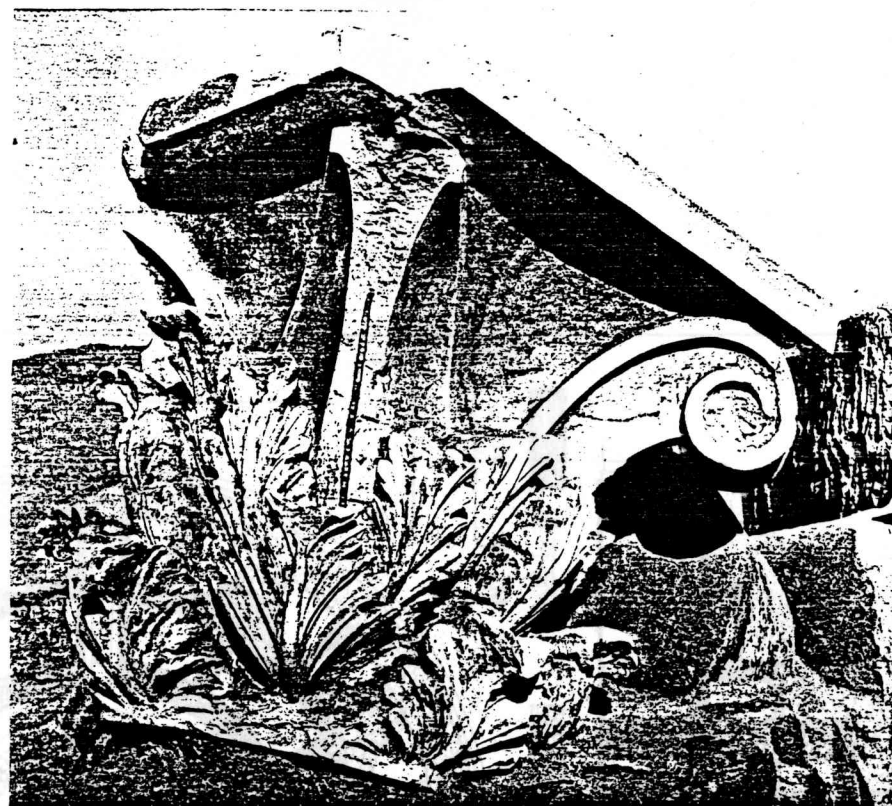
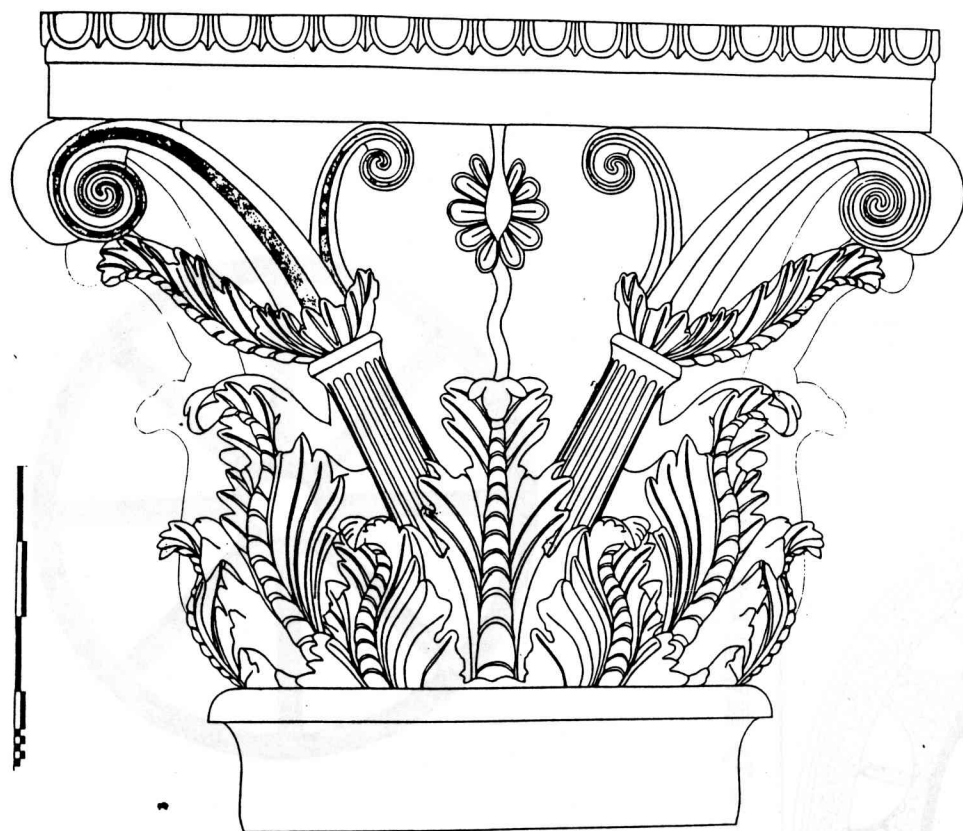


b

(3) ジャンディアル柱復原



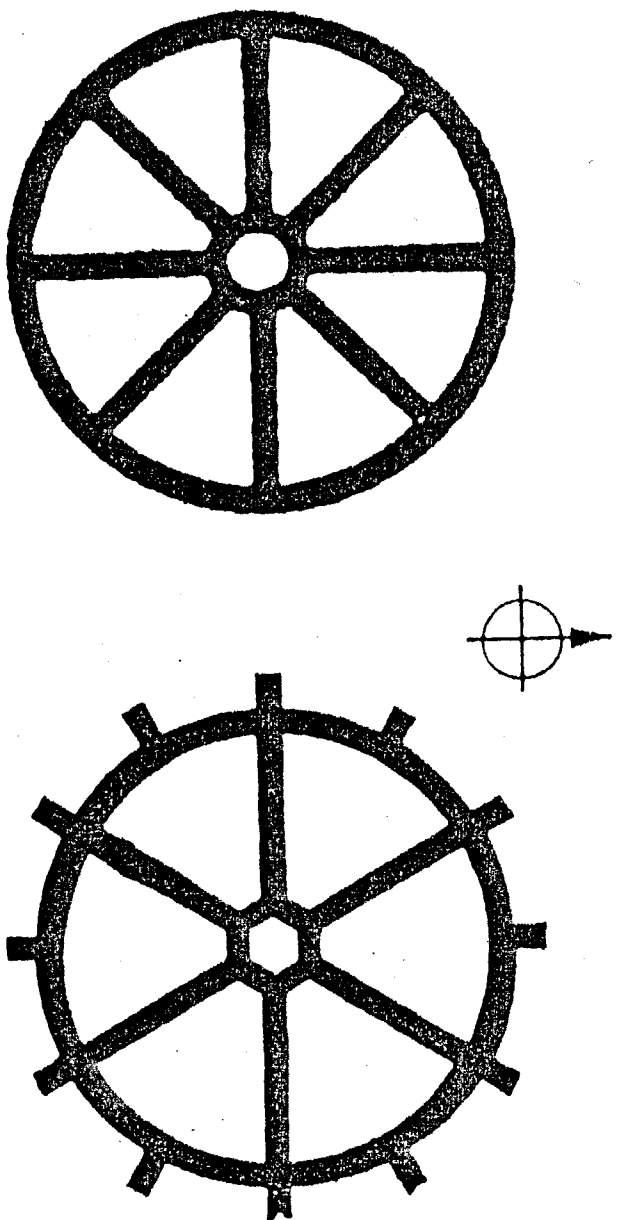
Scale  
In. 12 0 1 2 Ft



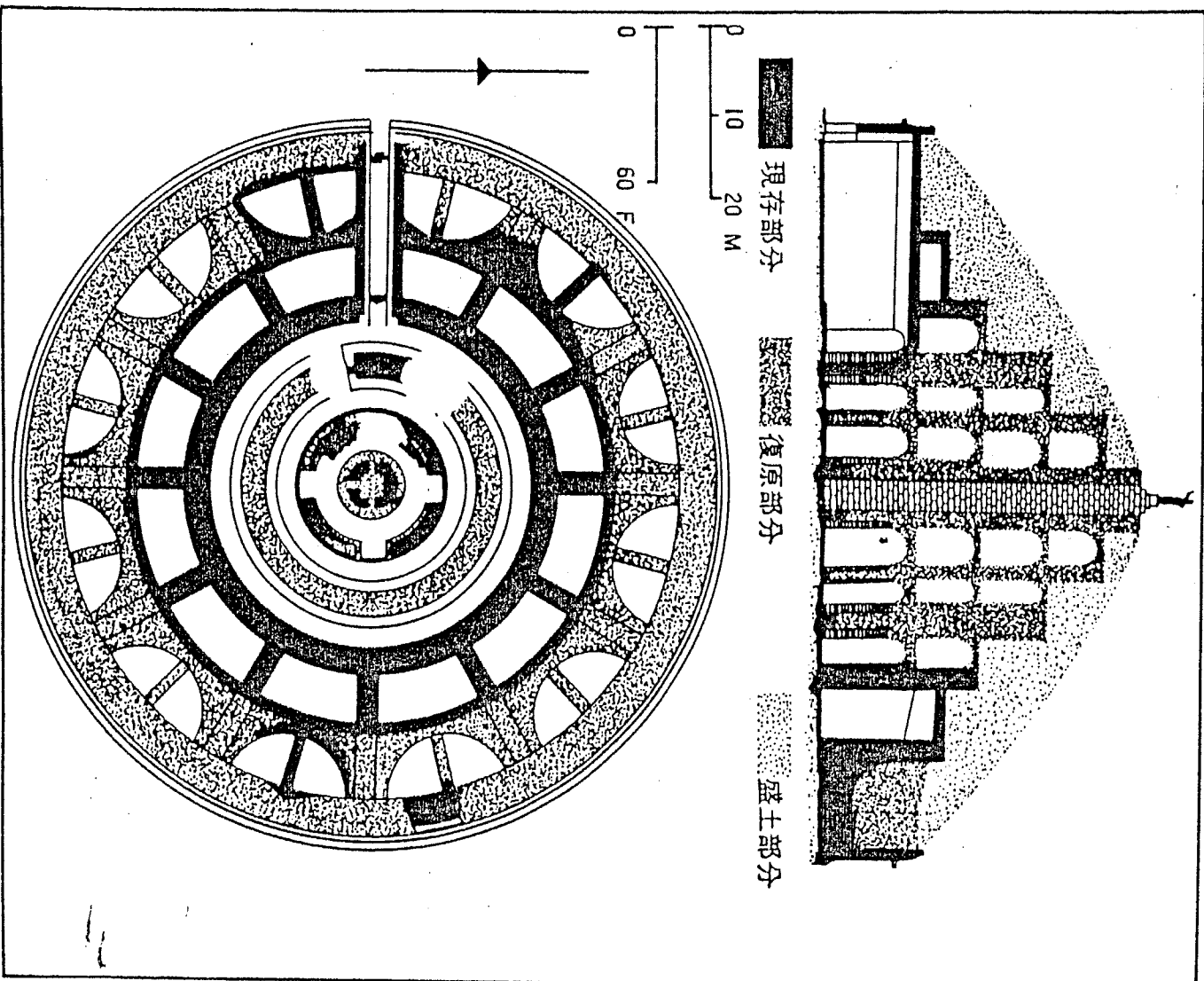
8 アイ=ハ-74 柱頭

# 9 車輪状構造の墓廟建築

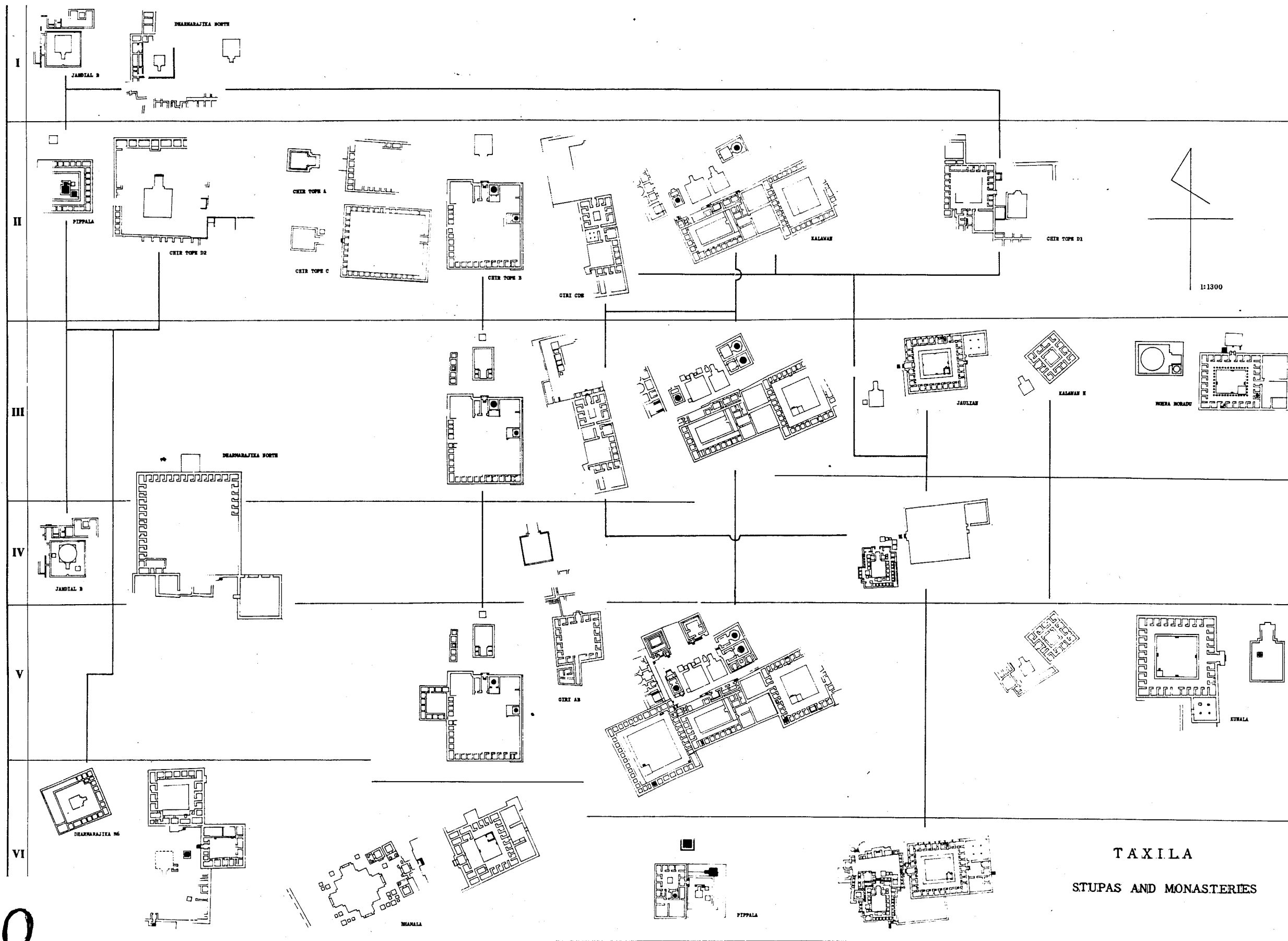
車輪状構造の墳墓, 左) ローマ, 右) プリタニア

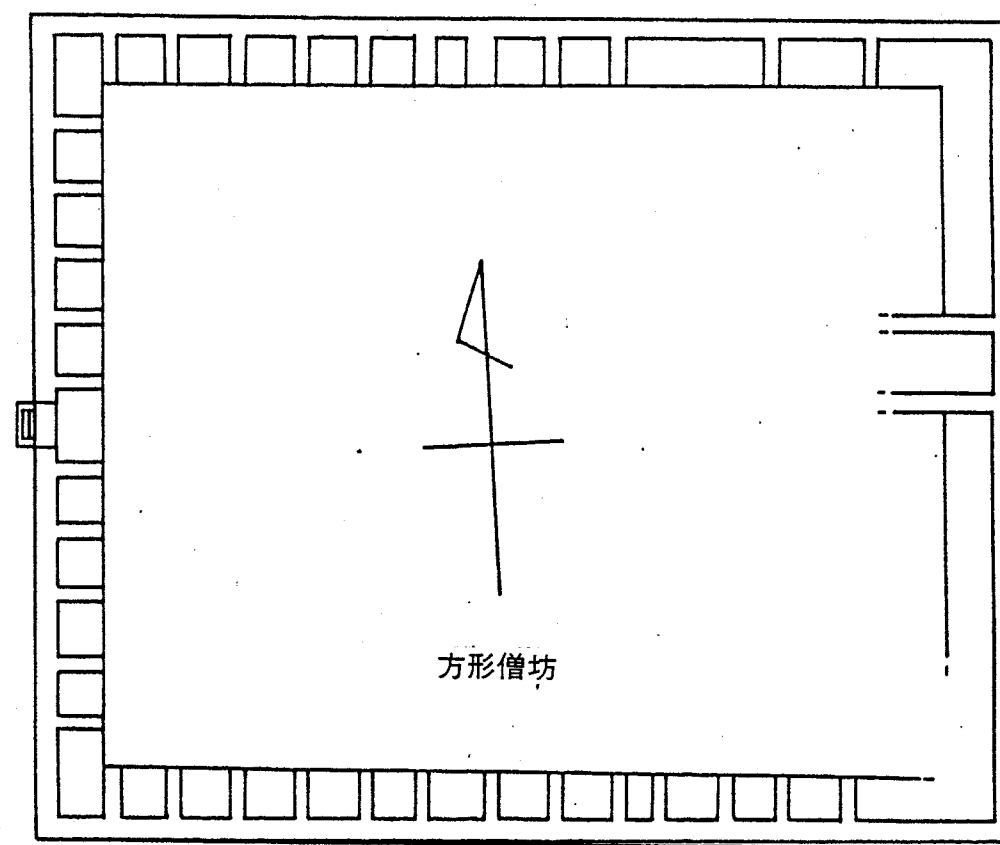
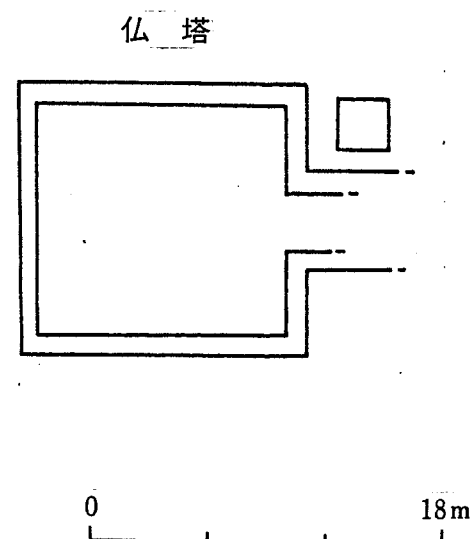


皇帝廟 (『ローマ美術』新潮社、1974、493) 図による  
プリタニア

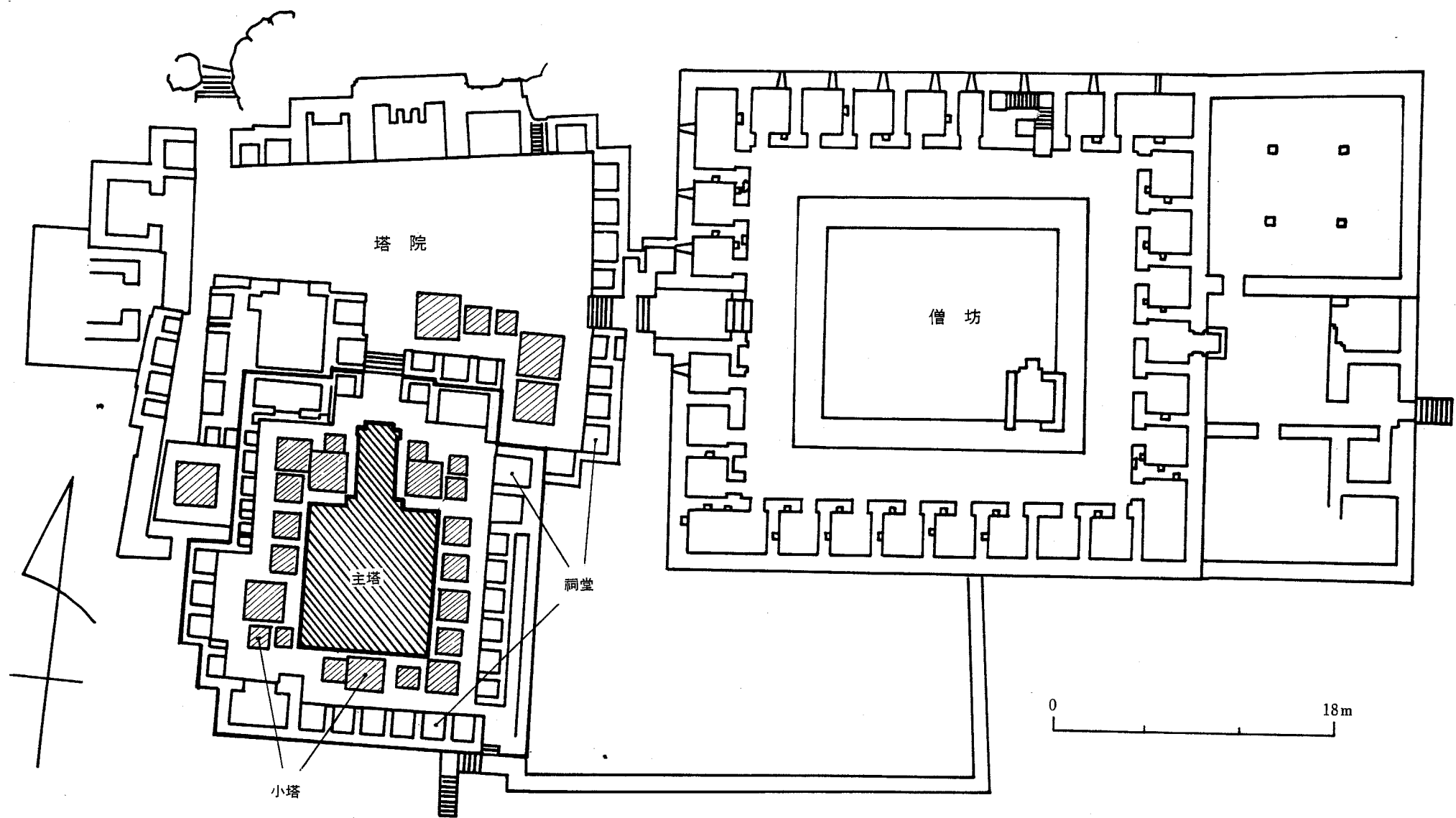


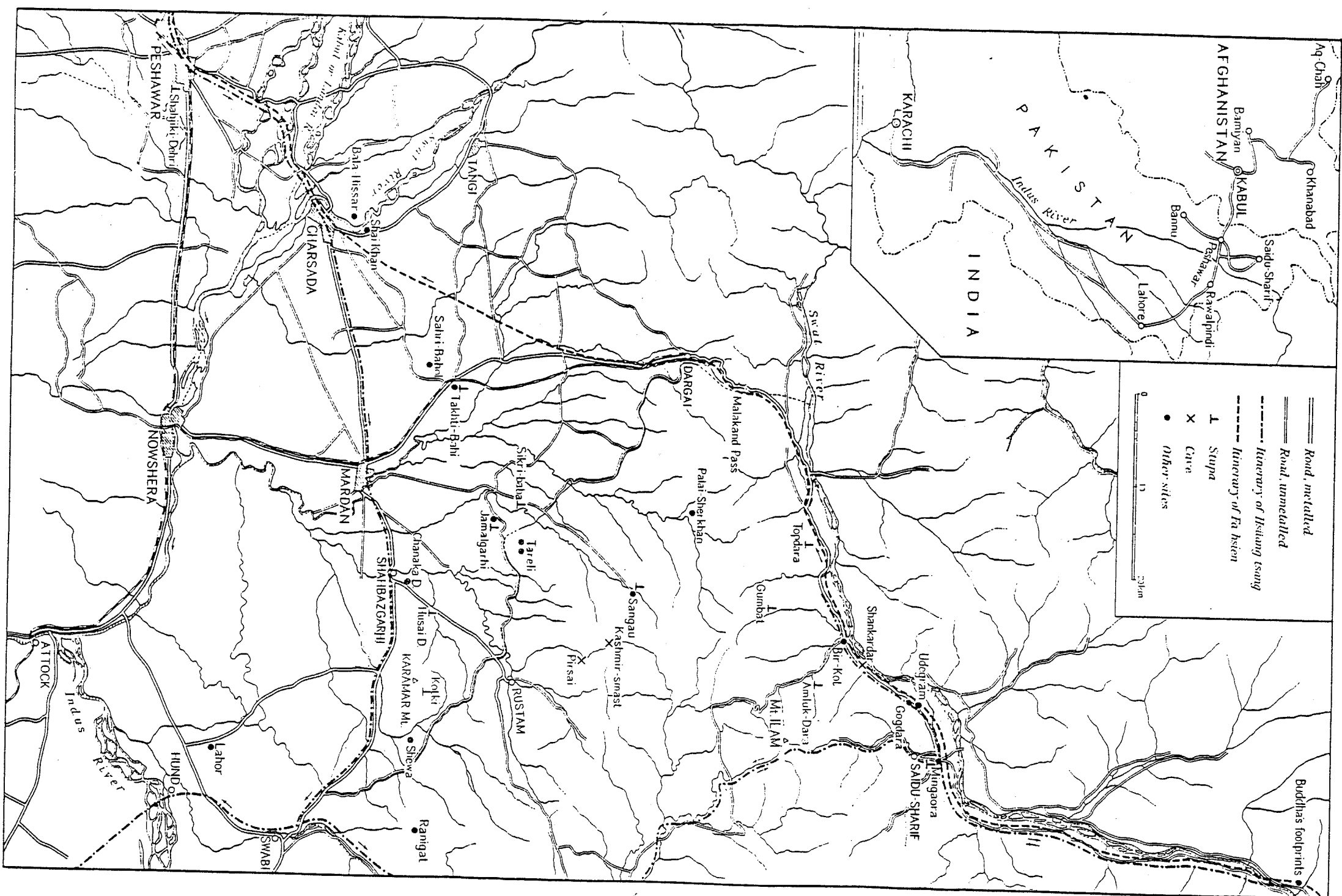


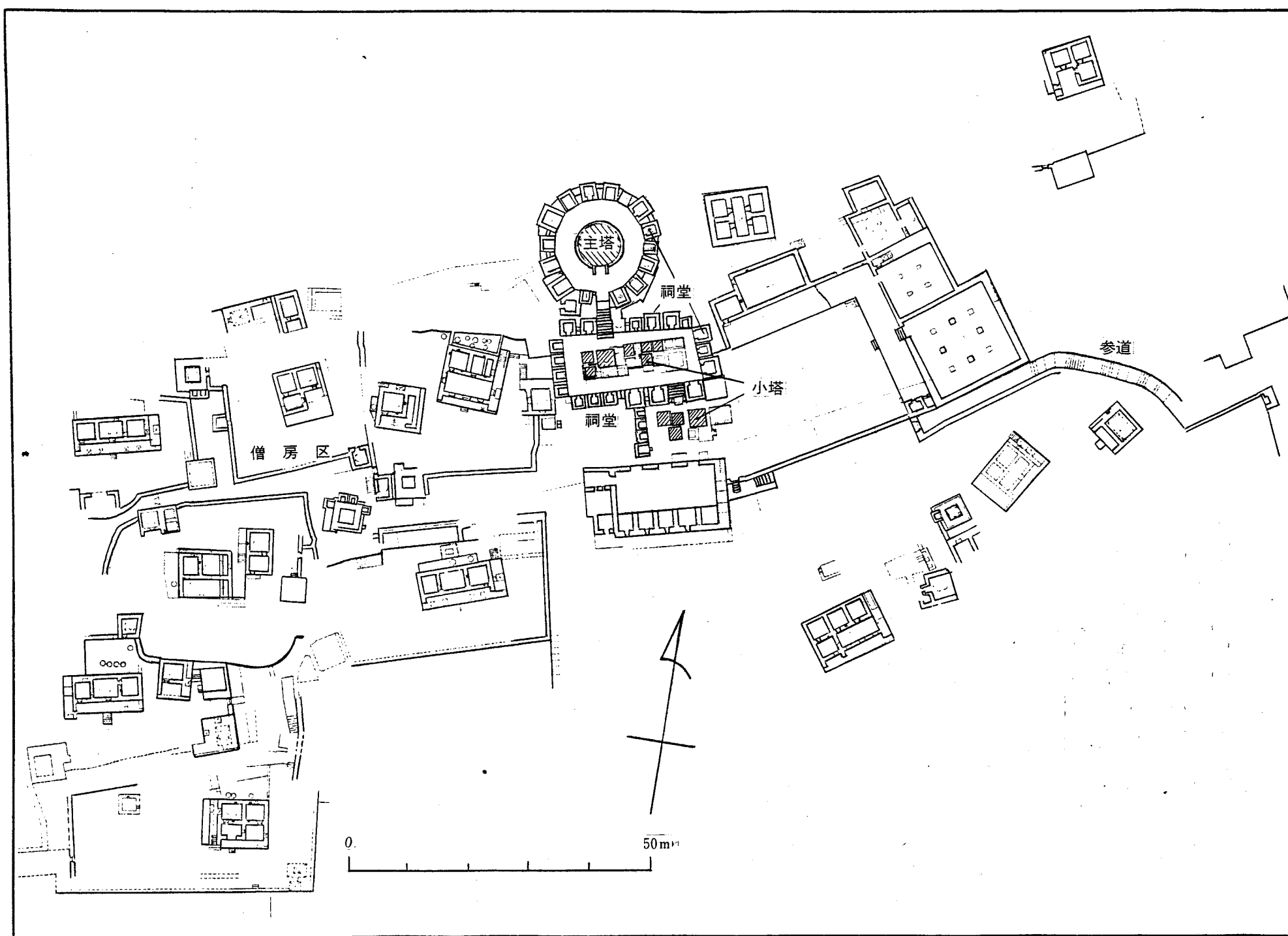




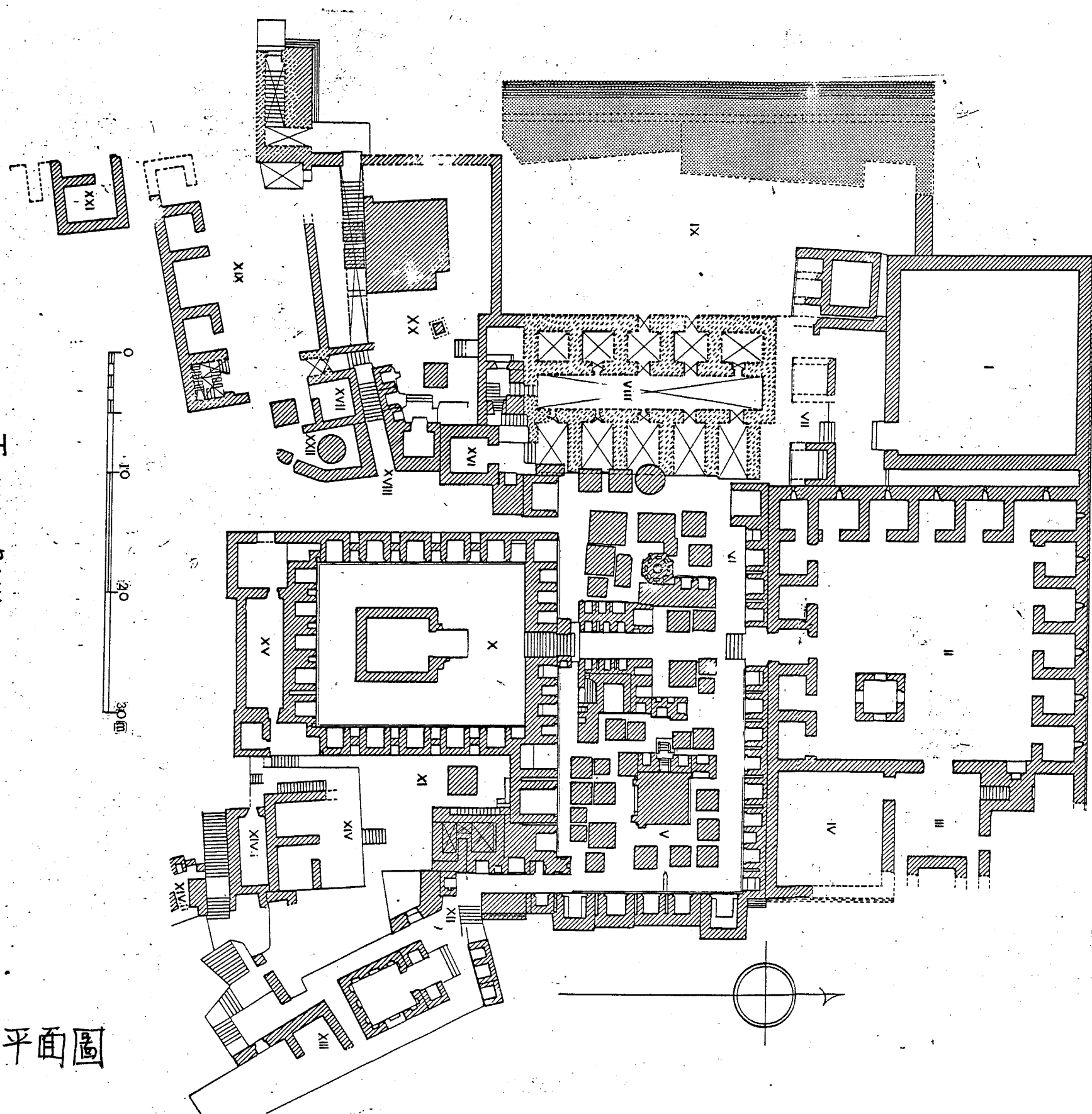




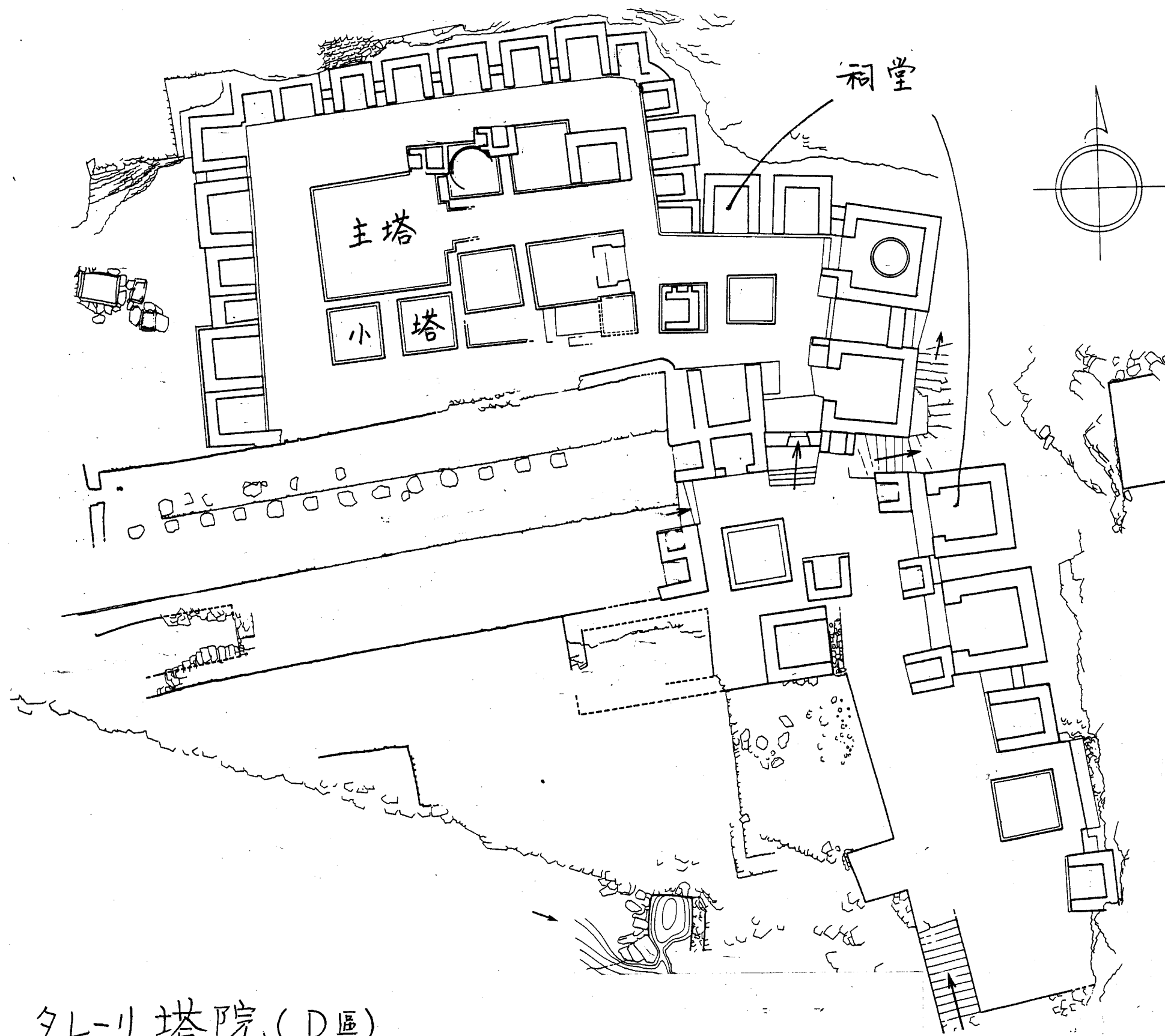




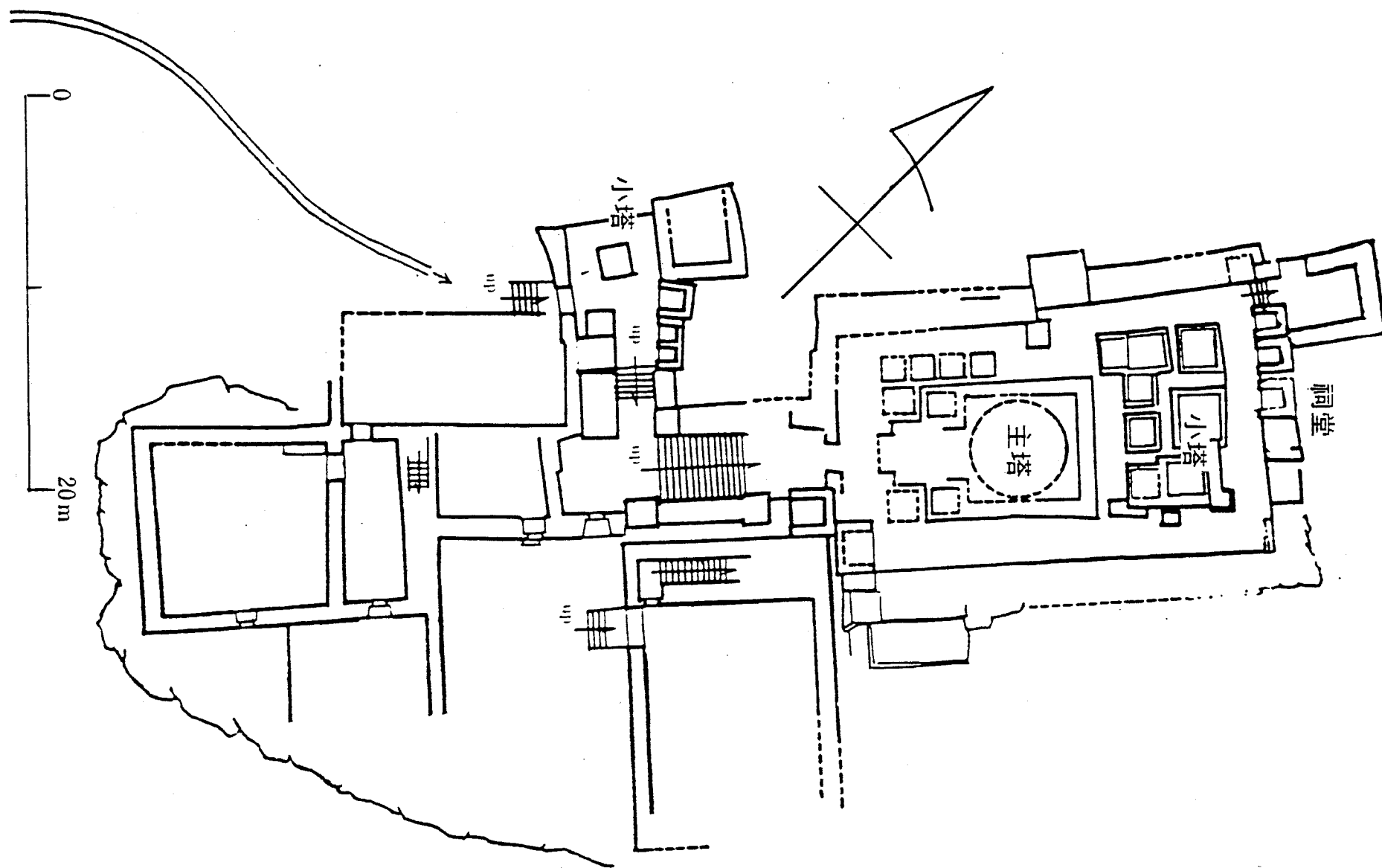
14 ジャマル＝ガリ平面図



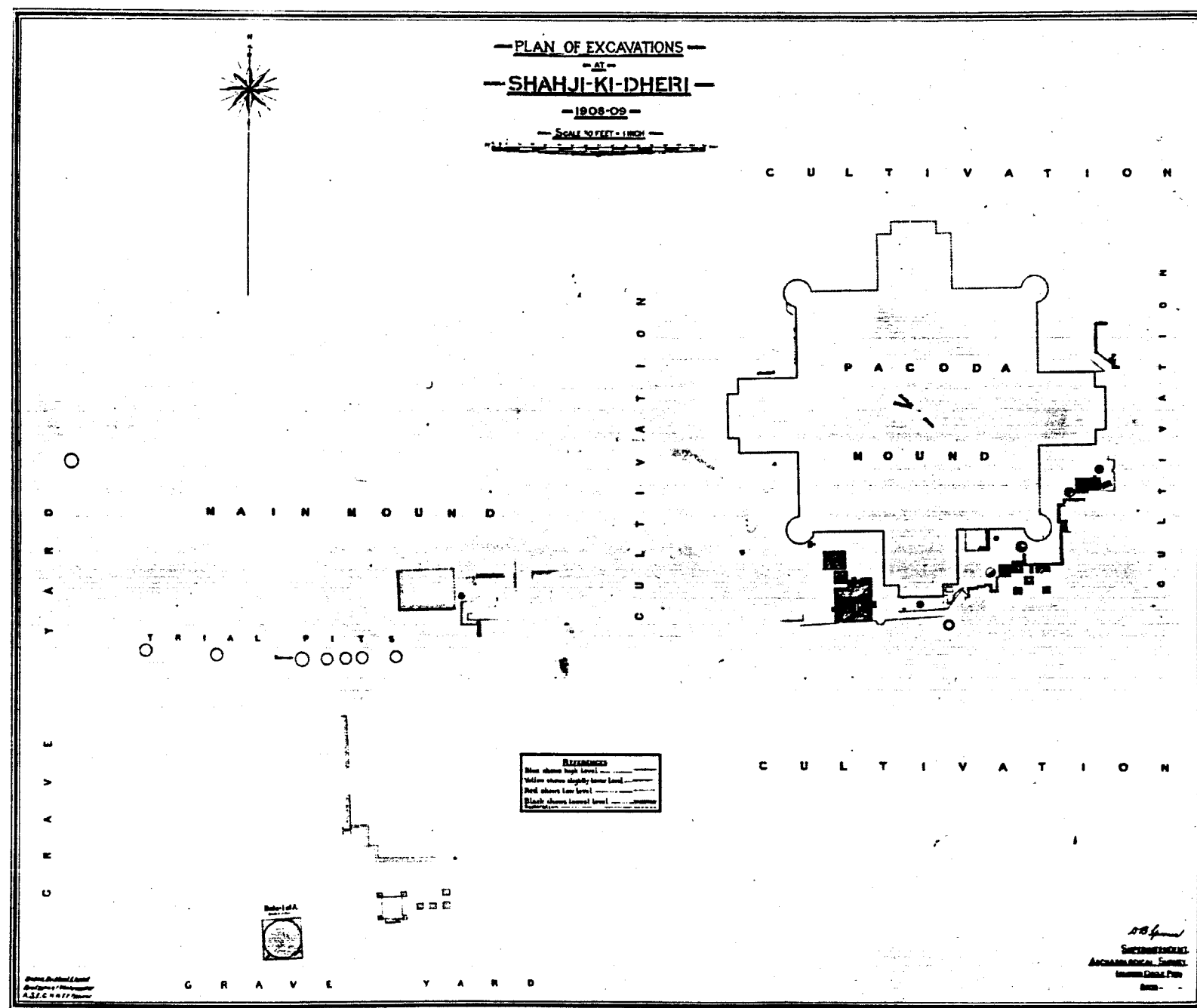
TAKHT-I-BAHI



16 タレリ塔院(D区)

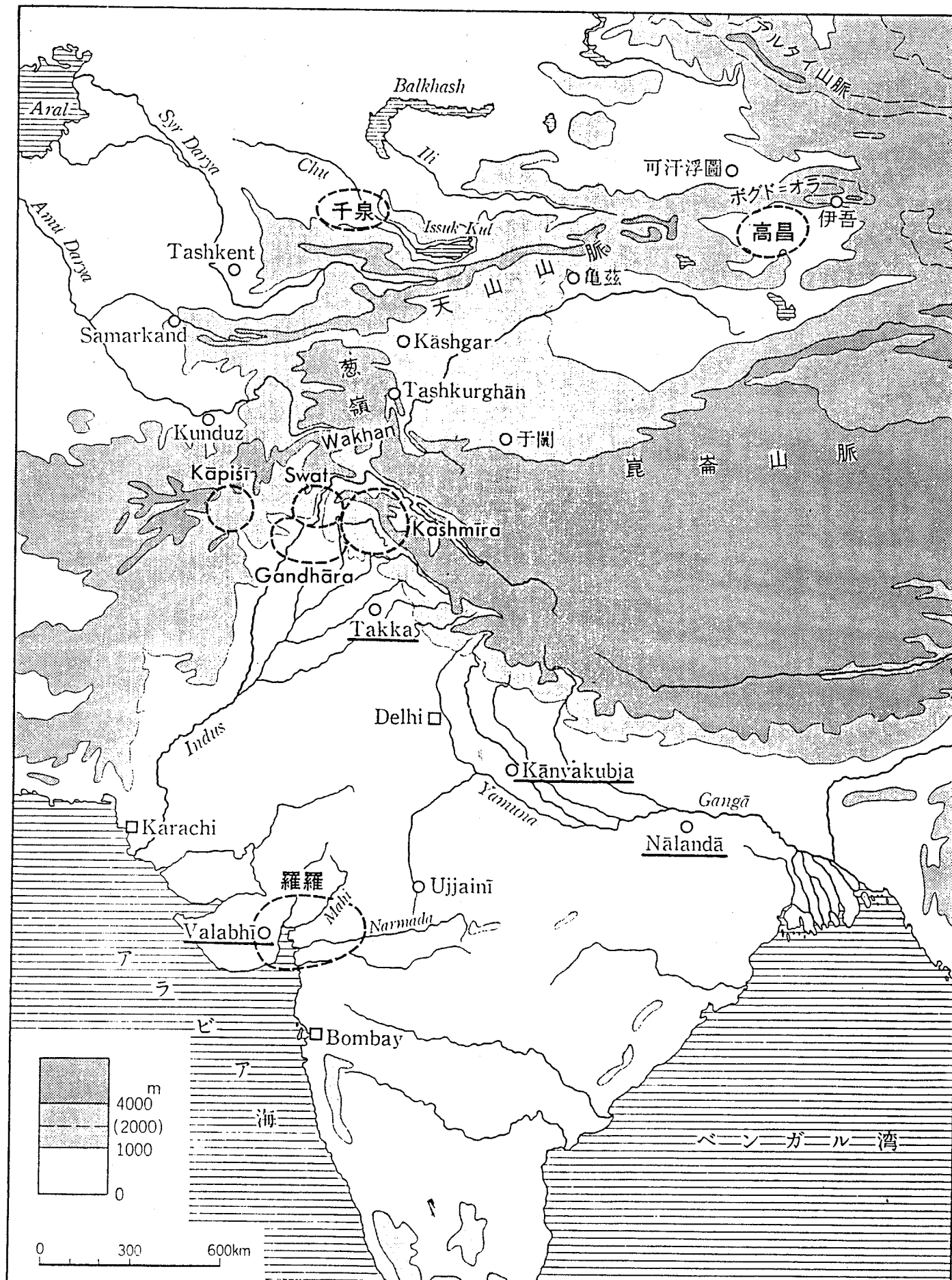


17 メハ=サンダ塔院







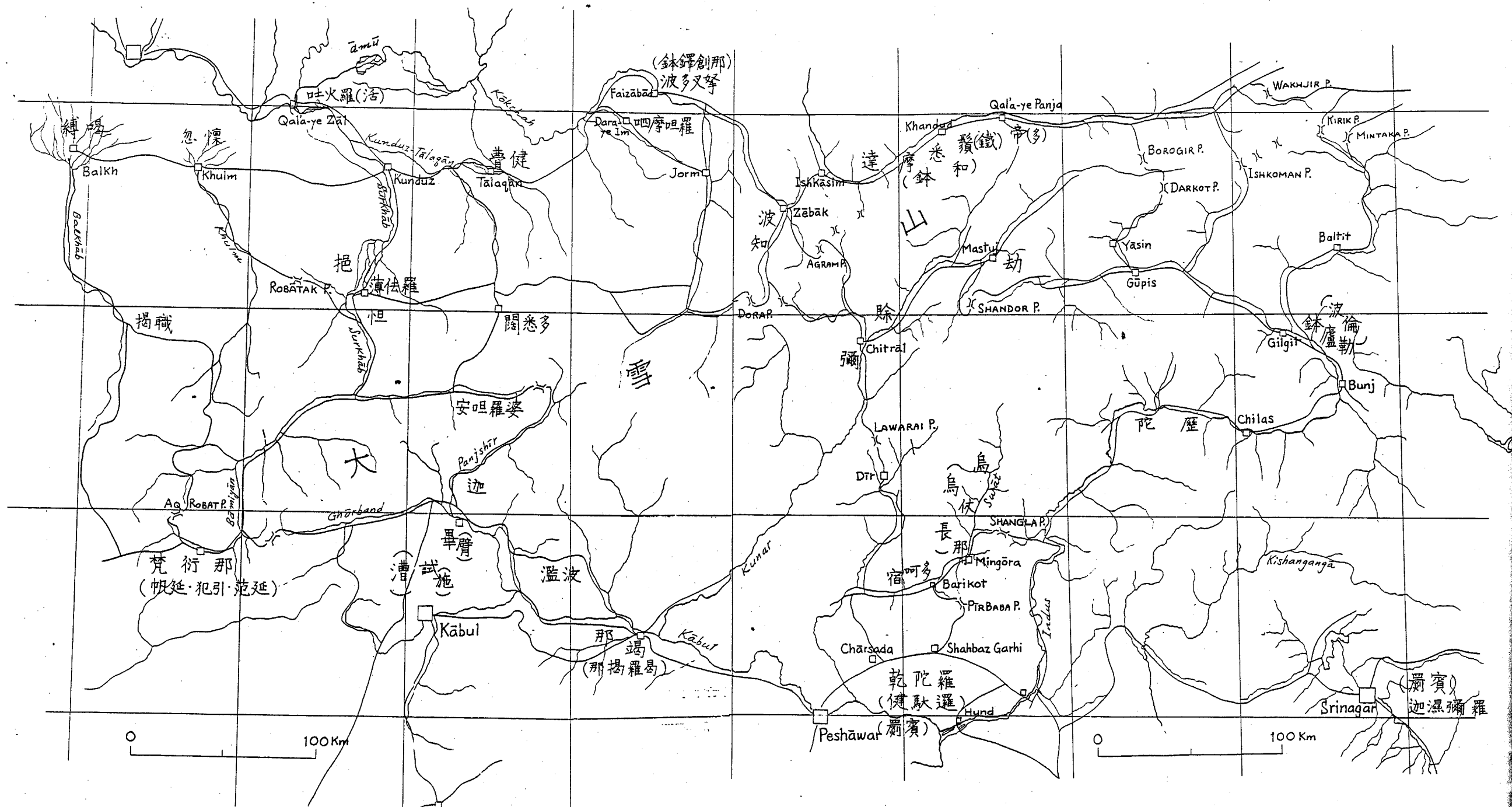


インド・中央アジア要圖



21 二商主奉妙蜜圖 (パシャーワル博物館)

カラコルム-ヒンドク-クシュ交通路圖





23

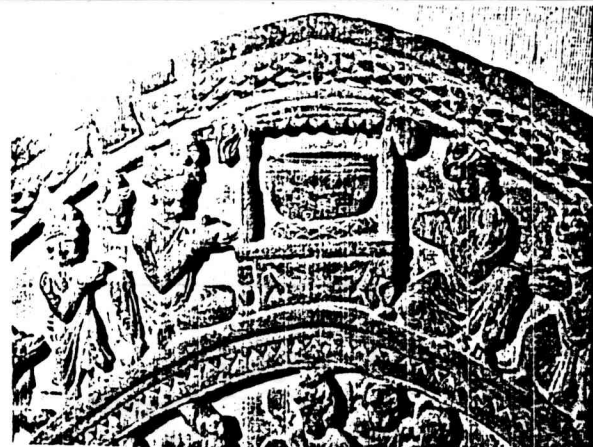
四天王奉鉢圖  
(テホール博物館)



24

佛鉢





1



2



3



4



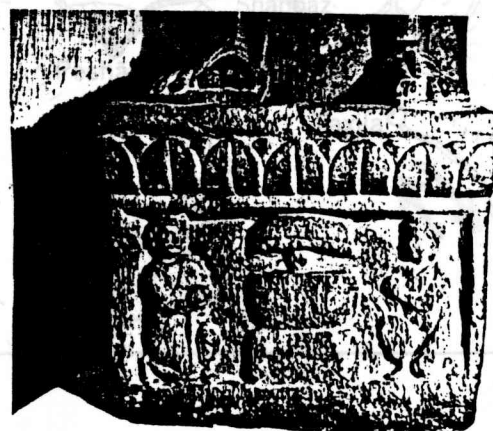
5



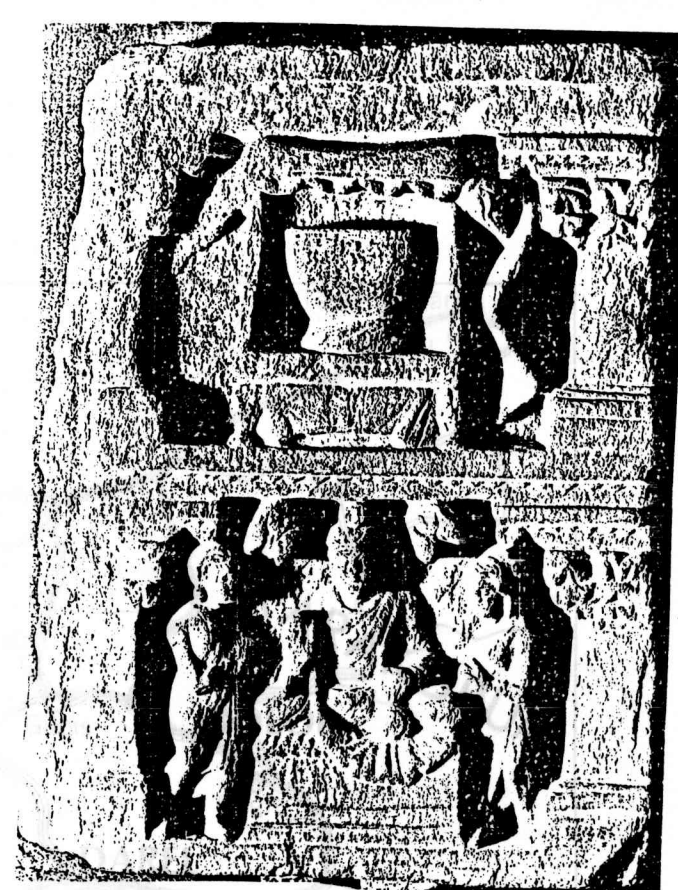
6



7



8



9

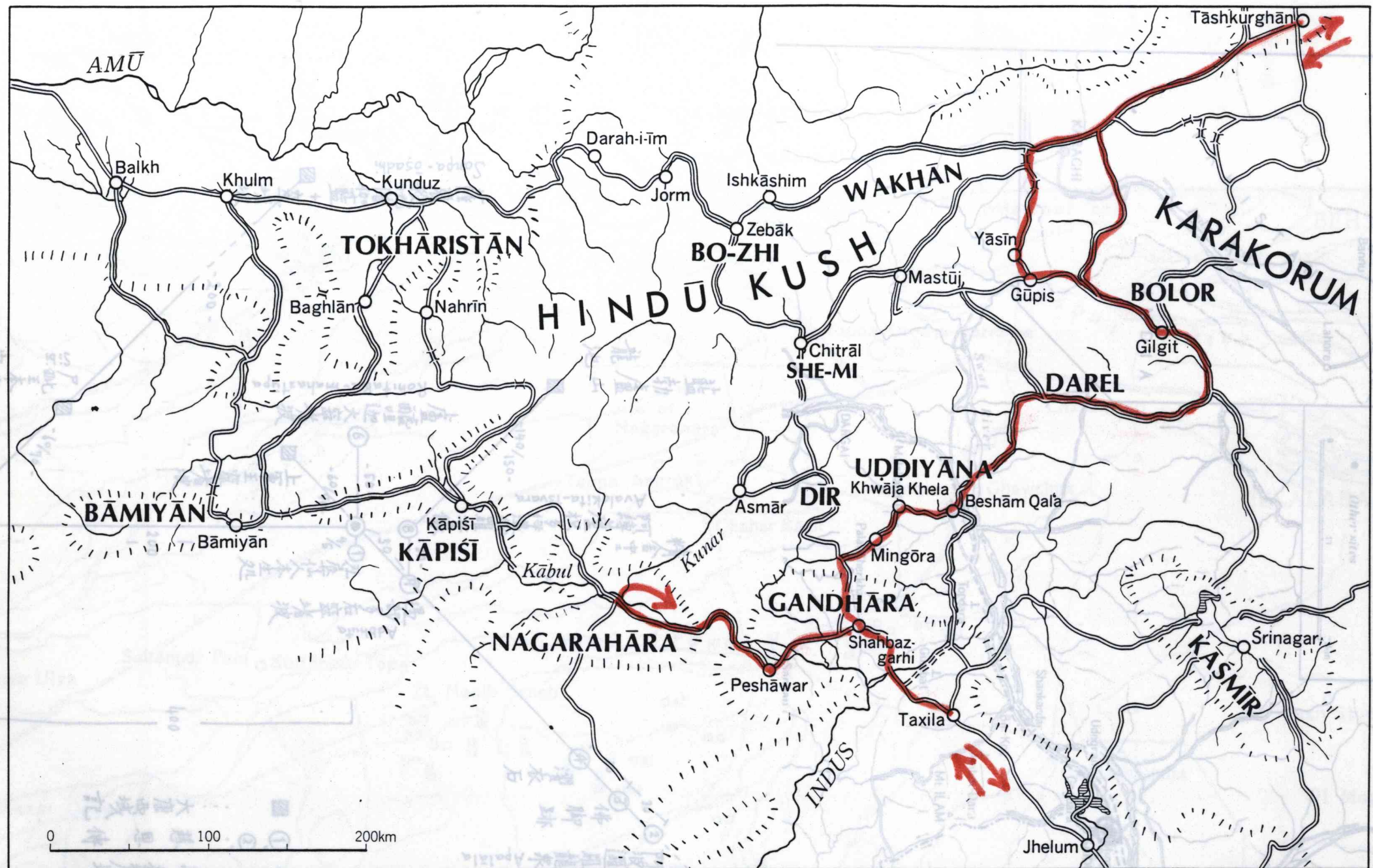


10

## 24 佛鉢供養圖

1、3、6-9、ラホ-ル博物館, 2、4、5 ペシャ-ワル博物館, 10 カラチ國立博物館





25

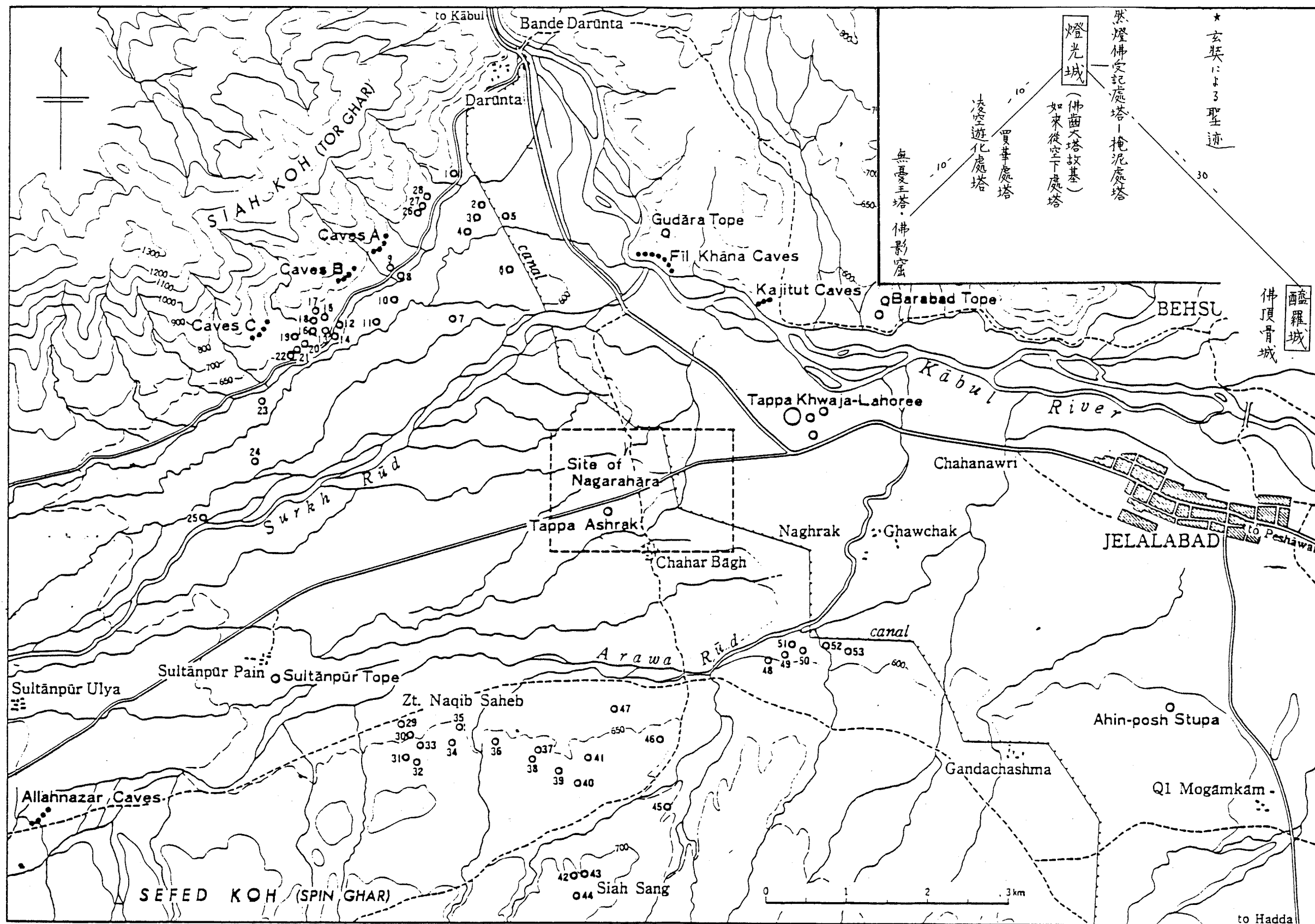
4-5世紀佛僧往來ルート

26

玄奘によるウッディヤーナの聖迹





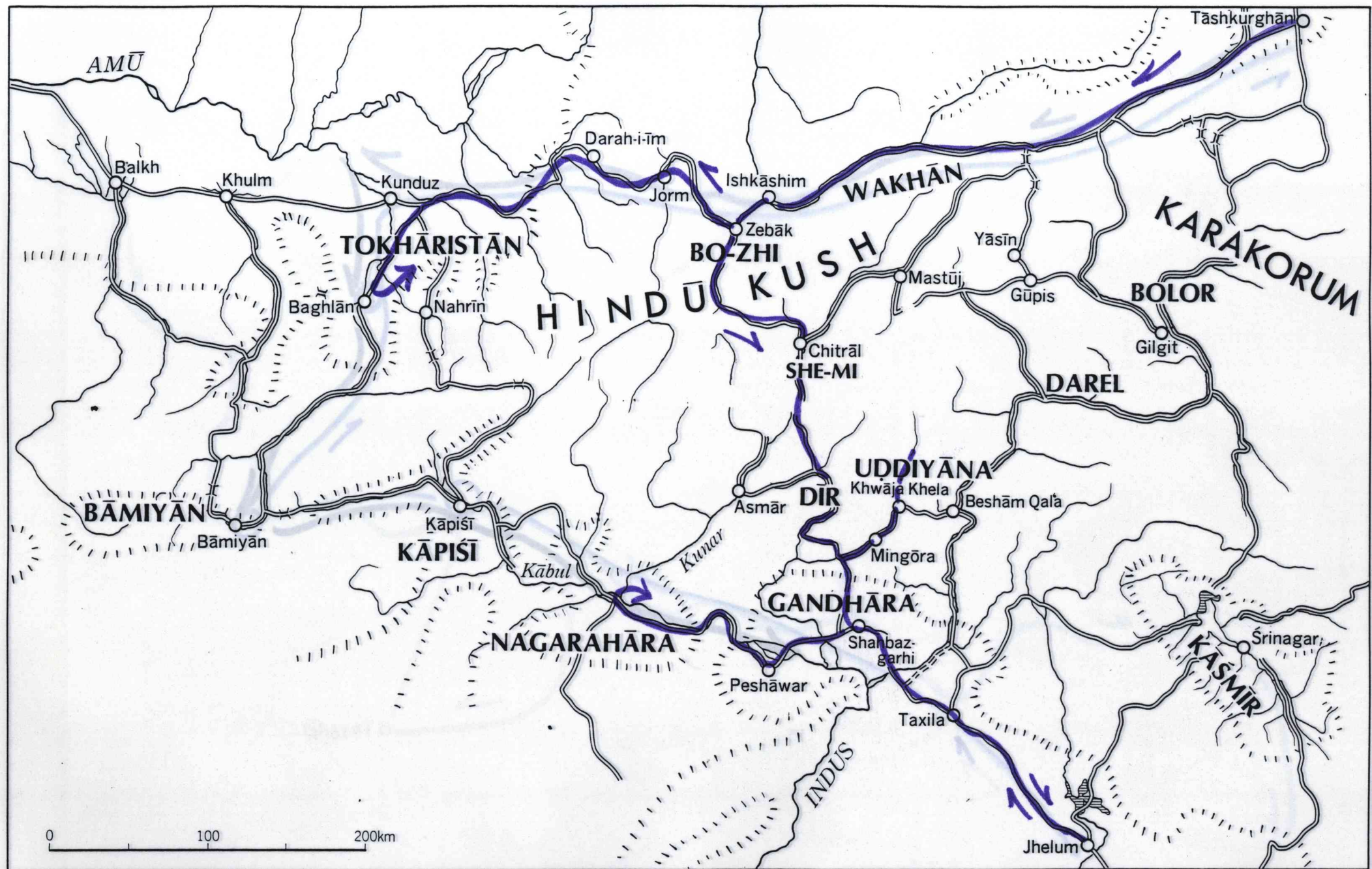


ジャラーラーバード遺跡分布図

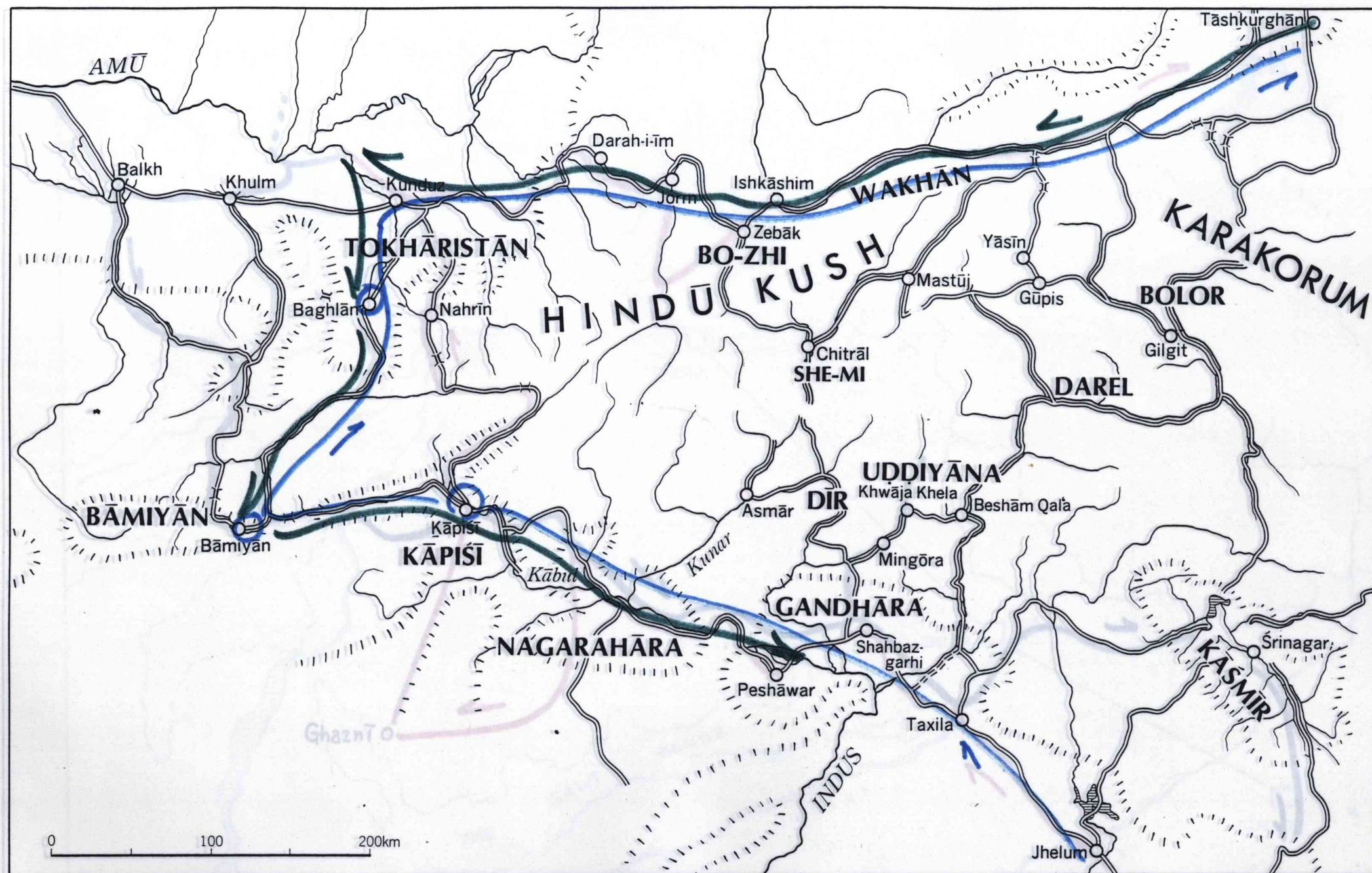
Archaeological Map of Jalalabad

○ ストゥーパ ● 石窟

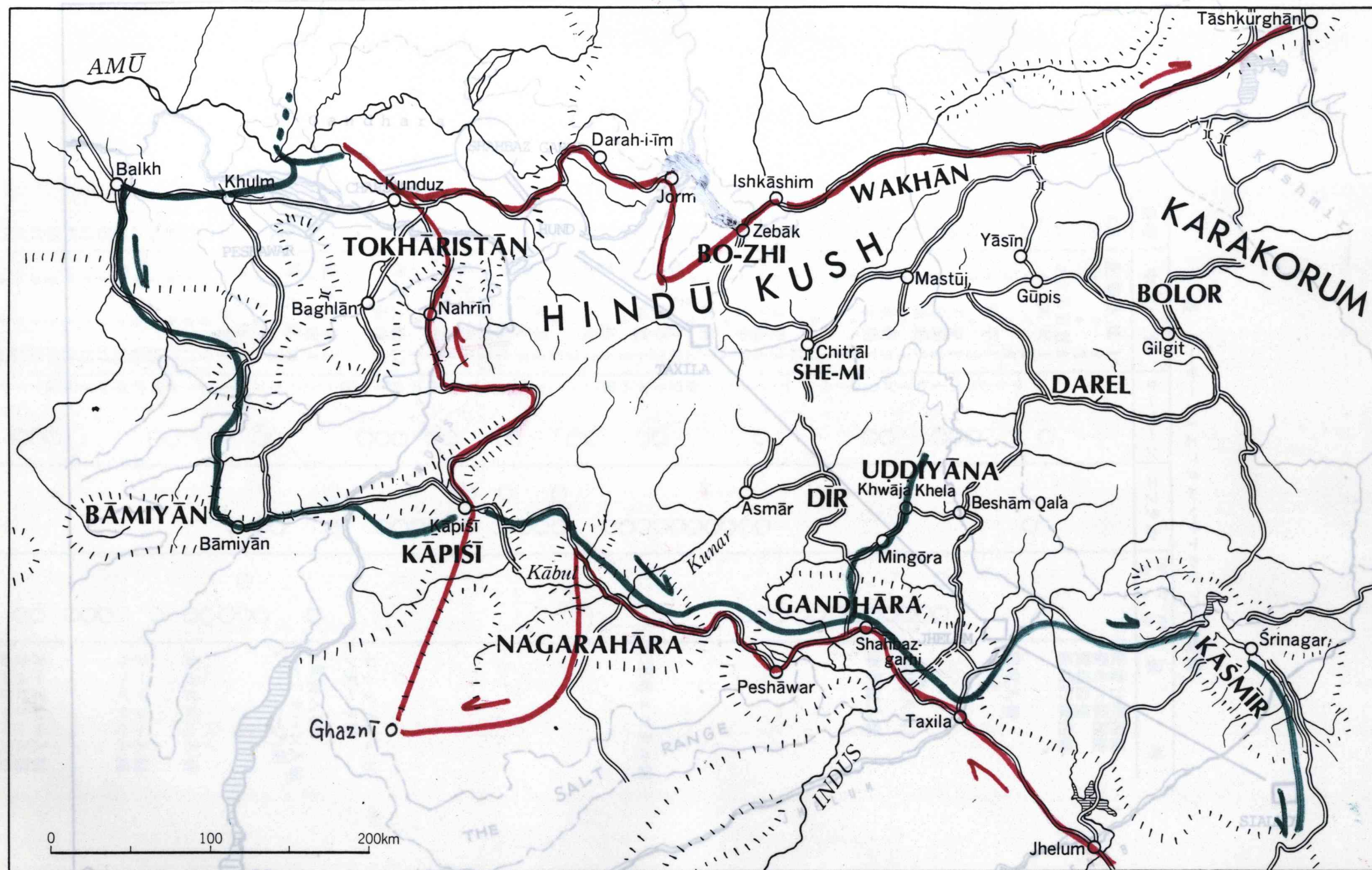










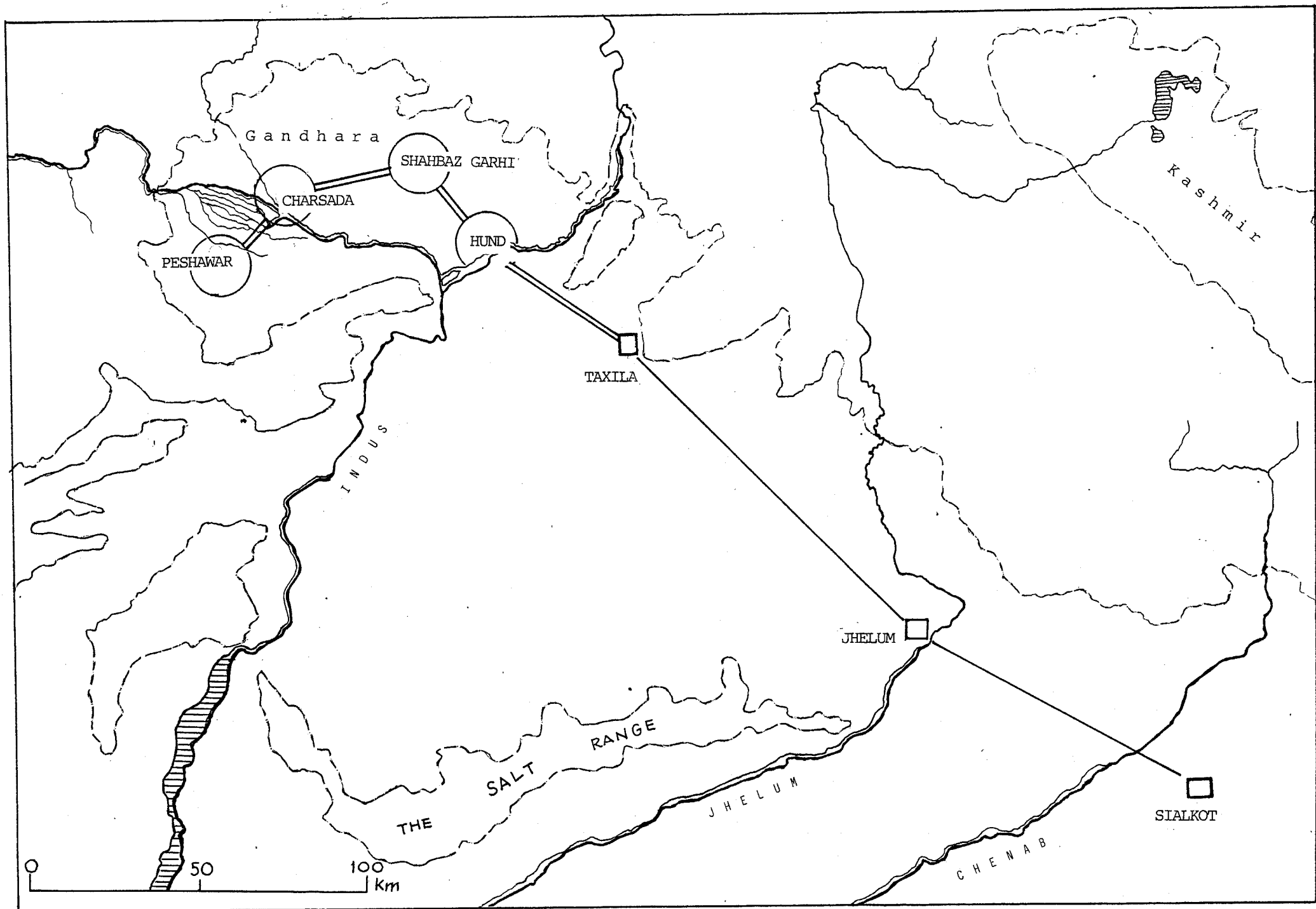


30

玄奘往(一)還(一)路

31

ガンダーラ、カシュミール、シアルコットの位置

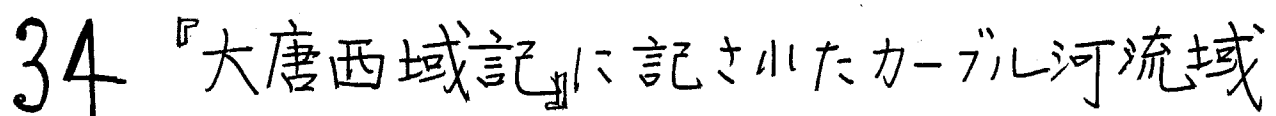


考	備	ルド	マソ	サカ	エフタル	サーサーン	中國	中	西曆
---	---	----	----	----	------	-------	----	---	----

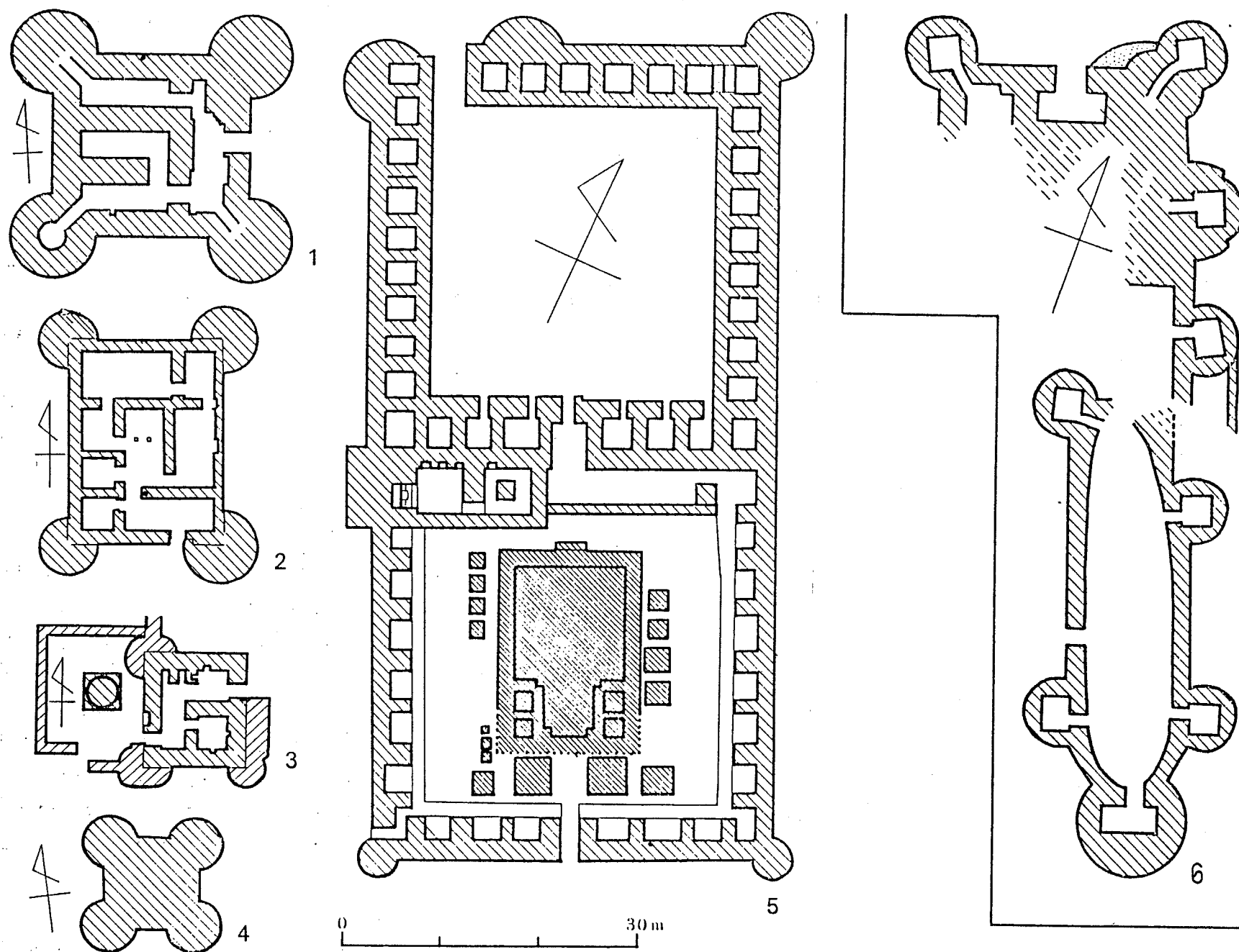
[illegible]

33 (本文中にあり) 701頁参照









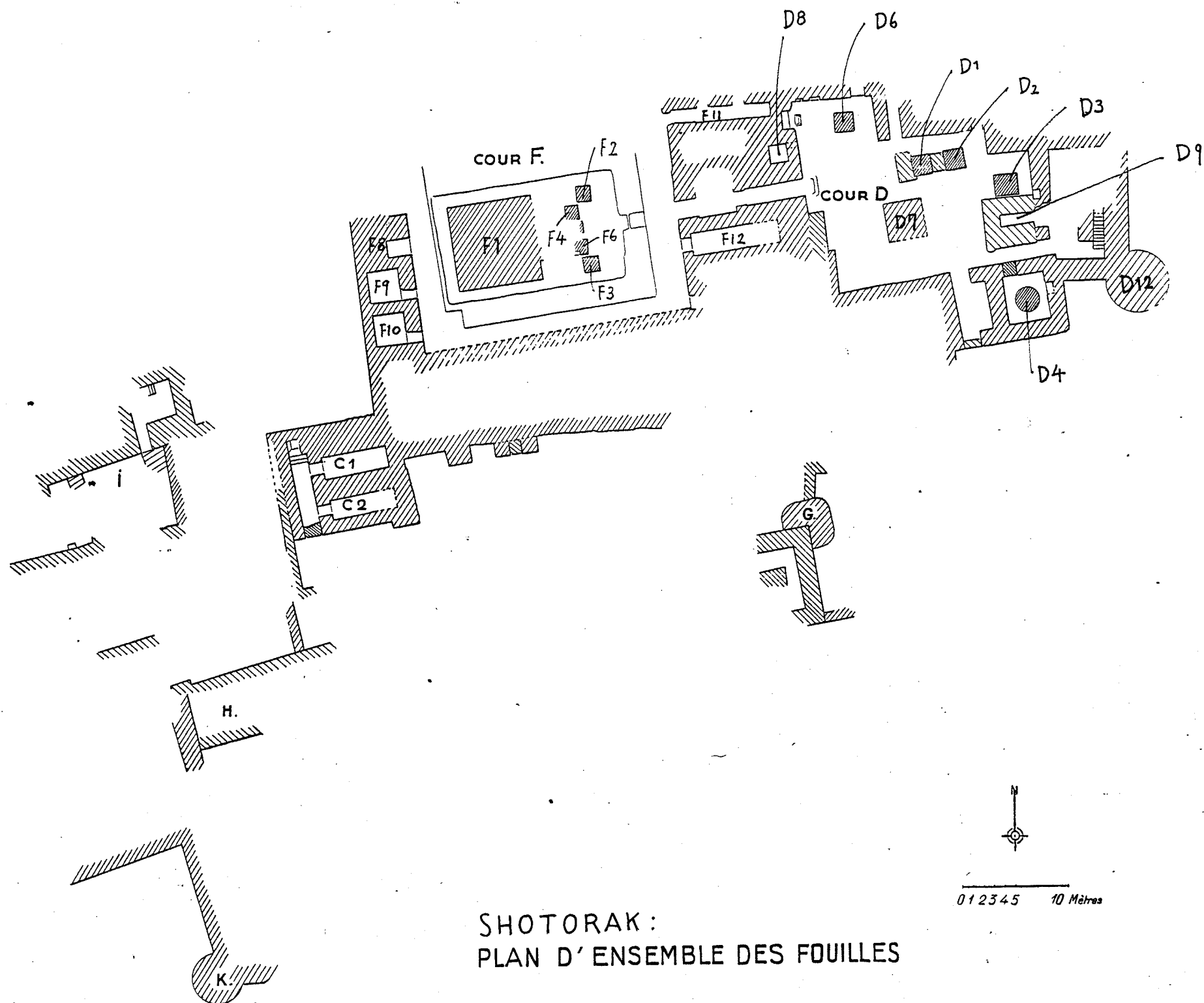
36.

テハ<sup>o</sup>=スキャンダル  
平面図

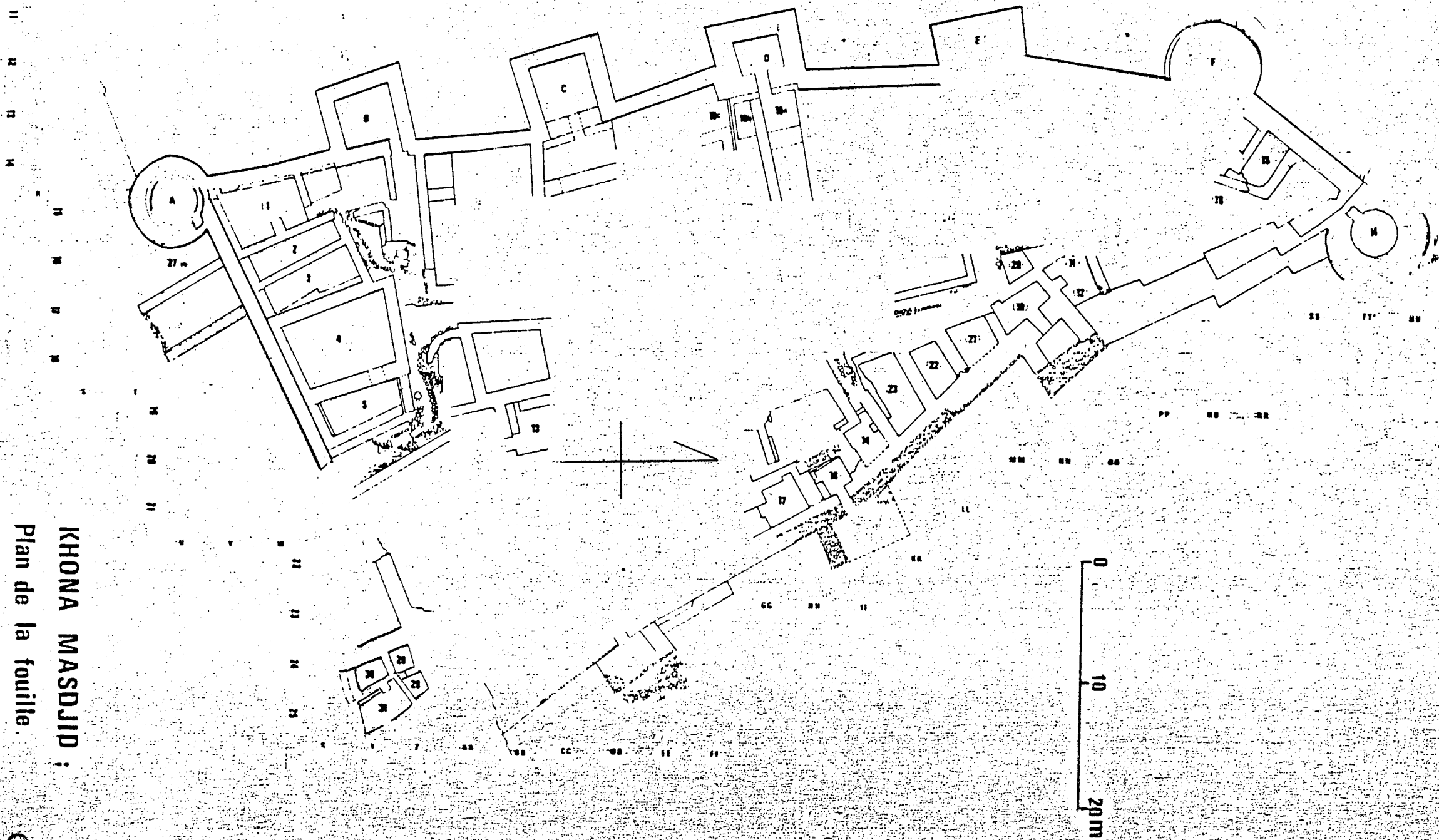
0

100m

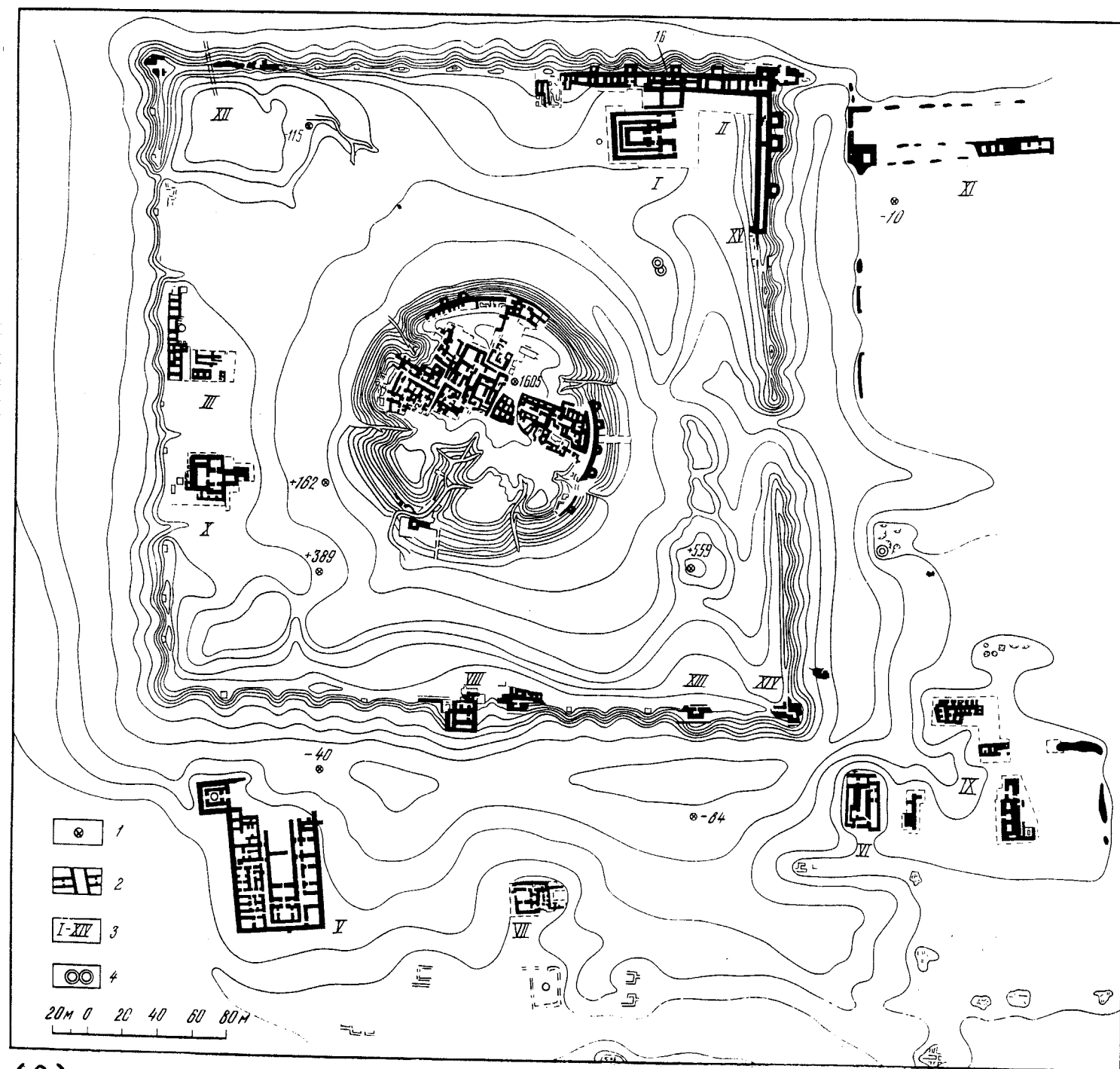
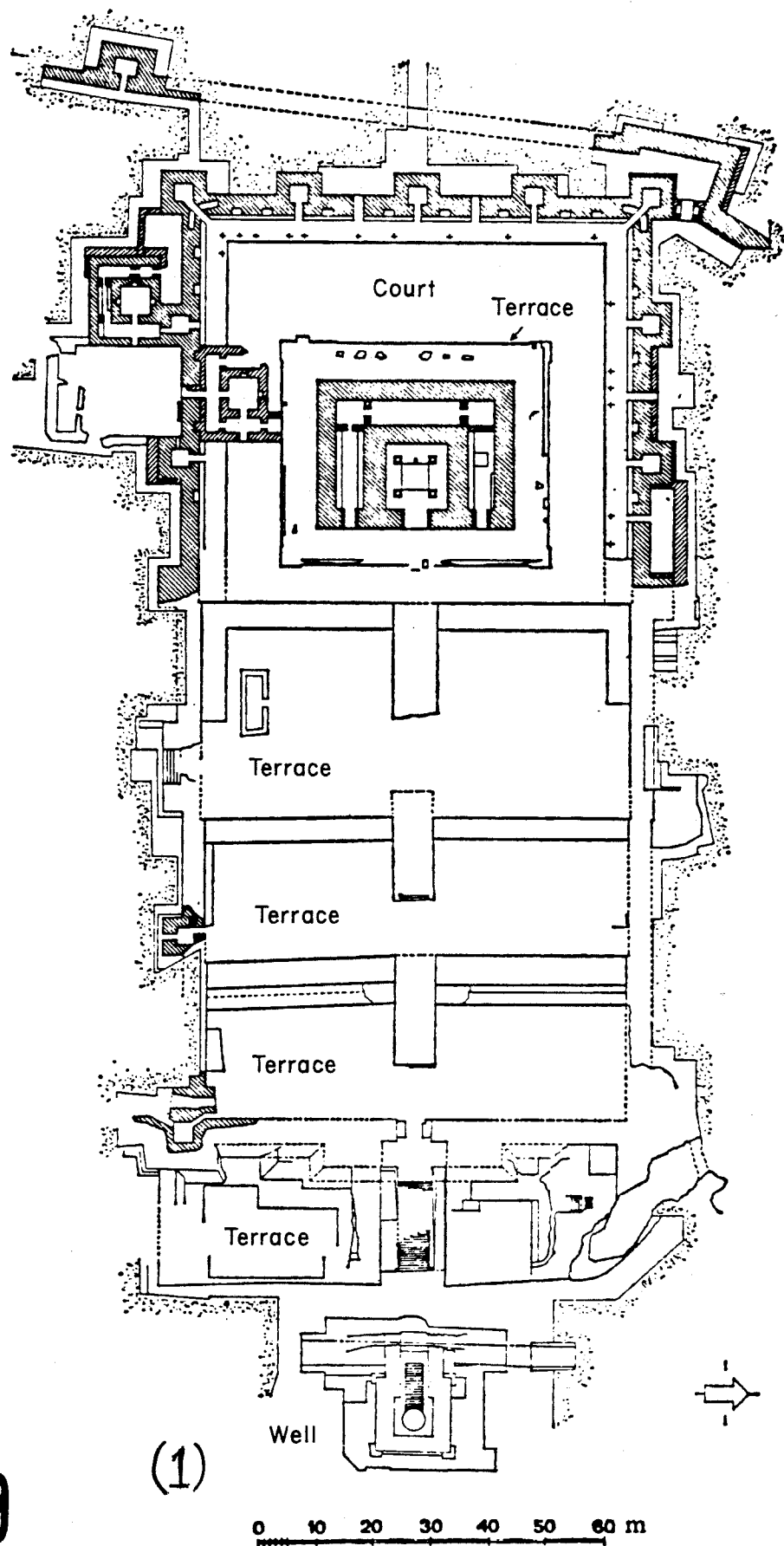




SHOTARAK :  
PLAN D'ENSEMBLE DES FOUILLES



KHONA MASDID :  
Plan de la fouille.



Ри  
жп  
дп  
1 -  
2 -  
3 -  
4

(1) スルフ=コタイル (2) テイルバルジン

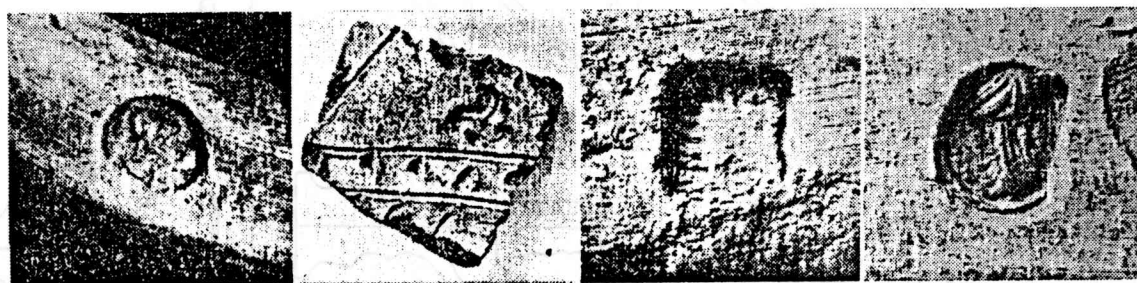




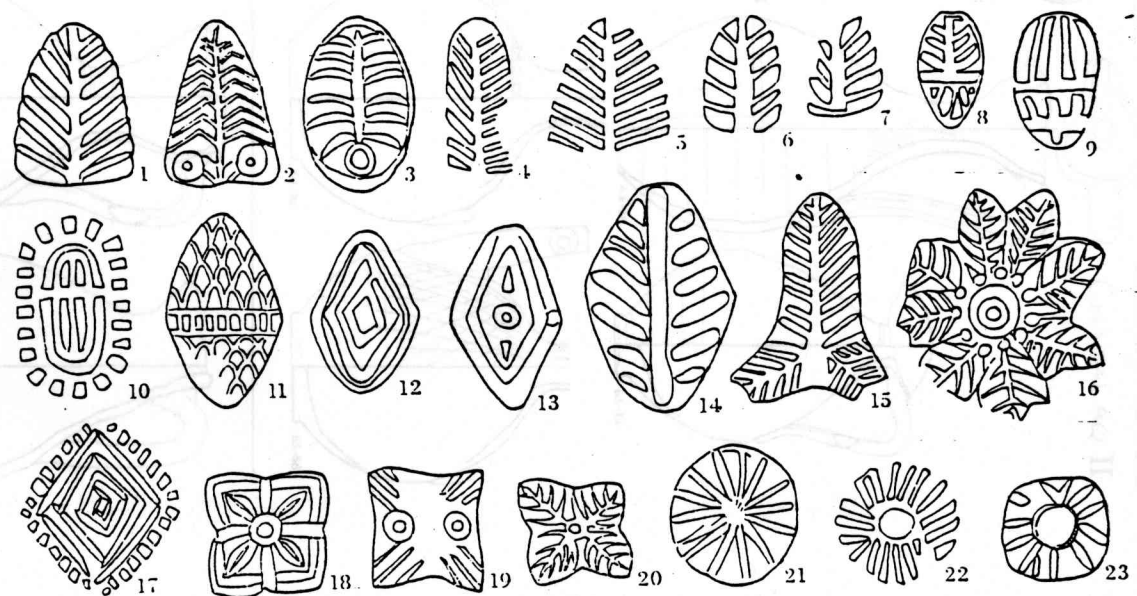
① ② ③ ④



⑤ ⑥ ⑦ ⑧



⑨ ⑩ ⑪ ⑫



# 印 紋

① - ③ チャカラク・テヘ° Ⅱ期

④ - ⑫ チャカラク・テヘ° Ⅲ期

1 - 3 ドゥルマン・テヘ°

11 ”

15, 16 ”

18 - 21 ”

23 ”

4, 5 バルーフ

7, 8 ”

10 ”

12 ”

14 ”

17 ”

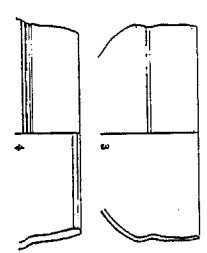
22 ”

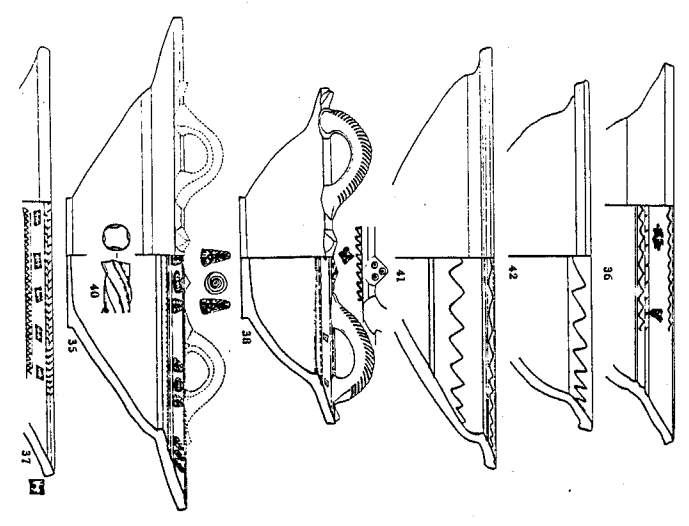
9 カラ・テヘ° (テルメズ)

13 ”

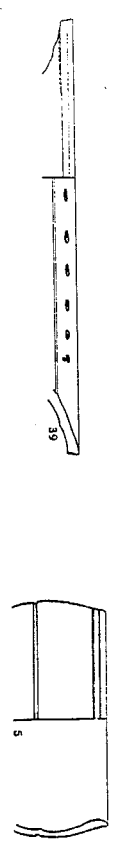
6 シャフレ = バヌー (フルム)



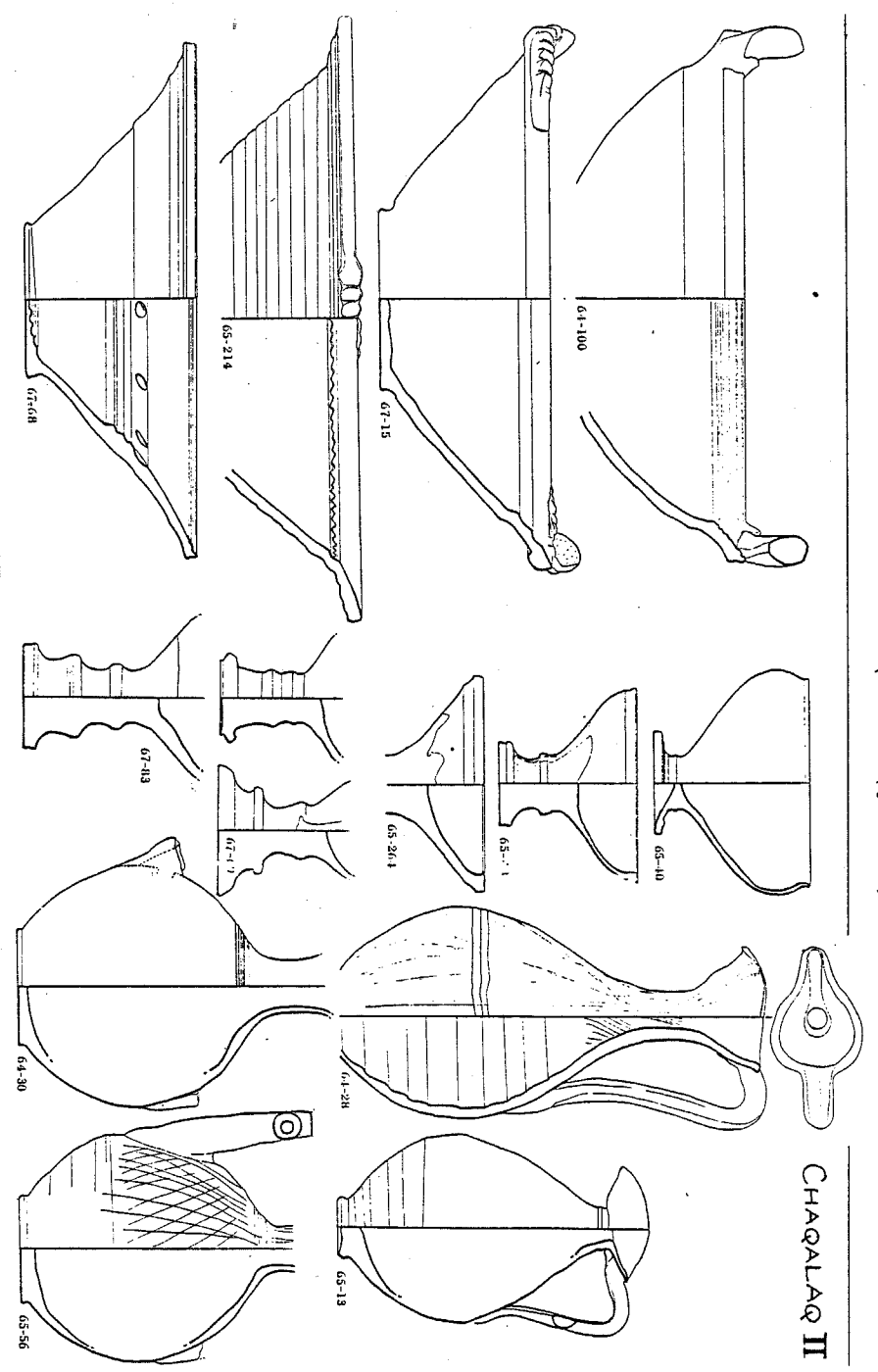
  
 水 求 水 求 水 求



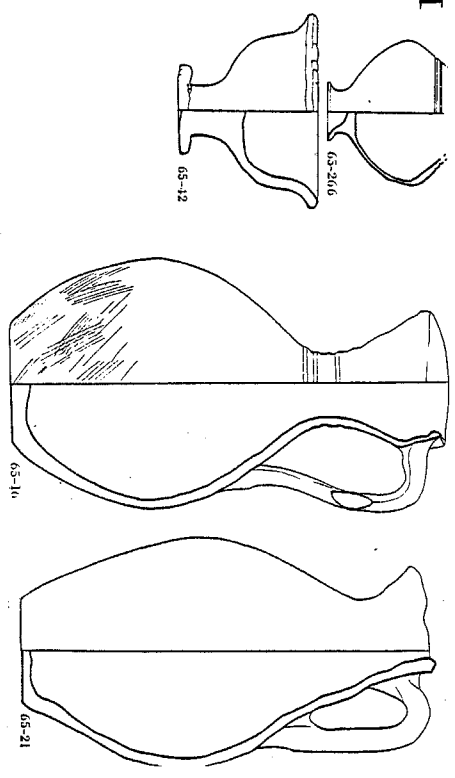
DURMAN III




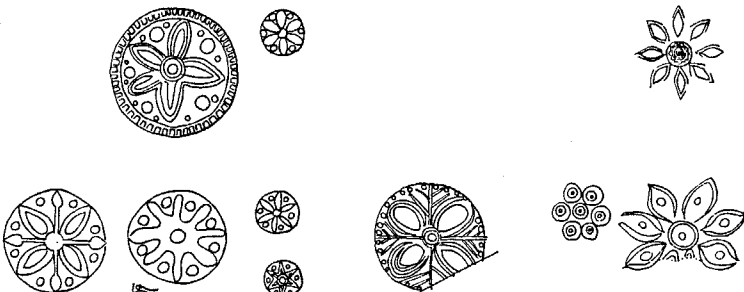


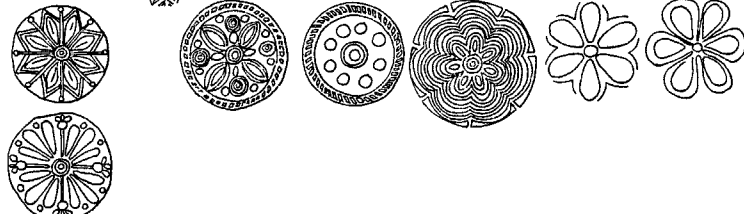


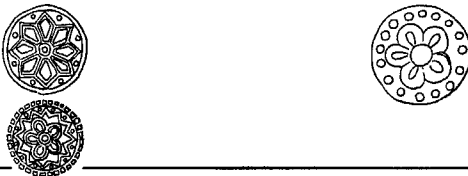



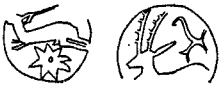


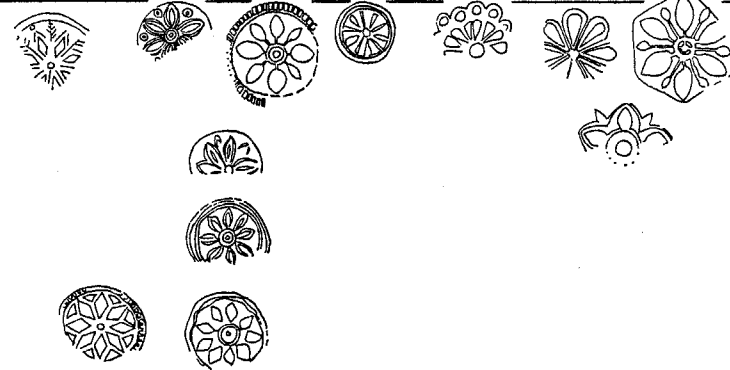
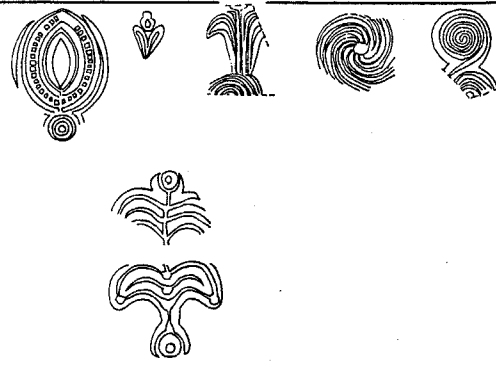
DURMAN IV



CHAQALAQ III



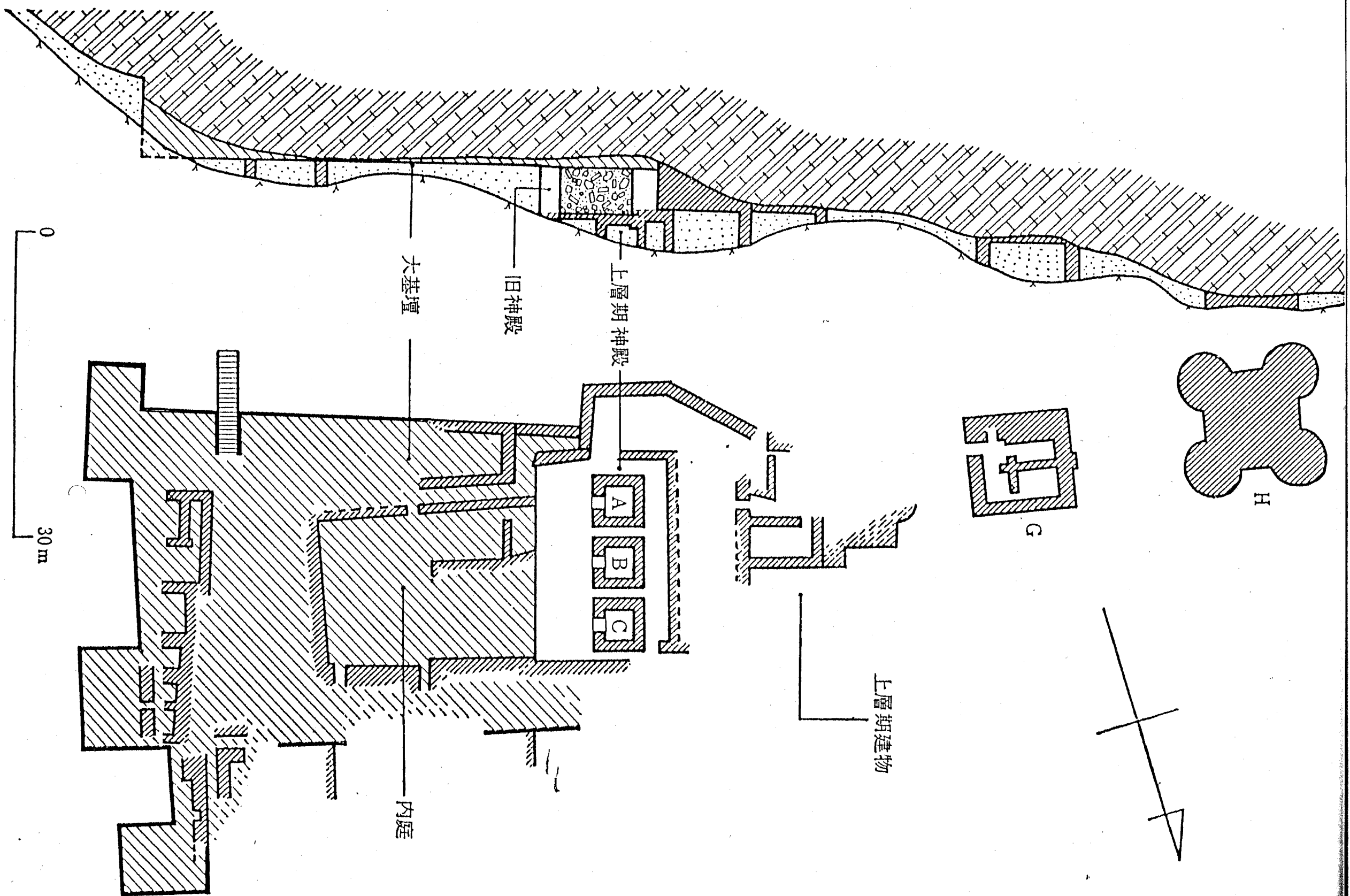
42 (本文中にあり) 859頁参照

	ANIMAL	ROSETTE	PLANT
BEGRĀM III BEGRĀM BAZAR			
SAKA			
TEPE MARANJĀN			
SHOTORAK			
KOHI MORI			
TEPE SKANDAR			

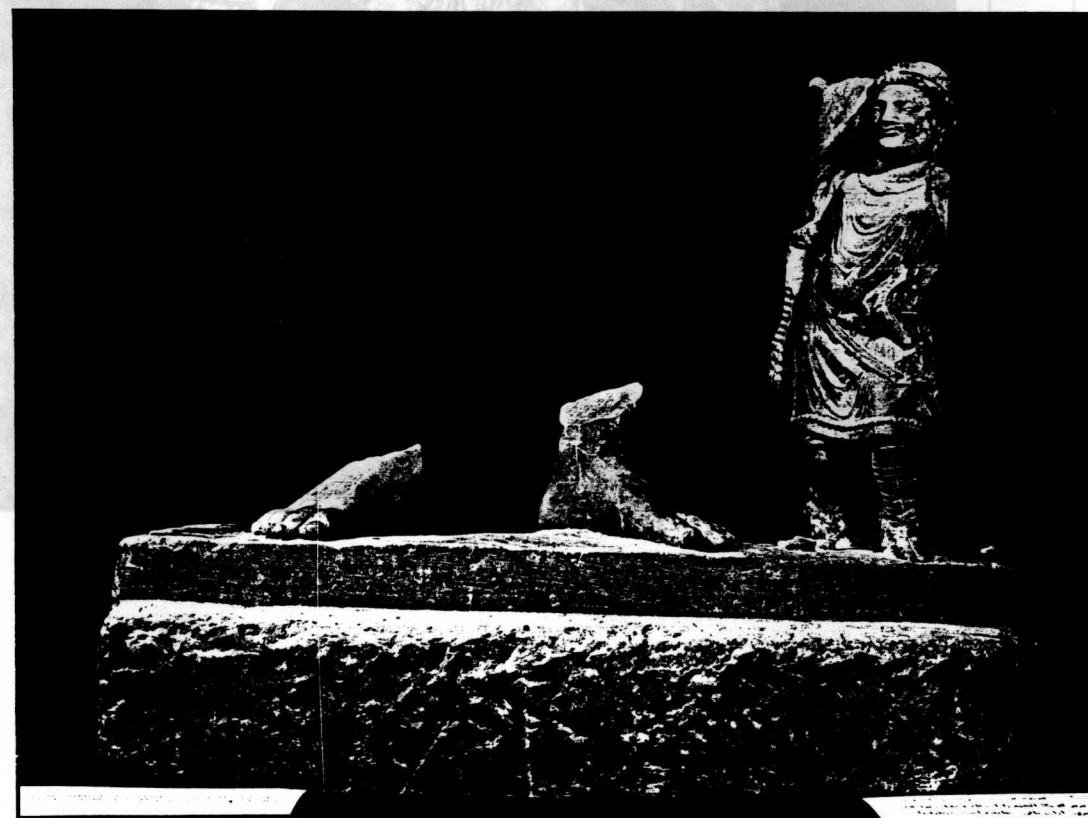
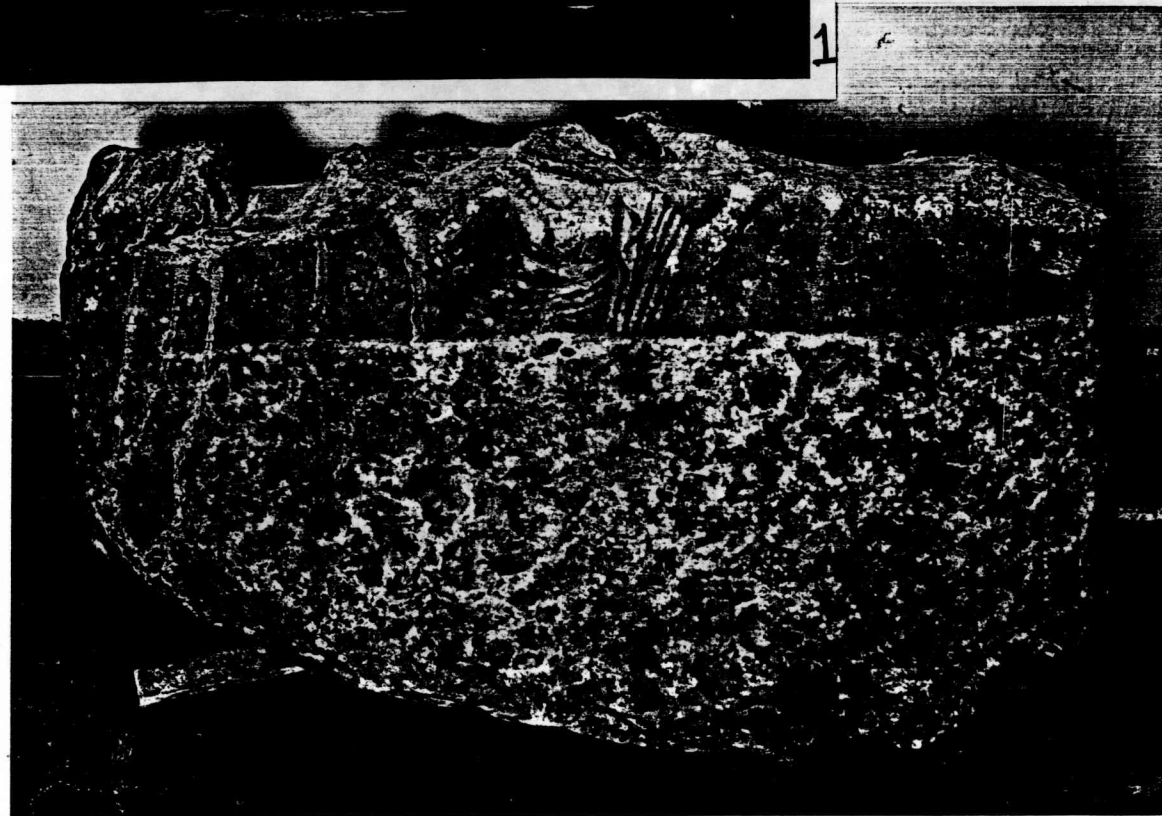
The Stamped Decorations on Pottery in the Kāpīśī-Kābul Region (Scale 1:3)

玄奘の就學狀況

1	阿毘達磨大毘婆沙論	縛 喝 Baikh, 迦濕彌羅 Kāśmīra
2	俱舍論	"
3	順正理論	"
4	藏顯宗足論	摩揭陀, 伊闍毘祇移 Magadha, Irinaparvata
5	集異門足論	至那僕底 Cinabhukti
6	法蘊足論	Kāśmīra
7	施設身足論	"
8	識身足論	"
9	"	"
10	"	"
11	隨發智婆沙	林玄補羅 Matipura
12	衆事分毘婆沙	闍爛達那 Jalandhara
13	辯真論 (薩婆部性論=辯真論)	Matipura
14	說一切有部 - 毘婆沙	羯若鞠闍 Kanya Kubja
15	經量部 -	摩祿勒那 Srughna
16	Aryavama	Kanya Kubja
17	大衆部 - 根本阿毘達磨	毘那羯毘婆沙 Dhanyakatka,
18	正量部 -	鉢伐多 Parvata
19	大衆可毘達磨雜集論	Cinabhukti, Magadha (Nalanda)
20	瑜伽揚聖地教擇論	Magadha
21	顯唯承義莊嚴經論	" (林林山勝軍)
22	大憲成無住因正實論	"
23	大憲成無住因正實論	"
24	大憲成無住因正實論	"
25	大憲成無住因正實論	"
26	大憲成無住因正實論	"
27	大憲成無住因正實論	"
28	大憲成無住因正實論	"
29	大憲成無住因正實論	"
30	大憲成無住因正實論	"
31	百論	磤迦 Takka
32	廣因明正理門論	Cinabhukti
33	廣因明正理門論	Kāśmīra, Magadha, Irinaparvata
34	廣因明正理門論	"
35	廣因明正理門論	"
36	廣因明正理門論	"
37	廣因明正理門論	吠舍釐 Vaisālī
1	Baikh	1.
2	Cinabhukti	4, 19, 33.
3	Dhanyakatka	17.
4	Irinaparvata	3, 34, 36.
5	Jalandhara	12.
6	Kāśmīra	1, 2, 3, 5~10, 34, 35.
7	Kanya Kubja	14, 16.
8	Magadha	3, 19, 20~27, 30, 31, 34, 35, 36.
9	Matipura	11, 13.
10	Parvata	18, 28, 29.
11	Srughna	15.
12	Takka	31, 32.
13	Vaisālī	37.
14	South Kosala	36.



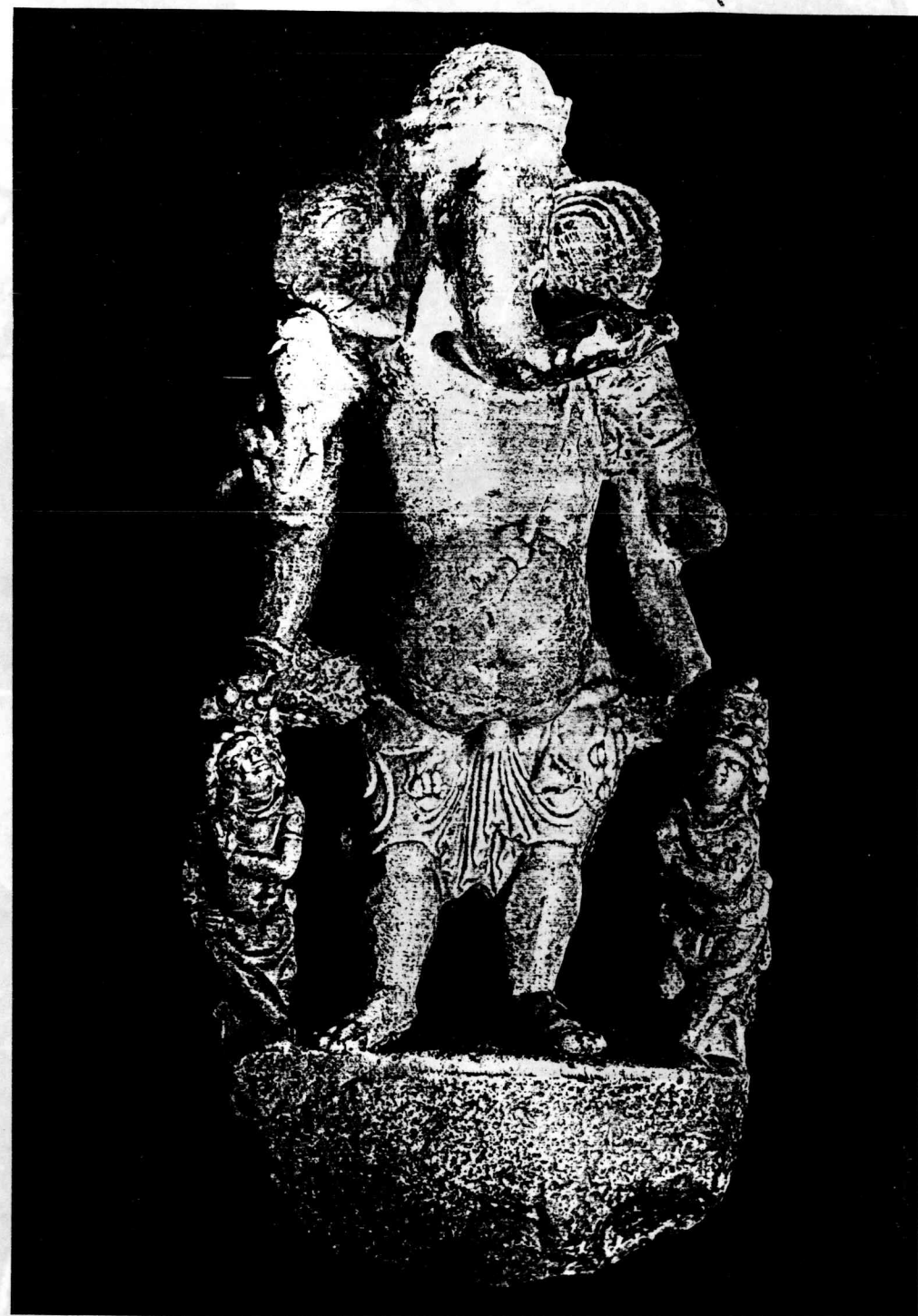
ハイル・ハナ神殿 (MDAFA VII, Pl. I による改描)



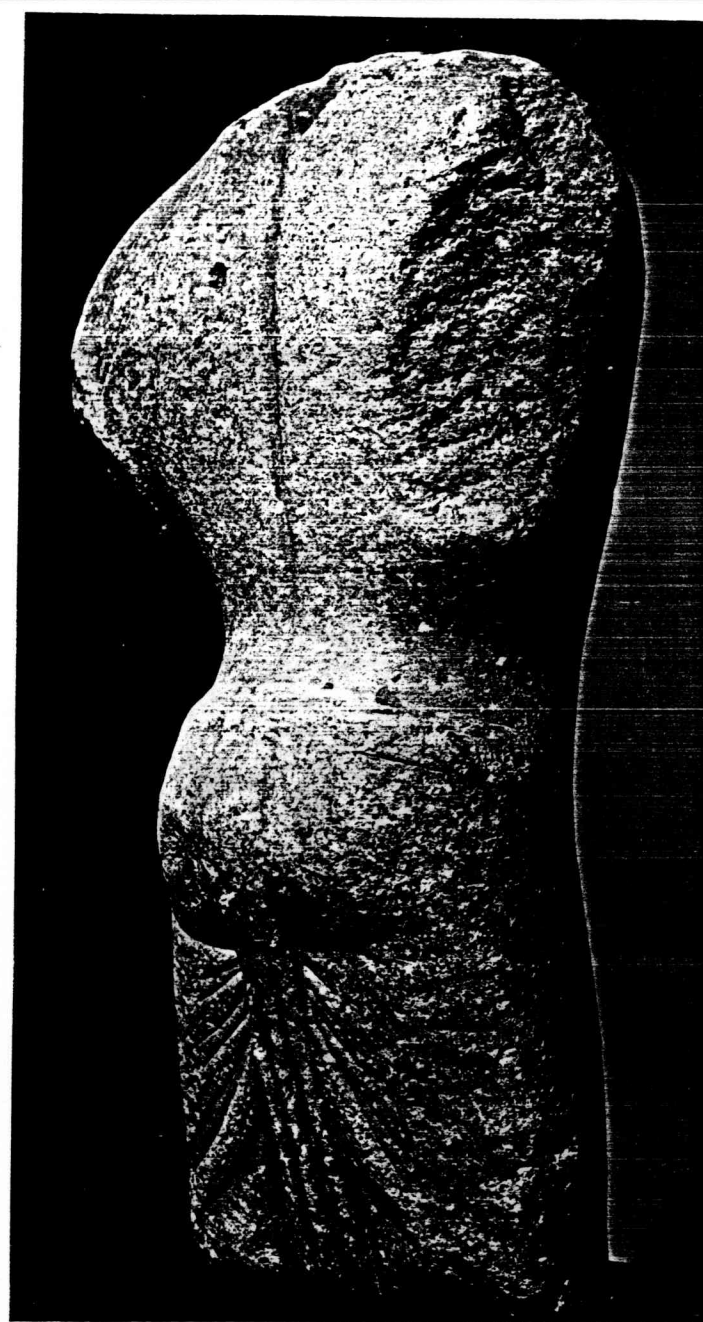




1



2



1



2

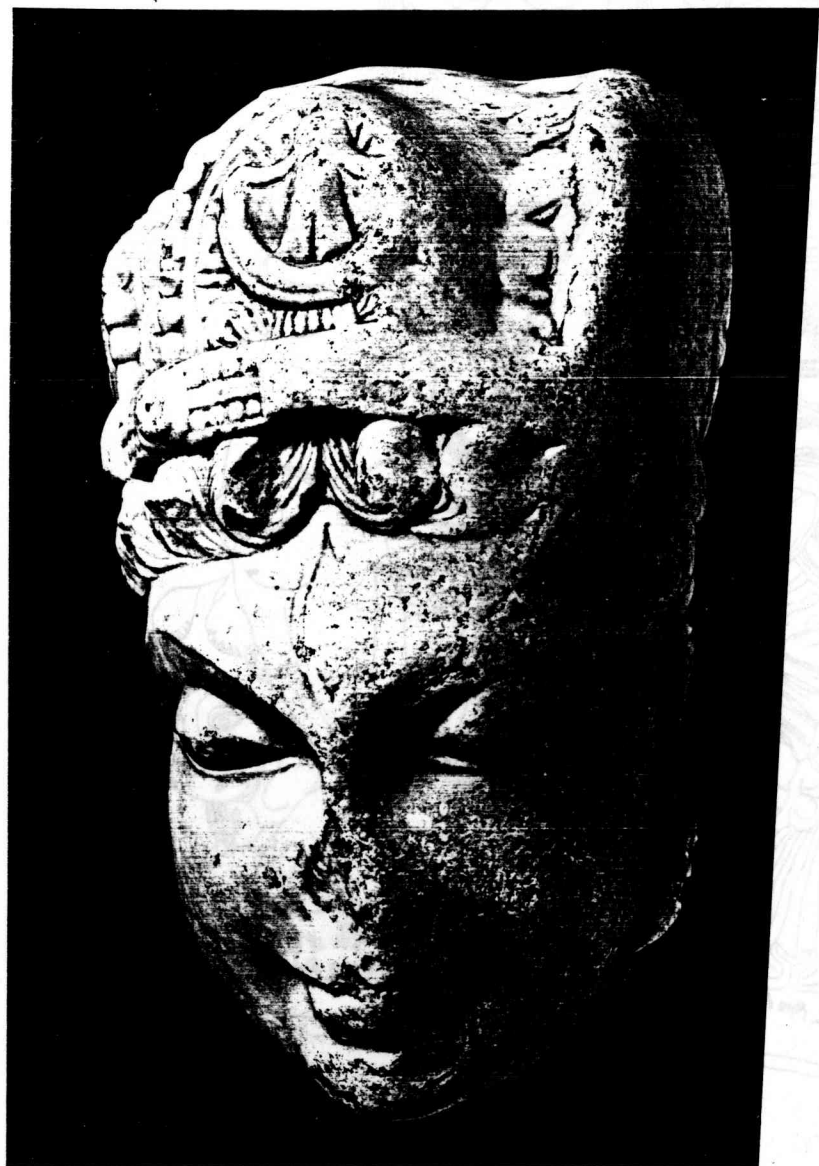


3



4





1



2.

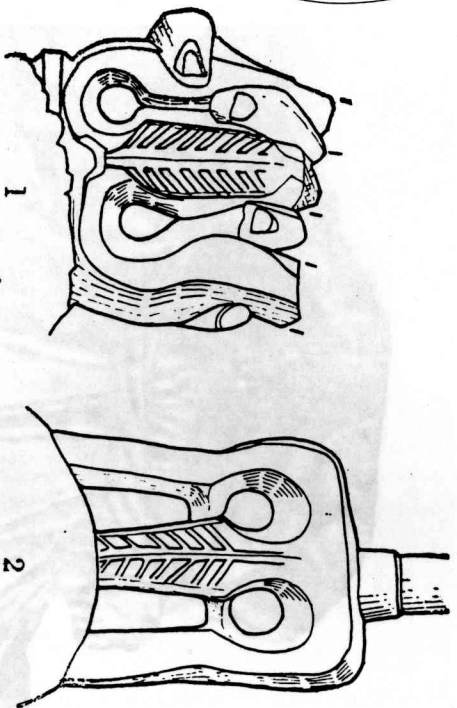


3.

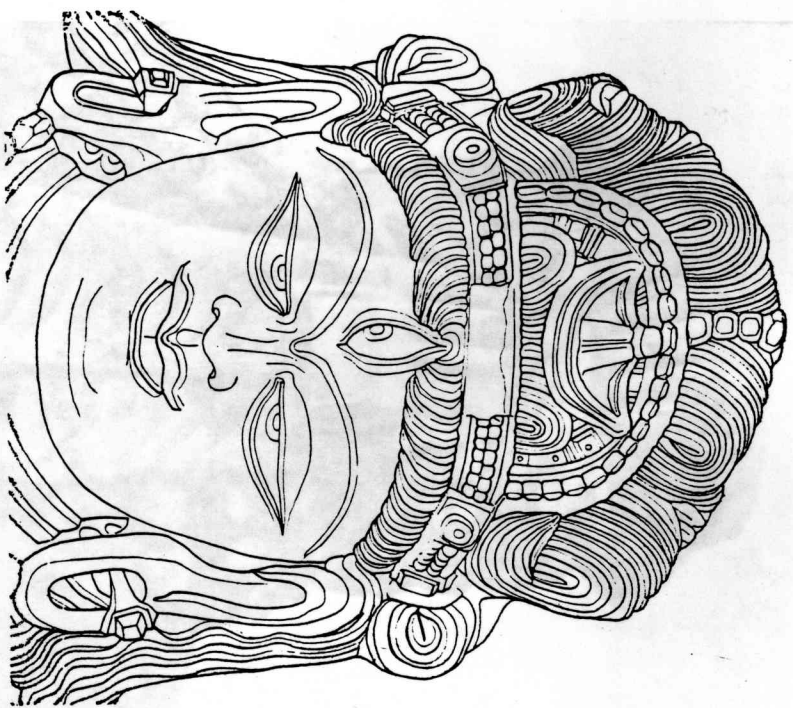


50 ウマ-マハ-シュヴァラ並坐像





Trisūla (1) Umāmaheśvara, (2) Durgā  
from Gardez.



3 Crowned head of the Tepe Skandar  
Maheśvara.



4 Crown of the Gardez Śiva.

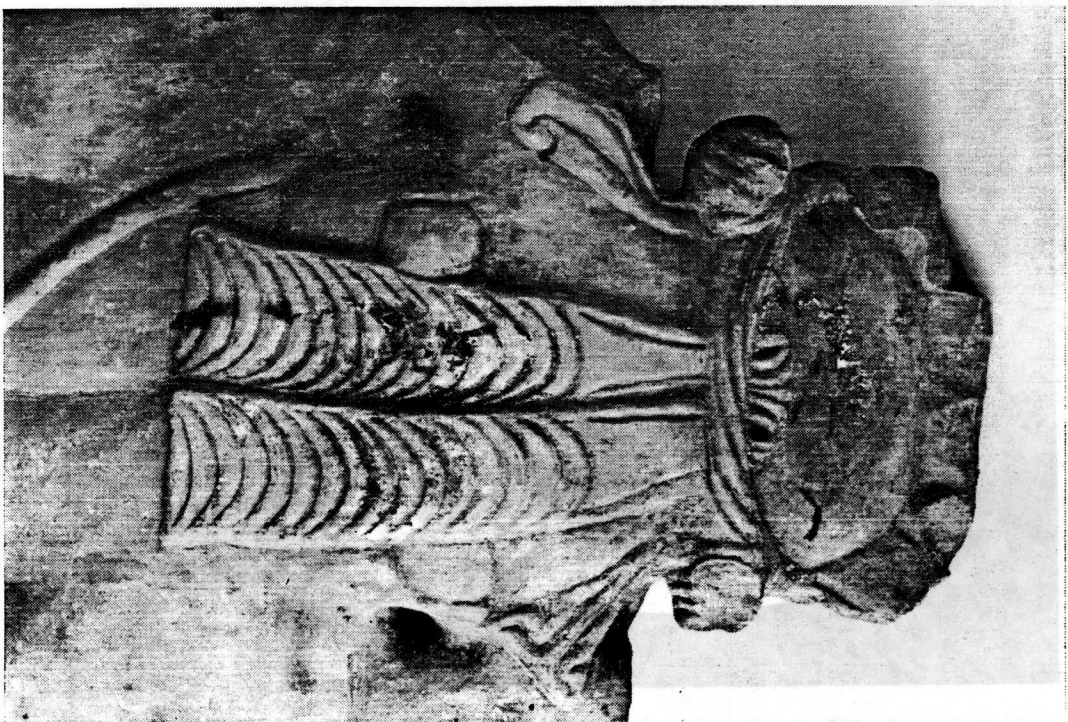


5 Crown of the Gardez Gaṇeśa.

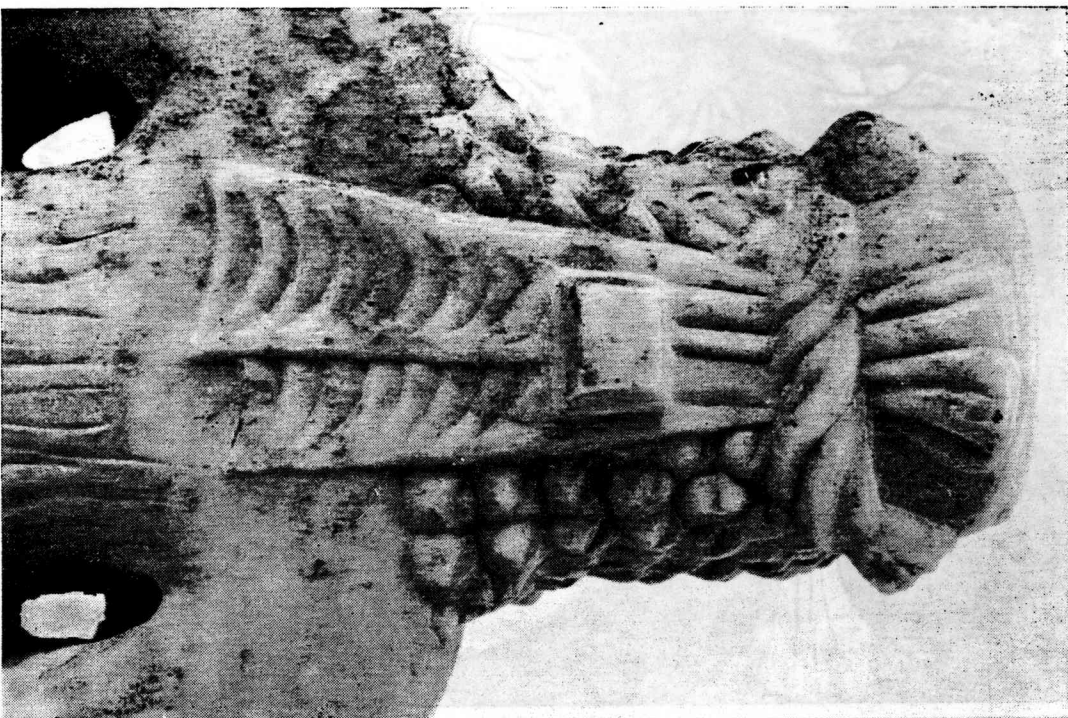


6 Crown of the Khair Khānah Sūrya.

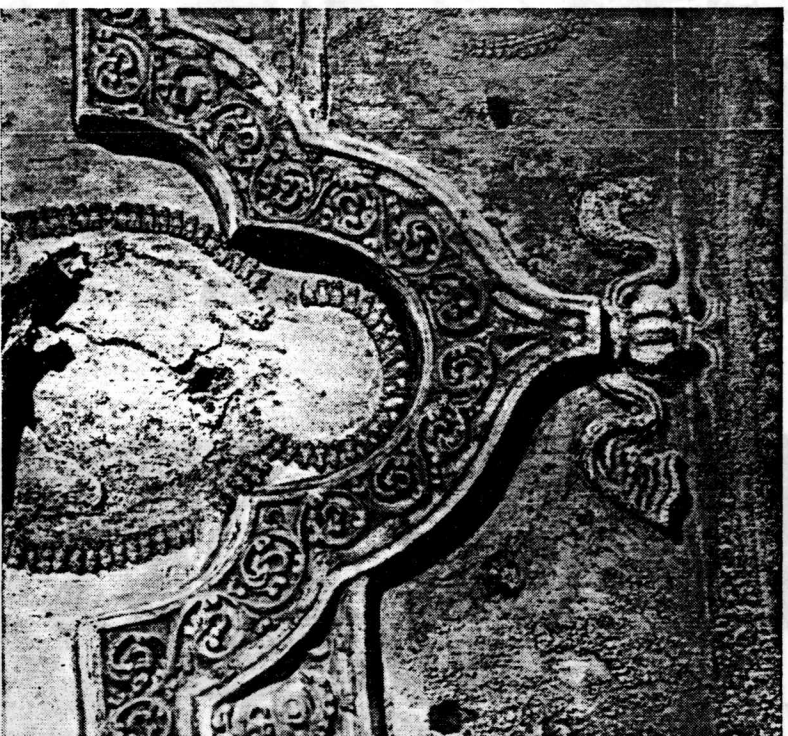




1 Ribbons of the Gardez Gaṇeśa.



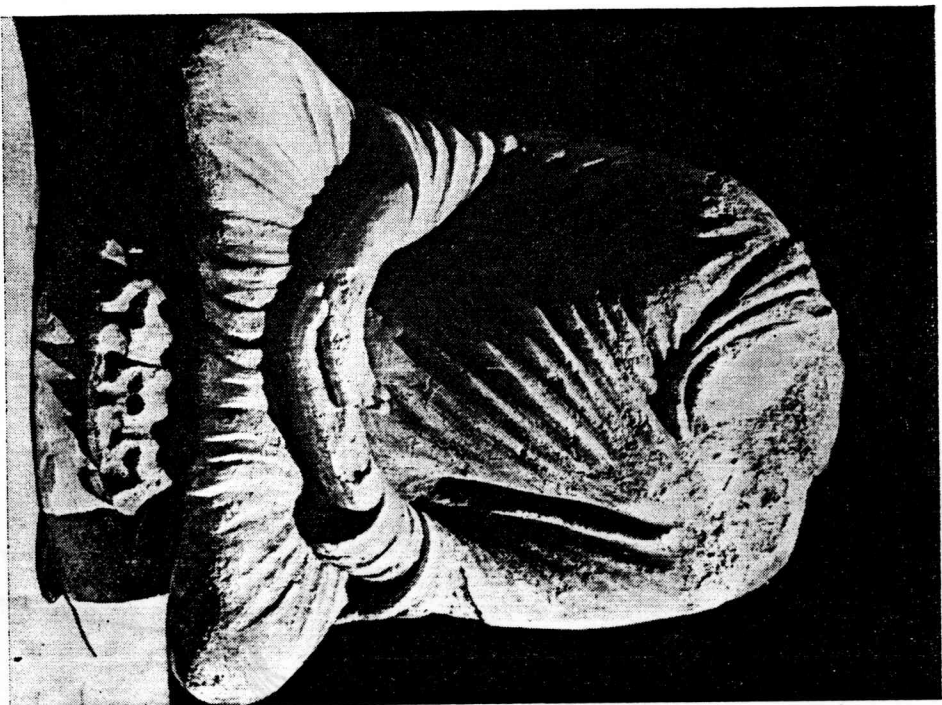
2 Ribbons of the Khair Khānah Sūrya.



3 - A trilobate arch decorated with a scroll and ribbons, Cave I, Bāmiyān.

4 - Fragment of a head with ribbon; from the Gupta period, from the Gupta Museum, London.





1 Seated Buddha, clay; from Cave G. Bamian.



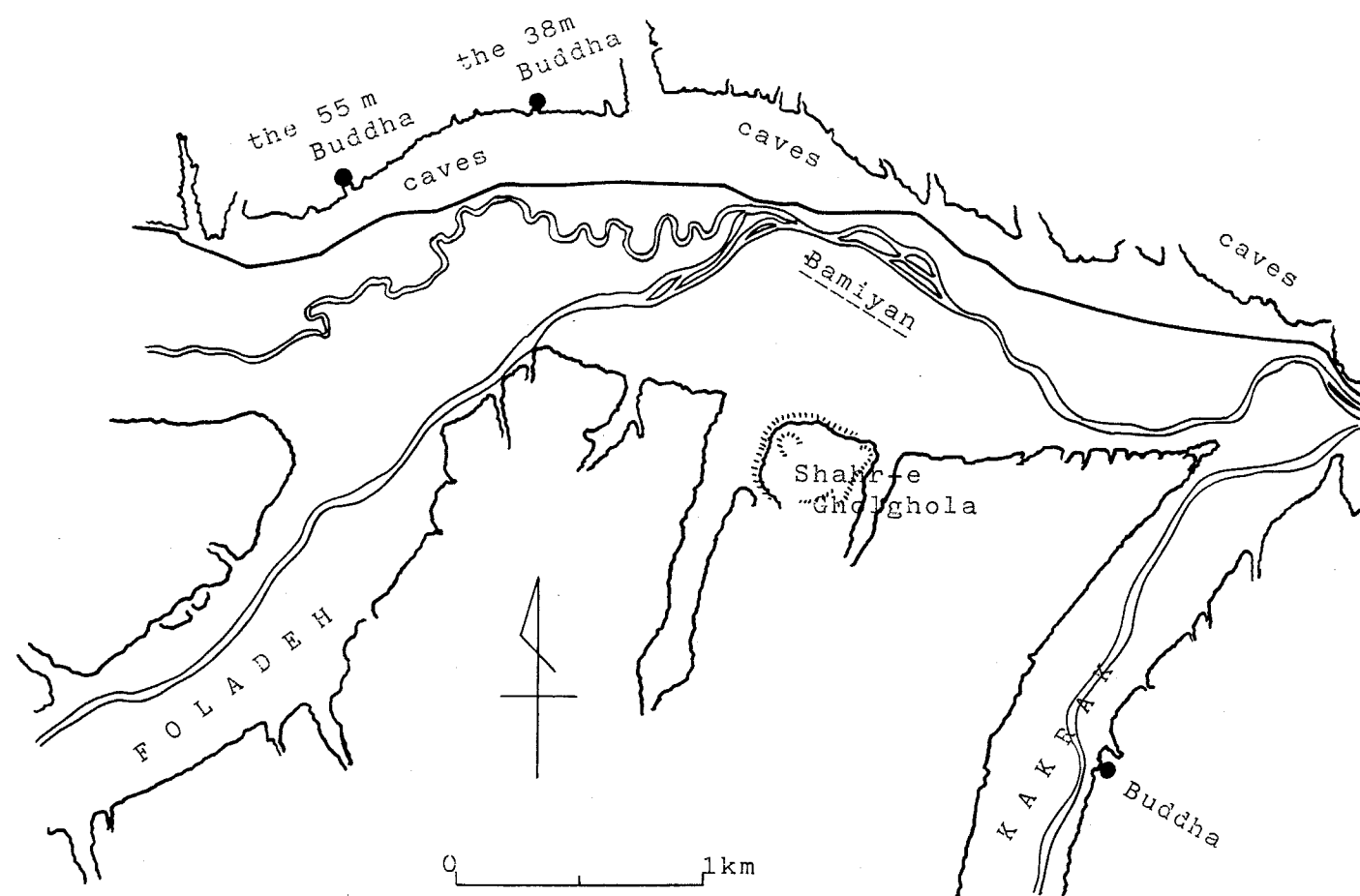
2 A Bodhisattva; from Niche E, Fandukistan. National Museum of Afghanistan, Kabul.



3 - Bodhisattva with ribbons (detail); from Niche D, Fandukistan. Musée Guimet, Paris.



4 - Terracotta head with ribbon; from Ushar. British Museum, London.



# 54 バミヤーン溪谷

2569.0

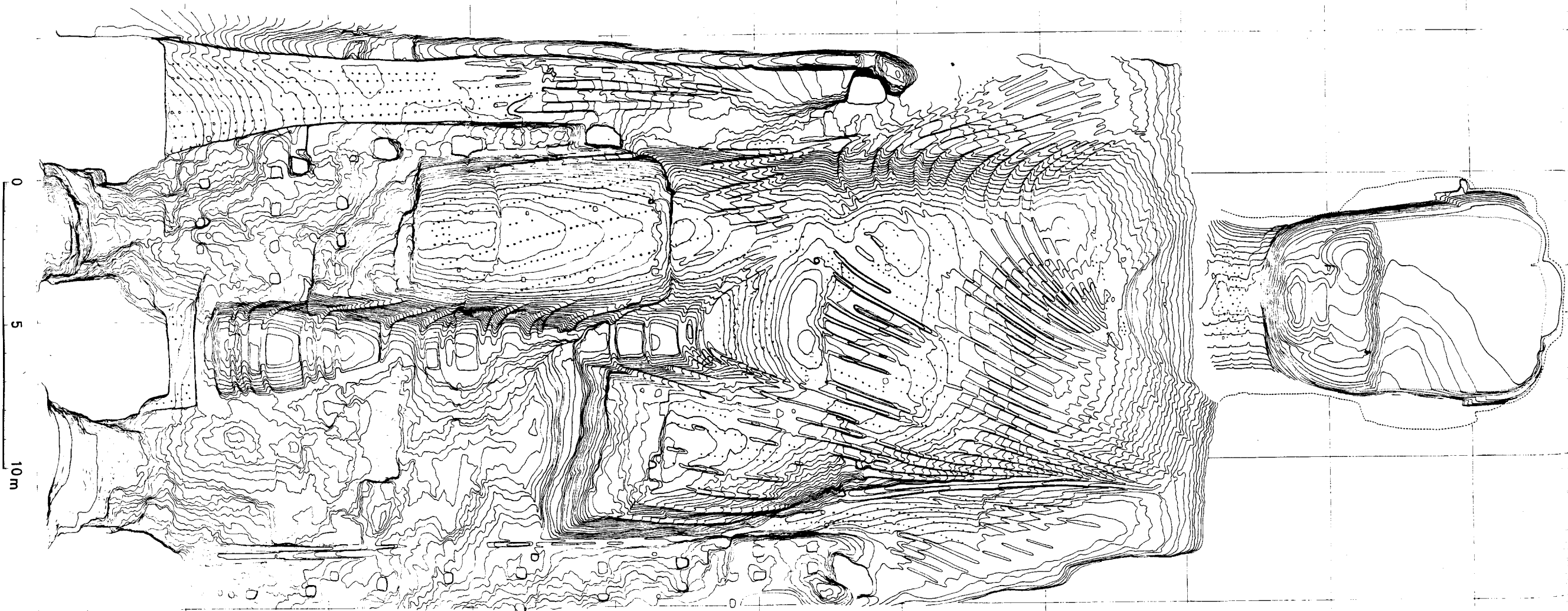
2559.0

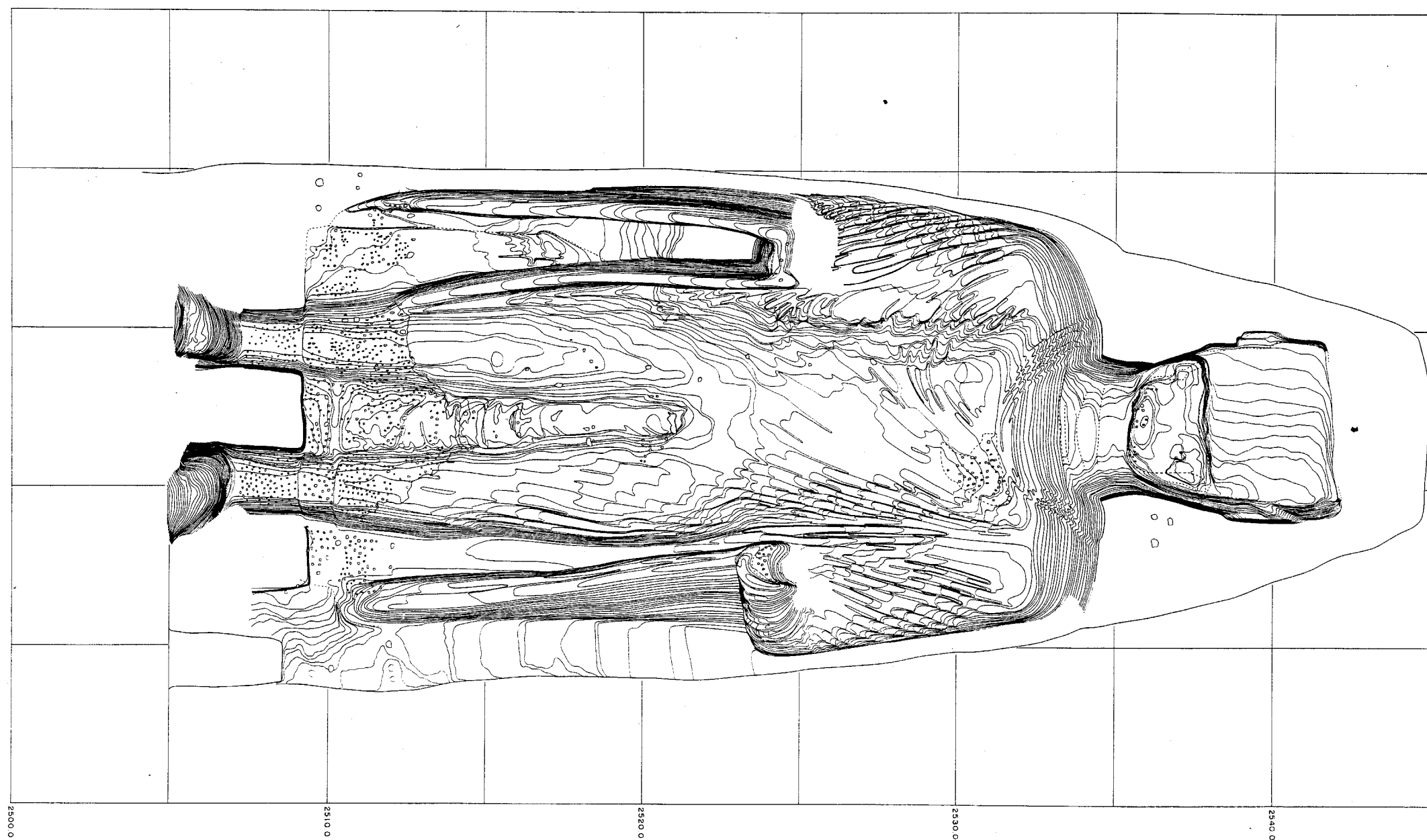
2549.0

2539.0

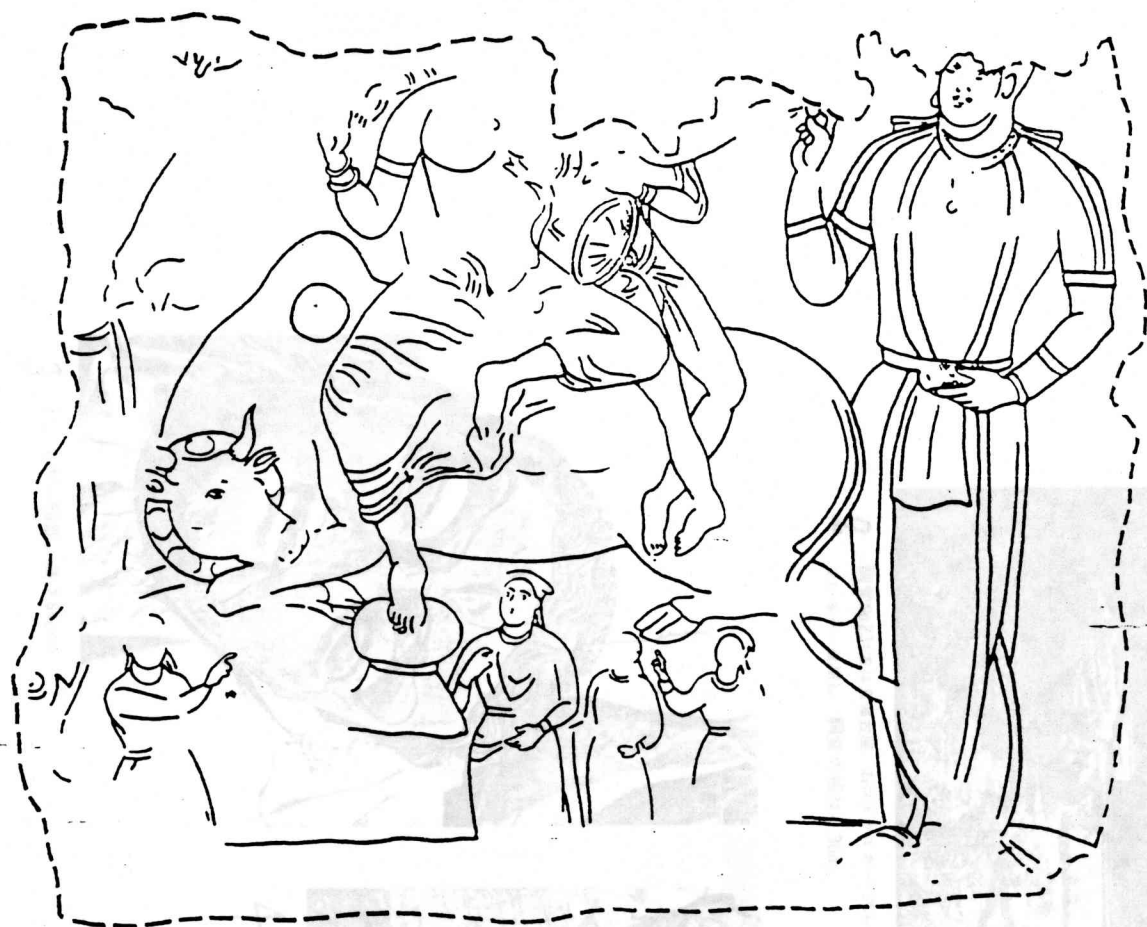
2529.0

2519.0









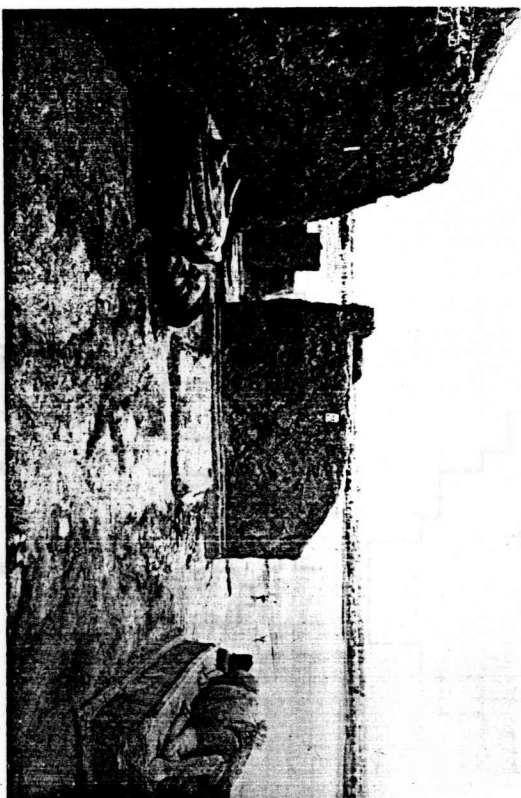
1. シヴァ=パールヴァティー像（壁画，ダルベルジン=カザン=テペ出土，カーブル博物館）



2. パンチカ=ハーリティー像（パシャール博物館）



1 涅槃像



2 祠堂No.23(左は立像台座、右はドゥルガー・グルーア(水牛)の一部。ドゥルガーの頭は床におちている——後期)。祠堂の幅は4.30m。

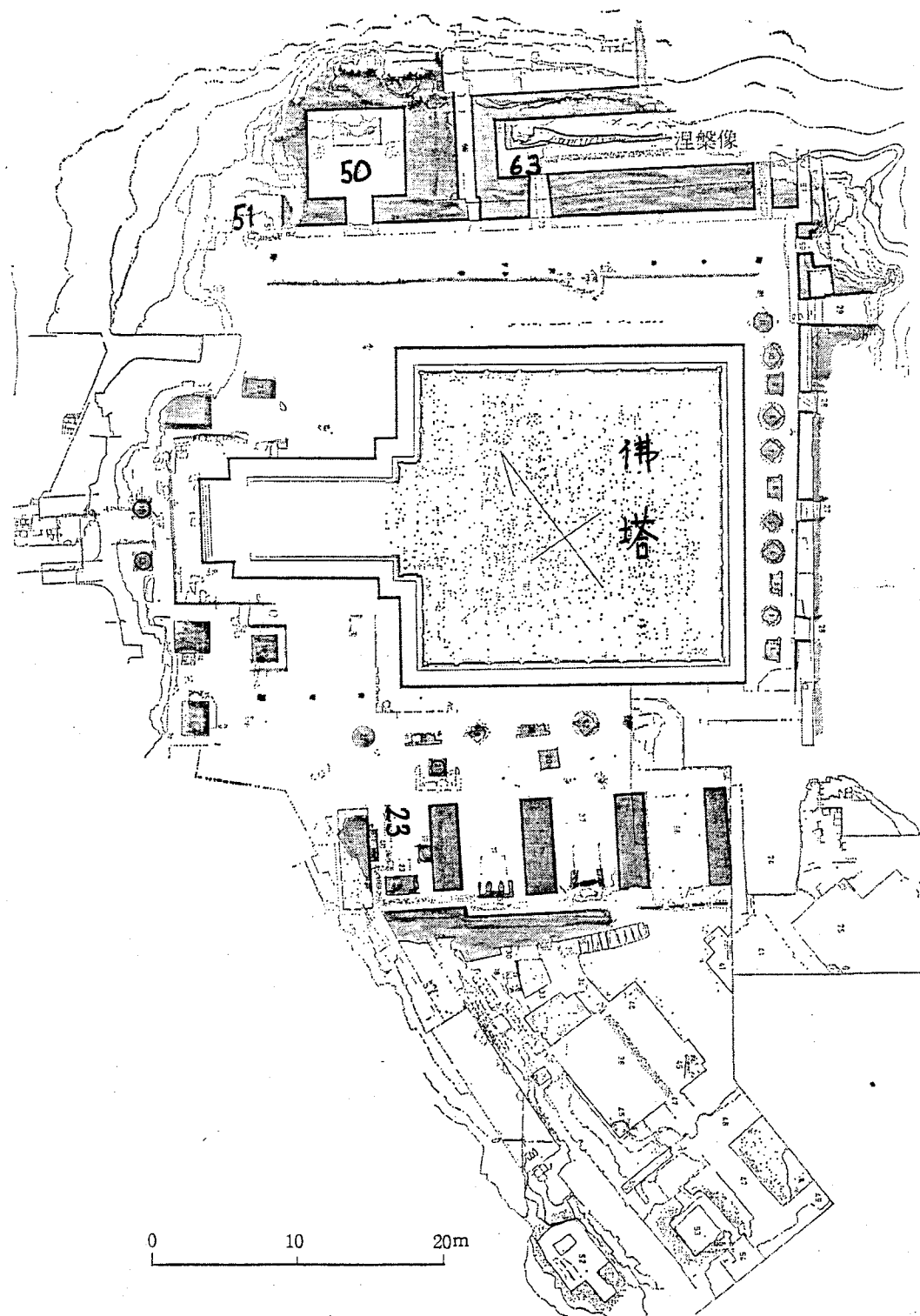


3 ドゥルガー頭部。高さ64cm、

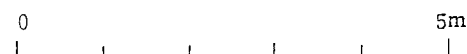
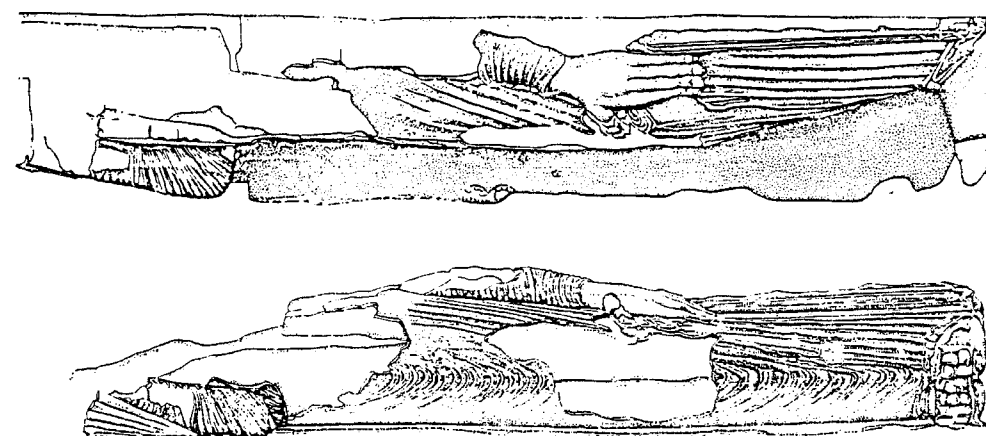


4 ドゥルガー=グルーアの水牛細部、

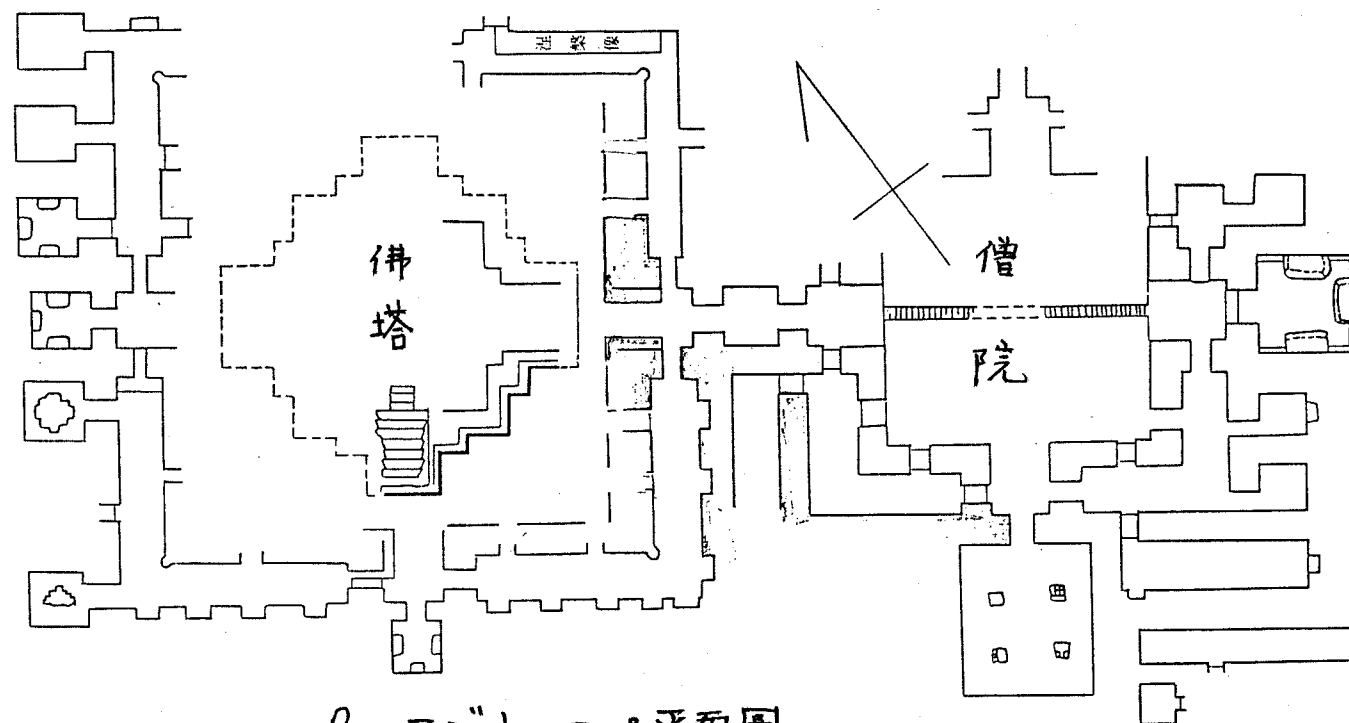




1. タパ＝サルダール（一部）平面圖



2. アジナ＝テペ涅槃像測圖



3 アジナ＝テペ平面圖  
(原図縮尺なし)